

---

# 遊戯王GX 未来からの来た決闘者

K a i

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX 未来からの来た決闘者

### 【Nコード】

N59100

### 【作者名】

K a i

### 【あらすじ】

主人公はなぜか遊戯王5d'sの世界に飛ばされた。カードは全部持っていたどころか何故か魔法が使えた。デュエルでは使わないが、非道な人間には使うDS。そんな主人公が遊星達と出会いチーム・サティスファクションに入った。しかしチームは解散した。三年後主人公は遊星とシテイで再会した、それから遊星達とゴドウィン達ダークシグナーの野望を止めた。

その後イリアステルが過去を改竄するためにWRGPを開催した。それと同時にイリアステルは更に過去の時代に刺客を送り込み地縛

神で三幻魔を奪い過去を改竄する計画を知った遊星達。主人公は単  
身で過去にいきその目的を止めた、主人公は遊星達の  
いる時代に帰らず十代達が居る時代に生きると決め、学園生活を満  
喫する、  
そして二年生になって・・・

## プロローグ

俺は天見大樹

過去に来てイリアステルが刺客を送り地縛神で三幻魔を奪い、都合のいいように過去を改竄するのを阻止に来た

デュエルアカデミアに入学するまで色々な人であった  
遊戯、海馬、ペガサスなどにあつて地縛神やイリアステルのことを話した

もっとも興味を持ったのはシンクロ召喚だけど  
シンクロ召喚は普通に使える  
シンクロ召喚は数年後に出すとペガサスはいった

当分は俺専用だ

デュエルアカデミアで気に入った奴なら使わせると言っている

そしてデュエルアカデミアの入学試験

「クツソ、D・ホイールが途中で故障するなんて」

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ、先生！」

「なぜナーノ。なぜ私があんなドロップアウトボーイニー！」

試験管は変な人だな

まあイエーガーと同じか

「すみませーん、受験番号1番えすけど、バイクがパンクして遅れました」

「だったら今から始めるノーネ」

「ええ」

「「デュエル！」」

「先行は貰います、アレ？」

「どうしたノーネ、今更「いえ、俺の勝ちです」

その言葉に会場が多少煩くなつたが無視

「俺は手札から《墮天使ナース・レフィキュル》を召喚、そして、魔法カード《成金ゴ布林》を発動、一枚ドロ、そして先生は墮天使ナース・レフィキュルの効果で1000ポイントのダメージ、更にもう一枚《成金ゴ布林》を使いドロ、先生はまた1000ポイントのダメージ、魔法カード《恵みの雨》を発動、俺は回復し、先生は1000ポイントのダメージ」

「いったい、どうなつてんの？ネ！？」

「まだ、終わりません、カードを一枚伏せターンエンド」

「もう残り1000ポイントしかないの？ネ、ドロ」

「トラップ発動。《ギフトカード》と墮天使ナース・レフィキュル

の効果で3000ポイントのダメージ、俺の勝ちです」

「ペペロンチ〜ノ〜!!!」

俺は手札に天使の施しがあった、三枚引くと成金ゴブリンがあった、結局1キルか

俺はその場を後にした、そこに

「すげーな、お前、あんなに簡単に勝つなんて、あ、俺は遊城十代」

「俺は天見大樹、大樹でいい、デッキを間違えたんだよ、シンクロモンスターを使おうと思ったけど」

「シンクロモンスター？」

「ああ、新しい召喚方法だ」

「なあ、俺とデュエルしようぜ」

「悪い、今度にそのデッキは忘れたからな、アカデミアで見せるよ、遊城十代」

「10代でいいぜ、大樹のデッキはそのシンクロデッキなのか？」

「いや、基本的に何でも使うぞ、10代と同じヒーローも使う」

「マジか、か〜、早くデュエルして〜」

俺は10代と別れ、家に帰った。

明日香 Side

まさか1ターンで決まるとは、面白い奴が入学したみたいね

## 設定

天見大樹

16歳

前世、つまり遊戯王の世界に来る前の記憶は殆んどない、ある人物にこの世界で生きなさいと言われた。なぜか魔法が少し使える、視覚妨害の結界と物転移しか使えないが。発電能力もある、気に入らない相手は電気で脅している。殺しは多分やらない。遊星達と出会いチーム・サティスファクションに入った。

イリアステルの過去の改竄を止める為に単身過去にきた。

性格は気に入らない奴には容赦がないか、記憶から消してしてしまう  
気に入った相手は面倒見が良かったり、エロネタでからかって弄る癖がある

料理はプロ級しかし休みの日しか作る気が無い  
気まぐれで弁当を作ることがある

服装は和服等が好き、

容姿はタッグフォース4の主人公

D・ホイールを持っておりGXの時代に持ってきている  
その性能は

?夢に出そうなくらい壮絶

?走ってるときはサテライト中が震撼した

?それを巡って何度も危ない目にあっている

？が、そのたびに隠された能力が覚醒してピンチを救った  
？人によってはトラウマを生むほどと、なにやらとんでもない代物  
だったらしい

ブルーノや遊星と一緒に改造して普通のD・ホイールにした

オベリスクブルーとして入学出来たが辞退し、レッドになった

レッド寮の近くで家を転送させ視覚妨害と侵入者を入れないように  
結界をかけた

海馬も了承している（ブルーアイズ関係カードで買収された）

D・ホイールの為に寮の隣に倉庫を建ててもらった

絶版カードをオークションで売っているため資金はかなりある

デッキは何でも使う

スターダストドラゴンとか普通に持っている事は遊星達は知ってる

スターダストとレッドデーモンの混合デッキがお気に入り

## 2話 万太郎？

島について家を転送させ結界を張った

貴重なカードがある為、金庫より結界の方が安全だ

寮には一応暮らしていることになっている

十代や翔には結界のことを話した、どうやら内緒にしてくれると約束してくれた

入るための鍵も渡してある

「へへ便利だな、コレをもってれば入れるんだよね？」

十代達には鍵をリストバンドにつけたものを渡した

「ああ、それを身に着けないと入れないから」

「よし、それよりデュエルしよっぜ

十代にデュエルを申し込まれて校舎にある決闘場でやろうとしたが

「ここは、レッドのよなクズは後、俺達が先に使わせてもらっ」

ブルー生徒達が言ってきた

「じゃあ、そのクズである俺とやろう、手前らは徹底的に叩き潰してやるよ」

俺は連中を挑発した

「威勢がいいな、雑魚の分際で」

連中のリーダー見たいなのが食いついてきた

「十代、少し待ってる直ぐにこの変な髪形を倒すから」

「万丈目さんだ」

「え、万太郎？」

「貴様、いい度胸してるな」

「なに、俺に勝ったら名前を覚えてやるよ」

俺達はデュエルリングに上がった

「デュエル！」「」

明日香      Side

クロノス教諭を無傷で倒した天見大樹が万条目くんを挑発している

(ずいぶんと余裕ね)

私は物陰から彼らを見ていた

「あら、明日香なにしてるの?」

藤原雪乃が話しかけてきた

「あれ、新入生が万条目くんを挑発して、デュエルしてるのよ」

「そうなの、どんな坊やかしら?」

「クロノス教諭をほぼ1ターンで倒し、筆記試験をトップをとった子よ」

「へっ」

「デュエル!!!」

「先行は俺が貰う、ドロー  
ヘルソルジャー  
地獄戦士を攻撃表示で召喚し、  
カードを二枚伏せ、ターンエンド」

「俺ターン、ドロー、俺の勝ちみたいだな」

天見大樹は勝利宣言をした  
あの時と同じようにシモツチバーンだろうか？

「俺は大嵐を発動して、お前の伏せカードを破壊する」

「チツ」

「そして、永続魔法未来融合ーフォーチャーヒュージョンを発動、  
F・G・Dを選択してデッキから五枚のドラゴン族を選び墓地に送  
る、この時墓地からモンスター効果発動する、三枚の白石の伝説の  
効果で青眼の白龍を三枚手札に加える」

「「「ブルーアイズ・ホワイトドラゴン!?!」「」「」」

私達や彼らも驚いていた、あの伝説の青眼の白龍を持っている事と  
それを三枚もあることに

「貴様、何故そのカードを持っている？」

「ああ、表向きでは瀬戸の奴しか持ってないと言われてるだけで、俺も初期の頃に手に入ったんだよ

（嘘だけど）」

「なっ!？」

その言葉にはこのデュエルを見ている皆が驚いた

「すっげー、かゝゝ、早く大樹とやりてえ」

「直ぐに終わらせるさ、俺は融合を発動、現れる青眼の究極竜」

攻撃力4500のモンスターいきなり1ターンめで出した

「まだ、終わりじゃない、手札から龍の鏡を発動して墓地にある五体のドラゴン族を除外して

F・G・Dを特殊召喚をする」

もう勝負は決まったわね、伏せカードはなし、トップクラスの攻撃力を持つモンスターを二体だされた、モンスターを破壊され、直接攻撃を受けて終わり

そう思ったけど

「まだ、終わらない、手札からもう一枚の龍の鏡を発動、青眼の究極竜をもう一体特殊召喚して、魔法カード天よりの宝札を発動!

お互いに手札が6枚になるようにドロウする！言ったはずだぞ徹底的に叩き潰してやるよってな」

二人は手札を6枚になるようにドロウをした

「俺は更に手札から融合を発動、手札にある沼地の魔人王とカオスソルジャーを融合させる、現れる究極竜騎士、攻撃力5000だが、効果により6500にアップ」

場には

F・G・D 攻撃力5000

青眼の究極竜 攻撃力4500

青眼の究極竜 攻撃力4500

究極竜騎士 攻撃力6500

とんでもない光景になっている

「チツ、先行とりサイクロンと神の宣告で伏せカードを対処してDNA改造手術で機械族にして、リミッター解除で3万以上のオーバーキルが出来たのに」

「青眼の究極竜でモンスターを破壊、残りは万太郎に攻撃」

「万条目だ！」

本当に1ターンで終わらせた

「面白い、坊やね」

雪乃がそう言ってこの場を離れた

ブルー男子達は言葉が出ない顔をしている

無理もないわ、レッドだと馬鹿にした相手が青眼の白龍もっていて、5000クラスのモンスターを1ターンで4体召喚したんだから

大樹 Side

「手札に、サイクロンと神の宣告とDNA改造手術とリミッター解除が来てたのに」

「クツソ、行くぞお前たち、貴様覚えていろよ、このか「忘れた」っな！」

「いったたる、俺に勝ったら覚えてやるって、だからお前の事は記憶しない、俺の頭は便利で嫌なことや印象に無いことは直ぐ消せるんだ」

俺はそういいながら奴を無視をして十代達の方に戻った

「すっげー、圧倒的じゃないか、なあ、今度は俺とデュエルやるっぜ」

「アニキ、あれをみて決闘したいんスツか？僕はやだなあ」

しかし、パーティの時間が来たうえに、警備員が来たということ  
十代との決闘は無くなった

十代はドロー運はあるが、この手の運は無いみたいだ

十代とのデュエルは何時出来るかな

### 3話 いい形をしていたからつい

大樹 Side

「おはよう、大樹君」

「おはよう、大樹」

「おう、おはよう、二人とも」

俺達は挨拶をして学園に向かった

「どうしたんすか・大樹君なんか機嫌がいいみたいけど？」

「ああ、いい夢みたからな、後一步のところだったけど」

「どんな夢だ？」

「スツゲームカツク野郎に最後の選択を与えた時の夢かな」

「最後の選択？」

「ああ、

電流をくらい肉体の細胞を毒みたいに死滅させるか

レールガンで四肢をぶち抜くか

ギリギリの電流で皮膚をすべて焼かれるかと言う選択だ」

ちなみに二人には俺が電気を出せる体質だと話した

「それ、やばいから、どんな選択を与えてるんすか？」

「そつだよな、なんか足りないような気がするんだ」

「会話がかみ合っていない!？」

「でも、いいよな大樹は、必殺技見たいのもってって」

「ん、そうか?おおそつだ、思い出した、最後の選択を」

「最後の選択?」

「ああ、電子レンジの応用みたいので、眼球内の水分を沸騰させるか」

「悪魔っすか?あんたは?」

「安心しろ、本当にむかつく相手にしかないから」

「って、やったことあるんすか?」

サテライトにはむかつく奴は腐るほどいたからな、ちび達を苦しめて奴には制裁はした

そんなことを思い出しながら教室に入った

それから、寮に戻った、授業はとんでもなく簡単だった、なめんてんのかといいたいぐらいに

そんな風に思つて鬱になつてるときにPDAにメールが来た

内容は

『丸藤翔は預かった

返して欲しくば女子寮まで来られたし』

なんで女子寮？そう思いながらドアを空けると十代もメールを貰つたらしい

俺達はすぐに女子寮に向かった

そこには翔と四人の女子生徒がいた

なぜか俺はツインテールの子きになつたがとりあえず現状を教えてもらった

「んで、ドユ事？」

翔が覗きをいたらしい、天上院明日香と書いたラブレターを十代と書いてあつたが、なぜ翔に渡り、翔は十代宛て読まず女子寮に向かつたら覗くと勘違いされたらしい

「はあ、んで、お前らはどうしたいの？」

「ねえ大樹、私と決闘しない？  
もし私に勝ったら風呂場覗きの件は多めに見てあげるわ」

明日香と名乗った生徒が言ってきた

「でも、俺にメリットが無いだろう、それに翔は少なからず覗いたのなら既にアウトだし」

「覗いてないっすー」

そうすると雪乃と名乗った女子が近づいてきた、何故かひっかつかる感覚がした

だから、雪乃が近づいて何かを言う前に俺は

「あん!？」

「「「「なっ!？」「「「「

雪乃の尻を堂々と撫でた

そうしたら、ほかの女子が

「ア、ア、アナタ女性のお尻を触るなんてセクハラですわ」  
「なに考えてるよあんた？」

「いや、いい形をしてたからつい」

「あなたはいい形をしていたら、いちいち触って確かめるのですか？」

「いや、いい形をしている尻はそうない、だから、めったなことでは触らないぞ俺は」

俺の返答に雪乃以外は啞然していた、しかし雪乃は

「あら、褒め言葉として受け取っておくわ」

あっさりと切り替えした、その返答に二人は

「ちょ、ちょっといいの？雪乃」

「そうですね、あんなヘンタイは今すぐに先生に言えば」

「あら、私は褒められたし、何も怒ってないは（それに、彼はやっぱり）」

（堂々としてる、やっぱり彼女は）

（（同類））

人を弄って楽しむ性質、それにこいつら弄ると面白そうだ、遊星達は弄りがいが無かったからな

「しかし「あら、ジユンコ達は自分達がいい形をしていないと指摘されて嫉妬してるの？」なっちうちがうわよ」

「冗談よ、そんなに怒らないで」

ボタンと翔が鼻血を出して倒れた

「あら、あのボウヤには刺激が強すぎたのかしら？」

「ふむ、この程度で鼻血を出すとは、本当に覗いたのなら出血多量で血まみれになってるだろうし」

俺達のやり取りに明日香が

「とつとりあず、私と決闘しましょう  
それで勝ったら、今の事も水に流すわ」

明日香は顔を真っ赤にして話を戻した

「それ、天上院の台詞？」

「それ、明日香の台詞？」

俺達は同時に返した

「とつとりあえず決闘よ」

( (逃げた) )

( (面白い) )

もう少し弄りたかったが時間も時間だし

「あいよ、わーったよ」

「デュエル!!!」

「先行は俺、ドロー! 《ダーク・リゾネーター》を守備表示にし、カードを二枚伏せてターン終了」

「見たこと無いモンスターね、私のターン、ドロー!

《エトワール・サイバー》召喚!そして《ダーク・リゾネーター》に攻撃」

しかしダーク・リゾネーターは破壊されない

「なっ、もしかして破壊耐性?」

「まあな、このモンスター1ターンに一度だけ破壊されないチューナーモンスターだ」

「チューナーモンスター?」

「そいえば、十代に言ったなシンクロモンスターの事を少し話したな?」

「ああ」

「なら見せてやるよ、シンクロを」

「私はカードを二枚伏せターンエンド」

「俺のターンドロー！俺は《天使の施し》を発動！三枚ドローして二枚墓地に捨てる！さらに《強欲な壺》を発動！二枚ドロー！《手札断札》を発動してお互い二枚捨て二枚ドロー」

「生還の宝札を発動！そして《ジャンク・シンクロン》を召喚！ジャンク・シンクロンの効果発動！墓地から手札断札で捨てた《ボルト・ヘッジホッグ》を特殊召喚！これにより生還の宝札の効果発動一枚ドロー！魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札1枚をコストに手札・デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！《モノマネ幻想師》を特殊召喚しエトワール・サイバーの攻撃力と同じになる」

「十代、これから見せるぜ、シンクロ召喚を」

「レベル2のボルト・ヘッジホッグに、  
レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！！」

ジャンク・シンクロンが、3つの星となり、  
ボルト・ヘッジホッグの周りを飛び、  
ボルト・ヘッジホッグも2つの星に変わる。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！  
シンクロ召喚！出でよ！！《ジャンク・ウォリアー》！」

光の中から、青い戦士が現れた。

「す、すげえー！」

「シンクロ召喚は、チューナーモンスター1体とチューナー以外の  
モンスターを、墓地へ送る事で、その合計が等しいシンクロモン  
スターを、

融合デッキから特殊召喚する事ができる。これがシンクロ召喚！  
！」

「そして、ジャンク・ウォリアーの効果発動！シンクロ召喚に成功  
した時、

自分フィールドのレベル2以下の攻撃力の合計分アップする

つまりモノマネ幻想師の攻撃力を1200アップ

ジャンク・ウォリアーの攻撃力は3500だ」

「そしてトラップカード発動、リビングデットの呼び声で墓地から  
天使の施して捨てたサイバードラゴンを特殊召喚！

生還の宝札の効果発動一枚ドロ！」

「レベル3のダーク・リゾネーターと

レベル5のサイバードラゴンをチューニング！」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召  
喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

そこには白銀に輝くドラゴンが現れた

「すげえー！」

「「「きれい」「」」

対戦者である明日香ですら目を奪われた

「更に墓地からモンスター効果発動！墓地にある先程捨てたD-I-H E R O デイアポリックガイを除外してデッキからD-I-H E R O デイアポリックガイを特殊召喚！」

「D-I-H E R O?」

「さらに墓地からモンスター効果発動！これも同じく先程捨てたゾンビキャリアの効果は手札から一枚カードをデッキの上に戻しフィールドに特殊召喚する！ただしこの効果を使った後に破壊されたり墓地に送った場合除外される  
チューナーモンスターゾンビキャリアを特殊召喚！  
これにより生還の宝札の効果発動一枚ドロー！」

俺が天使の施しと手札断札を捨てたのは

D-I-H E R O デイアポリックガイ

ボルト・ヘッジホッグ

ゾンビキャリア

サイバードラゴン

(カードの効果をつまく使ってる、墓地からの特殊召喚と生還の宝札の効果はやっかいね)

「すげードンドンモンスターが出てくる」

「レベル2のゾンビキヤリアと

レベル6のD-I-H-E-R-O デイアボリックガイををチューニング  
！！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が友の魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

そこにはスターダストドラゴンと逆に禍々しい悪魔のドラゴンが現れた

「これで俺の場は

スターダストドラゴン 攻撃力2500

ジャンク・ウォリアー 3500

モノマネ幻想師 1200

レッド・デーモンズ・ドラゴン 3000  
だ」

「1ターンで高レベルモンスター3体！」

「モノマネ幻想師をモンスターに攻撃！」

「トランプ効果発動！聖なるバリヤミラーフォース！残念ねっかくそろえたのに」

「いや、俺もトランプカード発動スターライトロード発動！

自分フィールドに存在するカードが二枚以上破壊する効果が発動されたときに発動する事が出来る。

その効果が無効にし破壊する。聖なるバリヤミラーフォースを破壊！そして融合デッキからスターダストドラゴン一体を特殊召喚することが出来る。

あらわれるスターダストドラゴン！」

「……そんな……」

もう一体のスターダストドラゴンが現れた

「さてと仕切りなおしたモノマネ幻想師をモンスターに攻撃！」

明日香のモンスターと大樹のモンスターは破壊された

「レッド・デーモンズ・ドラゴンの直接攻撃！

アブソリュート・パワーフォース！」

「させない！速攻魔法スケープゴートを発動！私の場合には4体の羊トークンを特殊召喚」

「無駄だ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！羊トークンに攻撃！アブソリュート・パワーフォース！そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンの効果発動！」

「え!?!」

「レッド・デーモンズ・ドラゴンはダメージ計算終了時に相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する効果を持つ」

「てことは!」

「羊トークンを全て破壊! デモン・メテオ!」

「なんて効果なの!」

羊トークンはすべて破壊された

「二体のスターダストドラゴンで直接攻撃! Wシューティング・ソニック!」

「きゃあああああ!?!」

これで明日香のライフは0になった

「やったー! 大樹君の勝ちだー!」

「やったな大樹! すごい決闘だったぜ」

ありがとう十代そして翔何時の間にか起きたと突っ込みたい

「ふん、まぐれで勝ったからといって、良い気にならない事ね」

「やめないさいジュンコ、負けは負けなのよ

見苦しい事はしたくないわ、それに私は大樹のライフを1ポイント削れてない」

「そうね、明日香の完敗よ、今回は彼の勝ちよ  
見苦しいわよジュンコ」

「うっ！」

明日香も雪乃も他の奴らと違うみたいだな

「それじゃ、俺達は帰るわ」

俺達は明日香達に別れを言って帰った

3話 いい形をしていたからつい（後書き）

ジャンクウォリアーはいりませんでしたね

そして大樹は雪乃の尻を・・・

## 4話 一ノ褒美

大樹 Side

覗き事件から数日たった

授業がつまらん、暇で死ぬ

そんな風に考えここ数日無気力モードに俺はなっていた

「つまんね〜、なんか事件起きないかなあ？」

「なに、物騒なこと言ってるのよ、あなたは」

「ん？明日香と雪乃？どうした？」

二人が話しかけてきた

「あなた、余裕ね明日昇級試験があるのに」

「昇級試験？」

「ボウヤは余裕なの？他の生徒は焦ってるのに」

「問題ないよ、俺は。ミスしなければ満点は取れるぞ」

「凄い自信ね」

「実技試験は先生とやるのか？」

「いえ、同じ寮の子とやるの、勝敗だけじゃなく内容も見られるわ」

「だったら問題ない（ここの連中は遊星達より強い訳じゃないし）」

「まあ、あなたなら実技なら余裕でしょうね」

「そうね、明日香やあのボウヤ相手にライフは1ポイントも削らず勝ったんですもの」

「二人はどうなの？」

「私は何とかなるわ」

「私も同じね」

「そうか、俺はこれから新しいデッキ作るけど、お前らも来る？」

「新しいデッキ？まさかそれを明日に使うの？」

「相手にもよるけどな、どうする？」

「ボウヤのデッキは興味あるわね」

「私もあるわね」

「じゃあ、俺の部屋に行くか」

「へー！！」

「あら、お上手ね、自然に女の子を部屋に連れて行くなんで」

雪乃はわかってての返事に対して明日香は別の意味と捉えて顔を真っ赤にしてる

その反応があるから弄るのをやめられない

「そういうこと」

「二人ともなんて大食いね」

「ちよっ、こっこれってそういう誘いなのか？」

「「ナイス反応」」

「……あなた達ねえ」

「仕方ないだろう？」

「そうねえ、あんな反応されたら？」

「「弄るしかない」」

「はあ、もういいわ」

明日香を弄り終え俺達は俺の部屋と言うより家に向かった途中に十代も誘い、結界のことを話した  
つか順応早い、精霊や闇のゲームがあるから仕方ないけど

大樹の部屋と言うより家ねコレは、結界の事は驚いた  
それに家も一人暮らししては大きすぎるぐらいの家  
見た目は和風で3LDKぐらいはある、突っ込みたいことは多々あ  
るが止めた

私たちは部屋に案内され、そこで大樹のカード所有数に驚いた

「十代にはコレ」

「見たこと無いHEROだな」

E・HEROエアーマン

E・HEROプリズマー×2

E・HEROアブソルトZERO×2

ガードロック×2

「すっげ〜効果だ、いいのか貰って?」

「ああ、いいぞ」

あのカードで十代のデッキはかなりパワーアップしたはず

「それで、お前らのデッキを見せてくれ、何か十代みたいに渡せる  
カードあるかもしれないから」

最初は自分のデッキを作ると言っていたがいつの間にか私達のデッ  
キ強化になっていた

「いいの、そんなことして、私達はライバルなんじゃないの？」

「うん？デッキが強くなるのを見ると気分がいいからな、それにお前らならしっかり使えるだろうし」

「雪乃のデッキは難しいな、他にデッキを使いたいとか考えは無いのか？」

「そうね、ボウヤが決めて頂戴、私に合いそうなデッキを」

「そうだな、ならローズデッキでいいかな」

「あら、素敵ねバラなんて」

「たしか、構築済みがあったな、はいこれ一応確認しといて」

「ええ、ありがとう」

デッキ丸々あげた、どうなってるのよ？

その後、私のデッキはサイバーガールと聖なるバリヤとかを残しデッキ構築に入った

「聖騎士ジャンヌとターレットウォーリアにあと復讐の女戦士ロースだな、それに・・・」

一族の結束だろう、トラップの候補コレかな・・・」

私の知らないカードばかり出てきた効果をみたらどれもとんでもない効果カードばかり

その上、シンクロモンスターも加えてくれた

《一族の結束》と《聖騎士ジャンヌ》で攻2400になる上相手に破壊されたとき手札を捨てることで墓地からレベル4いかの戦士族を手札にもどすことが出来るなど、その効果でレベル2のチューナを捨て次の自分のターンに《エンジェル・リフト》で特殊召喚し直ぐにレベル4の手札に戻したカードでシンクロ召喚ができるなど

大樹のデッキ構築レベルはかなり高いと直ぐに判断できた

大樹が加えたシンクロモンスターは

ギガンテックゴーレムは切り札としての効果が凄い、終盤なら攻撃力が4000を超えてもおかしくないモンスター

X X - セイバー ヒュンレイはシンクロするのにチューナ以外の X - セイバーは少し痛い相手の魔法・トラップを三枚破壊できるのは魅力的

X - セイバー ウルベルムはダメージを与えれば相手の手札一枚をデッキの一番上に戻せる効果も使える

他のカードもかなりいい効果があった

ターレットウォーリアは自分場の戦士族を生贄にし自分の場に特殊召喚できる

しかも攻撃力は生贄にた戦士族のもとの攻撃力がアップされる最初のターンで《聖騎士ジャンヌ》を生贄にすればターレットウォーリアの攻撃力は3100になる

《一族の結束》を使えば3900、もう高レベルモンスターはいらないじゃないと思うぐらいとんでもない攻撃力

ドローに命削りの宝札と天よりの宝札を加えてくれた  
以前大樹が使ったスターライトロードを二枚加えてくれた  
スターダストドラゴンは無いが聖なるバリヤや大嵐を防いでくれる  
のはありがたい

攻め、守り、ドローがバランスよく手札事故は余程の事が無い限り  
起きないくらいいいデッキ  
余程の相手じゃないと負けないだろう

「はい、終わったぞ、コレははずしいと思ったカードを言ってく  
れ」

デッキを返され？というかもう渡され確認したが抜きたいカード自  
分のサイバーガールが抜きたいと思ったのは泣くべきかしら、ハッ  
キリ言って邪魔だわ

「いえ、ありがとう、でも本当にいいの？」

「ああ、ただ売ったりあげたりしなければな」

「それは絶対にしないわ」

「そうね、そんな事はしたくないわ、このデッキはボウヤが作った  
んだから、大切にに使わせてもらおうわ」

「そうだな、俺もそれはぜ絶対守るぜ」

その後は大樹に夕飯をご馳走になった

味はブルー寮より美味しきかったが女としてプライドがボロボロになつた

(ドンだけスペックが高いのよ全く

そういえば、授業がつまらないから無気力になつていた為  
だらしのない生徒として見られてたわね)

無気力モードの大樹は私と決闘した時とえらい違いね全く

大樹     S i d e

「ふ~~~~わ~~~~、暇だな」

筆記試験は終え後は実技試験だけ

十代と雪乃はあっさり勝ち、今は明日香が受けている

「まあ、大きなあくびね」

「暇で、しょうがないんだよ、授業は簡単だからな、それよりどう  
だったそのデツキ？」

「ふふ、すごいわ、今まで使っていたデッキを使いたくなるくらいね」

「そうか、明日香もシンクロ召喚を使うまで無い見ただしな」

「そうね、ボウヤのデッキ構築レベルが凄いのよ」

「そりゃどうも」

雪乃と話してる途中にイエロー生徒が突然現れた

「君が天見大樹か？」

「瞬間移動!？」

「いや、最初からいたから、此処に」

「そうなのか？」

「そうだよ!それより君が天見大樹か？」

「そうだ、大樹でいいぞ」

「わかった、俺は三沢大地だ」

「んで、何か？」

「ああ、入学試験で筆記は一位に実技は1キルをきめ、その後万条目を二万近くのオーバークイルを決めた生徒に挨拶したくてな」

明日香 Side

実技はアツサリきまった

(ある程度予想はしてたけどトンでもないデツキだわ)

私はそう思いながら大樹のところに向かったら三沢君が大樹達と話していた

「おお、明日香どうだった、実際に使って？」

「自分の構築レベルの低さに泣きたくなくなるデツキよ」

「そうね、私も同じ気持ちを味わったわ」

「それより、三沢君と知り合いだったの？」

「いや、今知り合ったばかりだ、俺達の性癖の事で話が盛り上がってな」

「そうね、私もびっくりしたわ、ここまで話が盛り上がるなんて」

「いや、全く話していないから、挨拶しただけだから」

三沢君が顔を真っ赤にして否定している

かわいそうに、気持ちは分かるわ

『ライイエローの三沢大地、これより実技試験を開始するノーね  
今すぐ決闘場に来るノーね』

「まったく、挨拶するだけで疲れたぞ、それでは俺は行く」

「三沢」

「ボウヤ」

「なんだ？」

大樹と雪乃が三沢君を呼び止めた

「「逝つてらっしゃい」「」

「死ねってか!？」

「三沢、お前の敵は気が向いたら討ってやる」

「私も、気が向いたらボウヤのことを伝えるわ」

「負け前提か!?!しかも気が向いたらって」

「冗談だ、頑張れよ」

「冗談よ、頑張りなさい」

三沢君は疲れた顔で決闘場に降りた

「弄りがいがある羊をゲット」

「あの子もいい反応するわね」

かわいそうに、この二人に目をつけられるとは  
でもこれで私に対して少しは弱めてくれるかしら？

「大樹はまだなのよね？」

「ああ、もう二組しかないな  
にしてもウザいな周りの視線は」

私達の周りにいる男子生徒が大樹を睨みつけている  
無理もない、雪乃は男子に人気があるし  
その雪乃と息がぴったりだし

「コレが終われば俺か、相手は誰だろう？」

「カイザーよボウヤ、それにしても、面白い対戦カードね」

大樹と亮か、どっちが勝つかしら  
それにしても、亮が先生達に頼んだみたいだし  
大樹をかなり評価してるようね

「カイザーって、翔の兄で学園最強か」

「ボウヤが勝つたら私達がキスをしてあげるわ」

「『『『『『なにー！ー！』』』』』」

かわいそうに大樹はこれから男子に睨まれるわね  
ん？

私達

「ちよつと、雪乃？達ってことは私も？」

雪乃が耳元で

「当たり前じゃない、私達のデツキを強化してくれたり、美味しいご飯を作ってくれた恩人であり友達よ」

「でっでも」

「そ・れ・と・も、明日香は受けた恩は一切返さない人間になりたいの？」

うっ

「たかがキスよ？外国じゃ挨拶と同じよ？」

ぐぐぐ、確かにデツキを強化しただけじゃなく貴重なシンクロモン  
スターやレアなドロ補助カードを

譲ってくれた、キツ、キスぐらいあげないとまずいのかしら？

「わっわかったわ、大樹が勝ったらキッ、キスぐらいしてあげるわよ」

私は顔を真っ赤にして言った

「……………なに……………!!!!!!」

「それじゃあ、決まりね、ボウヤも頑張ってね（やっぱり明日香はいい反応するわ、癖になりそうよ）」

「あゝ、厄介なことになったな全く（周りの殺気はウザいな、それにしても明日香よ乗せられすぎだ）」

ちょうど大樹と亮が呼ばれて、大樹が決闘場上がった

4話 1)褒美(後書き)

次回は

大樹VS亮です

明日香が弄られキャラに確定しそう

## 5話 脱兎の1とく

雪乃 Side

大樹が勝つたらキスをするといったことが明日香は顔を赤くしている

「明日香、今は彼らの決闘に集中したほうがいいわよ」

「誰のせいよ！」

「あら？良いじゃない、相手はカイザーよ？」

「まあ、そうだけど」

「それにしても、カイザーに話したのボウヤとのデュエルを？」

私は気になっていた、カイザーが初日のドラゴンデッキの決闘を見ていたとしても、それだけでこうも速く戦いたいとは思えなかった

「ええ、私とのデュエルのことを少し話したわ、

1ターンで高レベルモンスター4対並べたとね、

それとシンクロの事は話してないわ」

「そう、「自分で確かめたら」と言ったのかしら？」

「そうよ、カイザーならこの試験で大樹に挑むと思って」

「案の定、先生に頼んで、この組み合わせカードになったと？」

「そうね、正直いって、どっちが強いかわりたくなかったのよ」

「そう」

無理も無いわね、カイザーは大嵐を使い、パワーボンドで攻撃力を上げ一気に決めるタイプの決闘者、

それに対し、大樹はモンスターの効果を使い一気に決めるタイプだと思っ、

昨日、シンクロモンスターの効果を見たときは驚いたわ、高レベルの効果モンスターより凶暴だったから

大樹が大嵐とリミッター解除をどう防ぐか楽しみね

（それに、会場はカイザーコール、誰もレッド学生が勝つとは思ってない、

そんな連中の期待を裏切り勝ったときの連中の驚愕した表情はたまらないもの、

大樹もそう思ってるから、本気で勝ちに行くわね）

大樹 Side

（などと、思ってるだろうな雪乃は、

だから男子達の前であんなことを言っ、会場全てを俺の敵にしたし実際俺も連中の期待を裏切りたい気持ちがあるから、感謝すべきかな？）

俺は決闘場上がった

「すまないな、君とは戦いたかったら、先生達に無理を言った」

カイザーが謝ってきた

「まあ、俺もアンタと戦いたかったらな、他のブルー生徒と違い、実力があるからな」

この言葉で全てのブルー男子が俺を睨見つけてきた、俺は連中が嫌いだから更に、

「レッドの俺が帝王に勝ったら、連中はタダの傲慢でプライドの高い雑魚ってことになるしな」

「「「「ぶざんけんなー、レッドの屑の分際で、カイザーに勝てるわけないだろうー!」「」「」」

いい具合に連中がキレてるな

「随分と自信があるんだな？」

「負ける気で決闘すると思っつか？」

「そうだな」

「それに、アンタも連中の事は頭を痛めてるだろう？」

「そうだな、でも負けるつもりは無い」

「加減したら、殴るぜ、それに俺を満足させたら名前を覚えてやるよ」

「ふふ、そうか」

コイントスをしてカイザーが先行になった

明日香 Side

十代達やももえ達が私達のところに来て聞いてきた

「なあ、明日香、大樹とカイザーどっちが強いんだ？」

十代もカイザーと戦いたいと言った覚えがあるから気になるんでしようね

「正直にいつて、分からないわ  
亮は強いと知ってるけど、大樹の長期戦は知らないし」

「亮様に決まってますわ」

「そうよ、あんなスケベに亮様が負けるはず無い」

二人はまだ雪乃のお尻を触った大樹に敵愾心剥き出しね  
雪乃自信は全く気にしてないのに

「デュエル!!!」

そんなこと思っていると二人の決闘が始まった

「俺のターン!ドロー!俺は《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》召喚して、効果を発動、手札を見せることで《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》を《サイバードラゴン》として扱う、俺は《融合》も見せる、そして、《融合》を発動、手札のサイバードラゴンと場のサイバードラゴンを融合して、  
出でよ!サイバー・ツイン・ドラゴン!!!!」

亮 手札3

場 1

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻2800

「いきなり、2800のモンスターか！」

「亮の奴本気ね」

「俺はターンエンドする」

「俺のターン！ドロー！俺は《召喚僧サモンプリースト》して、効果を発動、守備表示なる、そしてもう一つの効果発動、手札の魔法カード墓地に捨てることによりデッキかレベル4以下のモンスターを特殊召喚する、来いチューナモンスター《霧の谷の戦士》を攻撃表示で特殊召喚！」

「レベル4の《召喚僧サモンプリーストと  
レベル4のチューナモンスター霧の谷の戦士を  
チューニング」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が友の魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

「『『『『『シンクロ召喚！？』』』』』」

大樹もいきなりシンクロ召喚をした  
あの召喚方法に会場の皆が驚いている

「はは、やっぱ、みんな驚いてるな」

「そりゃあ、そうすつよ、あんな召喚見たこの無いし」

それは同感ね、クロノス教諭も驚いているわ

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》、サイバー・ツイン・ドラゴンに攻撃、  
灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

サイバー・ツイン・ドラゴンが破壊され亮のライフは3800になった

「俺はカード二枚伏せ！ターンエンド」

大樹

手札2

伏せカード2

場1

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻撃力 3000

「いきなり、サイバー・ツイン・ドラゴンを攻撃で破壊か、たいしたもんだよ」

亮が一気に不利になった、三枚のカード使い融合モンスター召喚したのにアツサリ倒されたもの、  
大樹は二枚で攻撃力3000のレッド・デーモンズ・ドラゴンを召喚した

「ドロー！手札から「強欲な壺」を発動し、二枚ドローする、《サイバードラゴン》を守備表示で特殊召喚して、更に《サイバー・フエニックス》を守備表示で召喚し、カードを一枚伏せターンエンド」

亮 手札3

伏せ 1

場 2

サイバー・フエニックス

サイバードラゴン

「まずいわね、レッド・デーモンズ・ドラゴンは守備表示のモンスターを全て破壊される、亮のライフは一気に減るわね」

「そうね、ボウヤのあのモンスターには壁は意味は無いもの」

「あのカードの効果はメチャクチャ反則っすね」

翔君はそう言うけど他のシンクロモンスターはもっと酷いわよ

「俺のターン！ドロー！俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンでサイバードラゴンを攻撃」

「モンスターを召喚しない！？手札に無かったのか？」

「アブソリュート・パワーフォース！」

「トランプ発動！《威嚇する咆哮》、このターンお前は攻撃する事は出来ない」

「やはり、モンスターではなく、バトルフェイズをスキップさせるカードを伏せていたか」

「ああ、なぜモンスターを召喚しなかった？」

「なに、レッド・デーモンズ・ドラゴンのデメリット効果は自分のターンに攻撃しなかったこのカード以外のモンスターは破壊されるんだよ、召喚してもエンドフェイズに破壊される、最初からこのカードを召喚したときは、むやみにモンスターを召喚しないんだよ俺は」

「なるほど、それに3000の攻撃力なら壁にもなるか」

「そういうことだ、俺は一枚伏せ、ターンエンド」

大樹

手札2

伏せカード3

場1

レッド・デーモンズ・ドラゴン 攻撃力 3000

「あのカードにそんなデメリット効果があるなんてね」

「随分と、勘がいいすっね」

「いいえ、相手が伏せカードがあるから警戒しただけでしょうね、カイザーの言うとりにも3000はいい壁にもなるし」

「俺のターン！ドロー！」

「永続トラップカード発動！《呪縛牢》、このカードは自分の融合デッキからシンクロモンスター一体を自分フィールドに表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは効果は発動する事ができず、効果は無効化される。また、表示形式を変更する事はできない。」

俺はスターダストドラゴンを守備表示で特殊召喚」

大樹の場に《スターダストドラゴン》が現れた

「相変わらず、綺麗ね、ボウヤのあのカードは」

それには同意する、会場の人たちもスターダストドラゴンに見ほれている

でも、形式表示を変えられないカードを使って何するにかしら考えられるのは、生贄召喚ぐらい、じゃないとレッド・デーモンズ・ドラゴンの効果で自壊される

「さらに、トラップ発動！《バスターモード》！このカード効果は自分フィールド上に存在する

シンクロモンスター1体をリリースして発動する。

生贄したシンクロモンスターのカード名が含まれる

「ノバスター」と名のついたモンスター1体を

自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

俺が生贄にするのは当然スターダストドラゴン、

そして現れる《スターダスト・ドラゴンノバスター》」

「攻撃表示で特殊召喚する」

《スターダスト・ドラゴンノバスター》 攻撃力3000

「場には攻撃力3000が二体か、俺は手札から天よりの宝札！お互いに手札が6枚になるようにドローする！」

お互い6枚になるようにドローした

「大嵐を発動、伏せカードを全て破壊する！」

「トラップ発動！《亜空間物質転送装置》でレッド・デーモンズ・ドラゴンをエンドフェイズまで除外する」

なぜこのタイミングで除外を？

この手には皆が悪手だと思っていた

「（なにかたくらんでいるが）このターンで終わらせてもらおう、手札から《天使の施し》して、三枚ドロして、二枚捨てる、そしてパワー・ボンドを発動！」この瞬間《スターダスト・ドラゴンノバスター》効果発動

魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、

この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる」

「なんて、効果なの！？神の宣告と同じじゃない！」

ジュンコの言葉に会場の皆が同意していた

毎ターン神の宣告をライフを払わず仕えるにだから、場に2対あったら戦意は失うわ

「とんでもない効果だな、だが君の場はがら空きた、速攻魔法 《サイバネティック・フュージョン・サポート》発動、ライフを半分払い、場の《サイバードラゴン》と、天使の施して捨てた、墓地の《サイバードラゴン》に最初のターンに融合し墓地に送った《サイバードラゴン》を除外して、《サイバー・エンド・ドラゴン》を融合召喚をする現れる

《サイバー・エンド・ドラゴン》。

《サイバー・エンド・ドラゴン》 攻撃力4000

終わりね、レッド・デーモンズ・ドラゴンを除外したのは大樹のミス、

でも亮の手札には恐らく、リミッター解除があるから意味は無いでしょうけど。

ブルー男子生徒達が喜んでいる。

「終わらせてもらうぞ、《サイバー・エンド・ドラゴン》大樹に直接攻撃！行け、エターナル・エヴォリューション・バーストオ！！」

終わった、誰もがそう思った時

「手札からモンスター効果を発動、バトルフェーダー効果は相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。

このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。」

「何！？じゃあレッド・デーモンズ・ドラゴンを除外したのは！？」

「ああ、俺に直接攻撃をするためだ、レッド・デーモンズ・ドラゴンを除外しなかったら、リミッター解除で5000のダメージを受けて俺の負けだから、手札にはバトルフェーダーがあったからな」

「ここまで、読んでいたか」

「ああ」

「そうか、俺はカードを二枚伏せ、魔法カード《魂の開放》を発動、君のスターダストドラゴンとスターダスト・ドラゴンノバスター、召喚僧サモンプリーストと

霧の谷の戦士とサイバー・ドラゴン・ツヴァイ除外して

ターンエンドだ！この戦況をどう覆すか楽しみにしているぞ」

亮 手札 2

伏せ 2

場 2

サイバー・フェニックス 攻撃力1200

サイバー・エンド・ドラゴン 攻撃力4000

(ここまで、読んでいたなんて、でも亮の伏せカードはリミッター解除、それを破壊しないと

「エンドフェイズにより除外したレッド・デーモンズ・ドラゴンが場に戻る、俺のターン！ドロー！速攻魔法サイクロンを発動、右の伏せカードを破壊する」

破壊されたのは《リミッター解除》  
勘がいいわね。

「手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札1枚をコストに手札・デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！  
来い《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》」

ピンク色の小さなドラゴンが現れた

「俺の勝ちだ、  
レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンと  
レベル1のバトルフェーダーに  
レベル1の救世竜 セイヴァー・ドラゴンを  
チューニング！」

「研磨されし孤高の光、真の覇者となりて大地を照らす！光輝け！  
シンクロ召喚！大いなる魂、《セイヴァー・デーモン・ドラゴン》！」

セイヴァー・デーモン・ドラゴン 攻撃力4000

攻撃力がサイバー・エンド・ドラゴンに並んだ

「すっげー！！！」

十代が感動していた、十代だけじゃなく他の人達も言葉を失っていた

「《セイヴァー・デーモン・ドラゴン》の効果発動！1ターンに1度  
エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター1体の効果を無効  
化し、その攻撃力を加える「パワー・ゲイン」」

「なに！？じゃあ！？」

「攻撃力は8000だ！そしてセイヴァー・デモン・ドラゴンの効果はカードの効果では破壊されない」

「何だと！？」

「《セイヴァー・デモン・ドラゴン》！サイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！

「アルティメット・パワー・フォース」！」

サイバー・エンド・ドラゴンが破壊され、亮のライフが0になった

「うわあああああ！」

「あわわわわわわ……しよ、勝者、オシリスレッドの天見大樹な  
ノーね！」

「スツゲー！カイザーに勝ちやがったぞ！大樹の奴」

「す、すごいです！」

「そんな、亮様が負けるなんて！」

「ありえませんか！」

「ふふ、もうボウヤと呼べないわね」

会場全体の人達が驚いていた  
亮が負けるなんて誰も思わなかったもの  
しかも、大樹はライフは削られて無い

「完敗だな、まさかライフを削られないなんてな」

「運が良かった、それに、アンタはシンクロモンスターやその効果  
は知らなかった、

知っていたらこんな結果にはならないよ、亮」

二人が握手している

『オシリスレッド、天見大樹君  
君の素晴らしい決闘技術

藤丸亮君に勝った実力は昇格できるけど  
やはり入学した時に言ったようにレッドのままかい？』

「ええ、あっちのほうがいいので」

本当に凄いわね

「明日香、大樹が買ったからご褒美のキスを上げなくちゃ」

はっ、すっかり忘れてた

「うっ！」

「「ちょ、キ、キスって！本当にあげるの！？」あげるのですか！？」

「ええ、約束したものの、どっちから行くの？明日香？」

雪乃は全く躊躇していない

「とっと当然よ、約束したんだから」

「あら、嫌なら私だけでいいわよ！？」

うっ、大樹にはデッキを無料で強化して貰い、レアカードも譲ってもらった

「わっ、私から先にするわ」

雪乃が余裕なのに私がテンパってるのが悔しい

大樹が戻ってきた

「明日香？本当にやるのか？顔が赤いぞ？俺は亮との決闘だけで満足したんだが」

「あら、駄目よ約束したんですもの、ねえ？ア・ス・カ？」

雪乃がさらに煽ってくる

「そう言う事よ」

私は大樹に近づいてキスをした

唇と唇が重なった、

「んん」

「明日香、何も唇にしなくても良いんじゃないか？」

へ！？

「そうね、私はキスと言っただけど、頬にやると思ったけど、まさかそこまでするなんて予想外だわ」

「あ、あ、 ￥￥￥￥」

私は頭がパニックになりその場を無言で逃げた

雪乃 Side

明日香が顔を真っ赤にしてこの場を逃げた

( 凄い速さね、まさしく脱兎のごとくね )

「さて、次は私の番ね、明日香があそこまでやったのに私が頼なくて、駄目だから私も唇にね」

私は大樹に近づき唇を重ねた

「んん」

「ふふ、ご馳走様、凄かったわよ」

「ああ、」

「あら？無反応？」

「いや、嬉しいぞ、顔に出さないように頑張ってるだけだから」

「そっ」

S i d e O U T

こうして昇級試験は終わった。  
明日香と雪乃がキスをしたことは騒がれたが、藤丸亮に勝ったこと  
で大樹に対する印象が変わった

## 5話 脱兎のごとく(後書き)

作者はタッグフォース5ではスターダストドラゴンノバスターとレッドデーモンをいれたデッキを使う予定です。  
今回大樹が使ったデッキをかつてます。

## 6話 運命をともにしてくれ

大樹 Side

昇級試験から二日

「明日香、何時までそうやって恥ずかしがってるんだ？弁当食う時間無くなるぞ？」

俺、明日香、雪乃は俺が作った弁当を食べているが、明日香は未だキス事件の事でまともに話をしていない。

ちなみに十代と翔はじゃんけん負け食後のコーヒーや紅茶を買いに行った。

「そうね、大樹が作ってくれたのに、まだ気にしてるの？」

明日香は俺を避けていたが、雪乃が言葉巧みに連れて来た

「し、しょうがないじゃない、あんな人前で失敗したんだもの」

周りの連中も頼に思うていたらしく、口にしたことは驚いていた

明日香が意地になり、テンパったせいで、頼にすることが頭に無かつたらしい

「俺はきにしないから大丈夫！」

「気にしてよう」

「私も気にしてないわ」

「雪乃は黙って、元はと言えばあなたが言ったことじゃない？」

「いや、のせれた明日香も悪いぞ？やらなくても良いのにわざわざ雪乃の提案に乗ったんだから」

「あら？でもその御蔭で私達の唇の感触を味わったんだから役得でしょう？」

「それは否定はしないよ、明日香も雪乃も唇は気持ちよかったし」

「いわないでよ〜〜」

明日香は真っ赤になりながら言ってきた

「ふふ、少しは明日香を見習って恥ずかしくて欲しかったけど？」

「無理だ」

「お〜い！買って来たぜ、ってもう食ってんのか!？」

「ずるいっす」

十代達も入ってお昼をすごした

それから数日が経った夜

明日香の行方不明になった兄の手がかりが廃寮にあるといわれ  
俺に手伝いを頼んできた

俺は倉庫からD・ホイールを外に出した

「これ、バイク!？」

「ん、ああ、こんな時間だしな、ちなみに免許あ持っているから安心しろ」

「そ、そう」

明日香はなぜ学園に持ってきてるのか不思議に思っていたらしいが、  
聞くだけ無駄だとさとり質問はしなかった

ちなみに吹っ切れたのか、キス事件の後遺症は大分消えている  
そのことを話すと戻るが

俺は明日香を後ろに乗せ廃寮に向かった  
明日香は始めてだったらしく、力をいれて密着していた  
ちなみに明日香の胸の感触を味わったことは言うまでもない  
今明日香に話したら時間の無駄なので言わないが

廃寮に着いて、中を詮索していると

「うわあああああああ！！！！」

「なに！？今の声！？」

「言ってみるか」

俺達は声の下方に向かった

「十代？隼人？それに翔！？」

「誰なの！？あいつ！？」

「大樹！？明日香！？なんでここに！？」

「その話は後だ、誰だこの爺さん？」

「爺さんではない、タイタン閻のデュエリスト！」

「ア、アニキー」

「私と決闘しろ」

「「決闘!?!」」

「そつだ、このガキの命が欲しかつ

ドオツ

「「「は!?!?!?!」」」

「「レ、レルーガン!?!」」

十代と翔には話したからその二人以外は驚いている

「おいおい、爺さんなに言ってるんだ、人質を取り、あまつさえ殺すと脅迫した

そんな犯罪者の言うこと聞くと思ってるのか?それに、正当防衛でつい殺しても未成年だからこっちは何とかなるし(嘘だけど)」

「きつ貴様、このガキの命がどうなってもいいの言うのか!?!」

タイタンと名乗った爺さんはカナリびくついている

まあ、そのために撃つただけど

「ちょっと？大樹？」

「お前、翔をどうするつもりだ！？」

十代と明日香が聞いてきた

ちなみに隼人は真っ青になって震えてる

「動くな！さもないとこのガキがどうなってもいいのか？」

「さもないと？」

俺は電撃を放ち爺さんのデュエルディスクを破壊した

「は、は、！？」

明日香と十代は真っ白になって啞然していた

「き、貴様このガキがどうなってもいいのか？」

「殺すか？それもやむなしだ、すまない翔」

「へっ？」

「その爺さんと運命をともにしてくれ」

「えええええええ！タイトルの意味はこういうこと？」

「翔、

知ってるか？土の味は埋めたところで違うって、あまり不穏な発言は控えるよ」

「は、はい」

「それに、犯罪者には屈しない、これは国際常識だ」

「へ！？」

「安心しろ遺族に手紙はちゃんと俺が書く」

「死亡フラグ！？」

「「書くな」」

「さあ、選べ、爺さん

最初に撃ったレールガンで四肢を撃ちぬかれるか？

電撃で綺麗に皮膚だけを焼かれるか？

あるいは、電熱で眼球内の水分を沸騰させ失明するか？

ああ、あと、このように塵になるか？」

俺は手にした五百円玉を電気で浮かせそれを蒸発させた

「ひ、ひいひい！ たたのむ！ 命だけは」

タイタンは翔を放して、後ろに下がり背中が壁にぶつかった

「おいおい、今更それはねえだろ、なあ殺すと脅しておいて自分は殺されないと思ったのか？ なア？」

俺は電撃をタイタンの四方に放った

お前は逃げることは出来ないと体に教えるために

(こういう奴が、おびえて命乞いする姿を見るのはやめられねえな)

「ひひひい、夕、夕、頼む、もうこの島には来ないから」

「だとさ、どうするお前ら？」

俺は十代達に聞いた

「い、いいじゃないか？」

「そ、そうね」

「そ、そつすよ、僕は無事だし」

( )(めっちゃめっちゃいい笑顔になってる)( )

「たつく、しゃあねえ、とつといけ！いやその前に聞きたいことがあるな？」

明日香の兄の情報は無かったが、無事に事が終わったからいいか  
タイタンには死にたくなかったらこのことは言つなと更に脅しをか  
けたし

あと脅しに使ったお金（五百円玉二枚）返して？貰った

「死、死ぬかとおもたっす（大樹君に殺される意味で）」

「あほ、あんなのタダの脅しだ、此処で爺さんを殺しても厄介なだ  
けだし」

「だったら最初のレールガンだけでよかったでしょう？」

明日香には電撃の事は話した

「いゝゝや、ああいう奴を脅すのが楽しくてついな」

（（（ドSだ）））

（なんか、大樹の奴機嫌がいいみたいだし）

「なあ、大樹？」

「んー！」

「俺と決闘しようぜ」

「ああ、いいぞ、今は気分がいいから」

「そうか、やっとお前と決闘ができる」

十代とはまだ決闘はしたこと無いな

授業がつまらなく無気力モードになってからな

「はあ、早く終わらせてよ」

「そっつすね」

「俺、帰って寝たいんだな」

「「デュエル!!」「」

6話 運命をともにしてくれ(後書き)

次回やつと十代と決闘  
タイタン哀れ

## 7話 逆転

明日香 Side

「デュエル」

先行は十代

「俺のターン！ドロー！」

「く〜！ようやく大樹とデュエルできるぜ」

「そついや、十代と戦ったこと無いな」

「そうだが、入学初日から『デュエルしようぜ』と言っても大樹は無気力モードになっていたからな」

亮に勝つてから大樹は女子からの人気が凄いことになってる、決闘の時と無気力モード（女子からタレ大樹と命名された）のギャップがいいとか、先生達がだす問題はアツサリ答えるから、やる気の無い態度を注意されないし、

確かにタレ大樹はかわいいと思うけど、って何考えてるのよ私。

「俺はクレイマンを守備表示にして！カードを二枚伏せ！ターン終了！」

十代 手札3

伏せ2

場1

「俺のターン！ドロー！俺は手札から 《融合》 を発動、手札の《真紅眼の黒龍》と《沼地の魔人王》 を融合させる来い！  
《メテオ・ブラック・ドラゴン》」

いきなり3500のモンスターを融合召喚した大樹

「《ミラーージュ・ドラゴン》を召喚して、装備魔法《団結の力》を装備する、これによってミラーージュ・ドラゴンの攻撃力は3200」

(3000クラスを二体、相変わらずの展開力ね、しかもミラーージュ・ドラゴンの効果は相手にとってきついわね)

「《ミラーージュ・ドラゴン》で攻撃！このモンスターの効果は表側表示になっているとき相手はバトルフェイズにはトラップを発動できない！」

「なっ!?!」

「ちなみに相手にターンでもな！クレイマンを破壊、《メテオ・ブラック・ドラゴン》の直接攻撃」

十代のライフが一気に500に減った

「カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札0

伏せ1

場2

「く〜、流石大樹、1ターンで俺のライフを500まで減らすなんて、俺のターン！ドロ！俺も融合 を発動、手札のスパークマシと沼地の魔王王を融合、来い  
E・HEROアブソルトZero」

十代はアブソルトZeroを守備表示で融合召喚をした

「早速そのカードか？」

「ああ、大機からもらったこのカードはもう俺のエースモンスターだぜ、俺はこのままターンエンド！」

十代 手札1

伏せ2

場1

「俺のターン！ドロ！俺はメテオ・ブラック・ドラゴンでアブソ

ルーツZeroを攻撃！」

「アブソルートZeroの効果発動、このカードがフィールド上から離れた時、

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する」

アブソルートZeroが破壊されて、大樹の場のモンスターは全て破壊された

「俺はカードを一枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札0

伏せ2

場0

大樹が一気に不利になったわね

「俺のターン！ドロー！俺はエアーマンを攻撃表示で召喚！エアーマンの効果発動！俺はバブルマンを手札に加え、魔法カード 《ミラクルヒュージョン》 を発動するぜ、墓地のモンスターを除外して融合召喚をするぜ、来い！アブソルートZero！」

エアーマンとアブソルートZeroの攻撃力を合わせれば4300、この攻撃が通れば大樹の負け

「エアーマンの攻撃！」

大樹が始めてライフを削られた

「どうだ？十代、俺があげたカードは？」

「すげえよ、試験時に大樹から貰ったカードは全部役に立ったぜ」

「そいつは良かった」

「じゃあ、再開するぜ、アブソルートZeroの攻撃」

「トラップ発動！炸裂装甲！」

「なに！？」

「残念だな、十代」

「ターンエンド！」

十代 手札2

伏せ2

場0

大樹が引くカードで決まる

「俺のターン！ドロー！強欲な壺を発動させ二枚ドローする、さらに引いた魔法カードを発動！」

命削りの宝札を発動、手札が5枚になるようにドローし、5ターン後に全て捨てる」

ここでドローカード？十代と同じ位のドロー運じゃない？

「俺は、魔法カード大嵐を発動！伏せカード全て破壊！」

「なっ!?!」

「そして、魔法カード龍の鏡を発動して、融合召喚をおこなう、来い！」

《ブラック・デーモンズ・ドラゴン》、そしてエアーマンに攻撃！メテオ・フレア！」

「うあああああ！」

「俺の勝ちだな」

「クッソ、負けた〜！」

負けたと言っても大樹のライフを削ったのは十代が始めてね、でもドラゴン族デッキなら 《スタンピング・クラッシュ》は入れてるだろうし、今回は十代の運が良かったのかしら？

「さてと、そろそろ戻らないとな、俺は明日香を送りにいく」

私は大樹の後ろに座り女子寮まで送ってもらった。

翌日、大樹はアカデミア倫理委員会によばれた

十代 Side

「「「退学!?!?!」」」

「天見大樹は特別寮に入り内部をあらした。調べはついているんだ」

「ちょっと待てよ、なんで大樹だけなんだよ」

「十代!」

大樹が俺を止めた

「昨日、不審者を見つけ追いかけたらその特別寮まで行ったただけだ」

「特別寮に入ったのは認めるんだな？」

委員会の一人が大樹に詰め寄った

「ああ、それより、けどなんで不審者がこの島に入ってこれた？貴様らアレが凶悪なテロリストならどうなっていた？この島には殆んどが学生なんだぞ？学生が人質に取られていたらどうするつもりだ？」

「「「「うっ！」「」「」

大樹がどんどん先生や委員会達を追い詰める

「ノコノコ侵入させた時点で貴様ら職務を放棄してるんじゃないのか？」

島の周りは海だけだ、どういう監視をしている？」

そつえばそうだ、あのタイタンはどうやってこの島に入ったんだ？

「瀬人に連絡させてもらうぞ？」

「なっ！どうしてそこで海馬社長が出てくるんだ？」

「貴様は馬鹿か？このオーナーなんだろう？ガキからやり直せオバハン」

「なっ、お、おば」

「だまってろ、ババア！」

「なんだ、天見？」

「ああ、昨日侵入者が入ってな、それを追いかけて特別寮までいったんだが、そのせいで退学だのくだらないことを言っている馬鹿がいる、貴様どんな人間を雇っている？侵入者が侵入したことすらさっきまでしらなかつたんだぞ？」

「そうつら全員の名前のリストをよこせ、解雇じゃなく社会で生きられないようにしてやる」

海馬の声がみんなに聞こえていて、その一言で、先生や委員会達の顔が真っ青になった

「まあ、待て、こいつ等の処分は俺に任せてくれ、直ぐに人生を終わらせるのはつまらん、じわじわとやらないと面白くない？ストレスを作ったんだ、発散の生贄になってもらわんと気が済まん」

大樹が今までに無いくらいニヤケている、メツチャ怖い

「そうか、じゃあ貴様がそいつらの処分をきめろ、退学の方は気にするな、そこは俺が何とかする、お前には幾つか借りがある、なにかあつたら連絡してくれ、じゃあな」

「くくく、だそうだ、どうする？」

「くくくくくくくくくくひっ！！」「」「」「」「」「」

俺達まで大樹の笑みを怖がり体が反応した

「さあ、選べ自決するか？」

おれのストレス発散の贄なって殺されるか？」

どっちの選択も死じゃん

俺達はタイタンに脅しをしていた大樹は知ってるが、今回は本気だと感じた

「なあ、なぜ？侵入者が現れた？」

「……わ、我々がちゃんと見張らなかつたためです」「……」

「だよなあ？俺が追い出した、

この島に出たことも知らないだろう？それまで何してたんだ？」

「……そつそれは」「……」

「言い訳はいい」

そついつて大樹は、先程大樹に詰め寄った委員会の一人の眼を触った

「ぐわあああああ！？ああああ！！！！」

「今回は眼球内の水分を沸騰する寸前してやった、失明しないが当分激痛が治まらない」

「3\$&%\$#」

「貴様らもこうなりたくなかったらしっかり仕事しろ、これ以上侵入者が出るなら分かってるな？」

「はい……」

「遊びやくだらない理由で校則を破った事を言われるなら兎も角、今回のように理由があるくらいしらべろ」

「はい……」

「退学は無くなったのでもういいですか？」

コクン

クロノス先生が真っ青になって首を縦にした

「じゃあ、校長先生これで」

「ああ、すまなかったね」

「いくぞ、お前ら」

「あ、ああ」

俺達は大樹を怒らせないよう誓ってこの場を離れた

こうして、学園の力関係は大樹が先生達より上になった

昼休み

俺達はパンを食っていた

「なあ？大樹って海馬さんとどんな関係なんだ？」

「カードを譲ったんだよ、それと何度か仕事を手伝ったからな」

「海馬さんと決闘はしたことあるのか？」

「何度かな、とりあえず勝率は6割くらいだ」

「まじすっか！？」

「明日香、気にする必要は無いぞ」

大樹が落ち込んでいた明日香を慰めてる  
吹雪さんの情報が欲しかったため大樹に頼んだせいで、今回の事がおきたから少しショックを受けてたみたいだ

「さそうよ？明日香？」

「でも、私が大樹を巻き込んだせいで迷惑かけたし」

「だから、気にするな、俺にも役得があったし（これで教師側は少し静かになるし）」

「なるほね、たしかバイクで廃寮の床まで行ったのよね？」

雪乃が明日香に笑みを浮かべて聞いた

「そ、そうだけど」

明日香は何故か雪乃を怖がってるけど何でだ？

「言ってるいいのかしら？大樹？」

「俺が言うよ」

大樹は明日香の耳元で

（昨日、明日香の胸の感触はバッチリ味わったから、気にしなくて  
もいいぞ）

明日香は顔を真っ赤にした

（何を言っただんだ？大樹の奴？）

こうして廃寮や退学の事は終わった

## 7話 逆転(後書き)

次回はレイが登場

原作とはかなり違う方法で関わります

あとあるキャラも学園に

## 8話 編入生

大樹 Side

退学の件が無くなってから黄金の卵パンが盗まれていたらしい、十代が解決したようだが、俺はD・ホイールやデュエルディスクを点検していた為関われなかった。

それから数日のある日の昼休み  
もうすっかりおなじみのメンバーになったお昼

「相変わらず、うめえ、大樹の弁当は」

「そりゃあ、どうも」

俺は気が向いたら週に1、2回弁当を作っている、前日のドラマやお笑い番組が面白く、気分がいいときだけ作っているが

「そういえば、先生から編入生がくと言ってたすよ」

「そういえば、聞いたわね、そんな話、確かI2社主催の大会で優勝したみたいね」

「その子猫ちゃんのことなら知ってるわよ」

「子猫ちゃん？」

「ええ、たしか小学五年生の女の子が優勝したみたいね、飛び級で編入ね」

「小5か！そいつはかわいそうに」

「どうしてだ？大樹？」

十代が聞いてきた

「ようは、看板だろう？我々のアカデミアはこんな人材も居ますとアピールするためによんだんだらうな」

「どうやら自分から言ったみたいよ？その子は」

「そりゃあ、物好きだな、名前は？」

「早乙女レイちゃんよ」

「ゴツホ、ゴツホ、アイツが編入してくるのか？」

思わぬところから知り合いの名を聞いた為、食べ物が喉につまりかけた

「知り合いなの？大樹？」

明日香がお茶を渡してくれ、知り合いかどうかが聞いてきた

「んん、ぷはあ、ありがとう明日香、知り合いというか弟子みたいなもんだ」

「『『『『弟子!?!』『』『』『』」

「ああ、1年前くらいにあったんだよ、困ってたのを助けた切欠で懐かれて、

その後色々カードのコンボや詰めデュエルを教えたりしたり、デッキを作ってあげたからな、  
レイだったら優勝はできるなそりゃあ」

「強いのか、その子?」

「ああ、亮より強いと思うぞ、短期戦より長期戦派だけだな」

雪乃 Side

編入生の知り合いが思わぬところにいた

大樹が教えたなら優勝したが納得できたわ

私も明日香も大樹が作ったデッキを使ってから成績はよくなってるし。

その子はもしかして

「ねえ、大樹？この学園に入学が決まったときその子どんな顔してたの？」

「うーん、なんか寂しがってたからな」

やっぱり、その子は大樹目当てで来るのね、女子ならブルー生徒なにレッドを選んだみたいだし

「じゃあ、その子は内の寮《ブルー女子寮》にくるの？」

明日香が面白くない顔で聞いてきた

「いえ、たしか先生の話ではレッドを選んだらしいわ」

「そ、そう」

明日香自信は自分の気持ちを気が付いてないわ無理も無い、デッキを作ってもらい、私が煽ったとは言えキスマでしたし

意識的に大樹を避けてたけど、逆に意識する羽目になったしその子も加わったら面白いことが起きるわね

「大樹はその子と他に何かしてたの？」

「な、何か!？」

明日香が私の質問に驚いている、やっぱりいい反応するわ

「別に意味は無いわ、ただ何処か遊びに行ったとか？」「ご飯」を一緒に食べたとかよ？私が聞いたのは」

「そうね」

「そうだな、遊園地に連れてってくれとかせがまれて連れてったな、ご飯はよく俺が作ってあげたし」

「大樹君がうらやましいっす」

「ん？何がだ？翔」

「アニキもいい性格してるなあ」

そんな話をして昼休みは終わった

翌日編入生である早乙女レイがクラスに入ってきた

先生が紹介して彼女が自己紹介をした

「早乙女レイですよろしくお願いします」

すこし緊張した様子で挨拶をした

(かわいいわね、ちょっと着せ替えを試みたいわ)

レッドとイエローはかわいい子がはいつて顔を赤くしてる、ロリコ  
ンが多いわね

ブルーは「優勝したぐらで調子にのるな」みたいな雰囲気を出して  
る、弱いくせにプライドだけは高いわね

大樹が少し手を振ると笑顔になった

放課後

「大樹さ〜ン!!」

そう叫んで大樹に抱きついた

大樹はレイちゃんの頭を撫でた

「久しぶりだな、レイ？」

「うん」

その光景をみた明日香が不機嫌になり、ボウヤ達が震えていた

「とりあえず、紹介する、雪乃、十代、明日香、翔、隼人だ」

「よろしくね、レイちゃん」

「」「」「よろしく!!」「」「」

「よろしくお願いします」

「なあ、俺とデュエルやろうぜ」

「アニキ、またそれすか」

「そうだなあ、レイちゃんも疲れてるんだろううしいなあ」

「やめたほうがいいぞ、せめて亮に勝ってからでもおそくないし」

「ちえ、いいじゃんか?なあ?」

「すみません、十代さん、今日は大樹さんに紹介したい人がいるんです」

「俺に?」

「うん、多分大樹さんのお知りあいだと思うから」

「どこにいるんだ?」

「うん、そこに連れて行くから、その人がD・ホイールを見たいって」

「持ってきてくれと?」

「うん」

「じゃあない、一度寮に戻るか、十代達も連れてっていいのか」

「うん、いいとおもつよ」

そう言つて、大樹のD・ホイールを取りに行つた

行く途中、レイちゃんは大樹の腕に抱きつきながら歩いていた  
明日香が不機嫌になっていたのは言つまでも無いわね

大樹 Side

俺達はD・ホイールをもつて、レイが紹介したい人のとこまで案内  
した

そこにはヘルメットをかぶつた人物がいた

「「「誰!?」」」」

「天見大樹、私とライディング・デュエルをしてもらう」

「「「「ライディング・デュエル!?」」」」」

(ああもう、そんな言い方をしなくても)

「わかった！（何処かで聞いた声だな、しかもライディング・デュエルをしている）」

「ちょっと、大樹！ライディング・デュエルってなんなの？」

明日香が聞いてきた

「ライディングデュエルはバイクに乗って

デュエルを行なう競技さ。ただ使う専用のフィールド魔法「スピードワールド」の影響の下、特殊ルールでのデュエルを行うことだ」

「なんか面白そうだ！」

十代が目を輝かせている

「俺が勝ったら、あんたが何者が教えてもらっぜ」

「いいわよ、アナタとのライディング・デュエルは久しぶりなもの」

（女？）

俺達はD・ホイールに乗り、ライディング・デュエルができるコースまで走った

「『スピード・ワールド』ON！」「」

「「ライディング・デュエル」」

「「アクセラレーション！」」

レイ Side

ああもう、あんな乱暴ないいかた、大丈夫かな？

「ねえ、レイちゃん、あの人何ものなの？」

雪乃さんが私に質問してきた

「大樹さんの知り合いみたいですが、以前に遊星さんと大樹さんを一緒に勧誘していたらしいです」

「遊星？」

「大樹さんの親友です、あったこと無いんですけど」

「ふっん、お！先行はあの人みたいだな」

私達はライディング・デュエルに目を向けた

大樹 Side

「私が先行ね！ドロー！《聖騎士のジャンヌ》を攻撃表示で召喚！カードを二枚伏せ！ターンエンド！」

??? 手札3

伏せ2

場1

(聖騎士！？この声！まさか！？)

「俺のターン！ドロー！俺は《召喚僧サモンプリースト》召喚して、効果を発動、守備表示なる、そしてもう一つの効果発動、手札の魔法カード墓地に捨てることによりデッキかレベル4以下のモンスターを特殊召喚する、来いチューナモンスター《霧の谷の戦士》を攻撃表示で特殊召喚！」

「レベル4の《召喚僧サモンプリーストと

レベル4のチューナモンスター霧の谷の戦士を  
チューニング」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召

喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

「さすがね、遊星達と違って常に本気以上の力をだす」

「いけ！スターダスト・ドラゴン！聖騎士のジャンヌを攻撃！シューティングソニック！」

「トラップオープン！フローラル・シールド！相手の攻撃を一度無効化して一枚デッキからカードをドロウする！」

「やはり！？おまえシェリーか！？」

「さすがね！たったコレだけで私だとわかるなんて」

「なんで、お前がこの時代にいる？」

「知りたいなら、ライディング・デュエルで勝つことね、私やアナタは『D・ホイーラー』なんだから！」

「そうだな、俺はカードを二枚伏せ、ターンエンド！」

大樹手札2

伏せ2

場1

「私のターン！ドロウ！」

「トランプ発動！バスターモード！場のスターダストドラゴンをリリースしデッキから 《スターダストドラゴン/バスター》 と特殊召喚！」

「さすがね！私がフルート・ド・シュバリエをシンクロ召喚するのを読んで、先に仕掛けるなんて」

「フルート・ド・シュバリエの効果は厄介だからな」

「ふふ、私は聖騎士の槍持ちを守備表示で召喚！ターンエンド！」

（伏せカードでモンスターを守り、次でシンクロ狙いか？）

「俺のターン！ドロー！天使の施しを発動！三枚ドローして二枚捨てる！この時墓地に送ったモンスターの効果発動！D-I-H-E-R-O  
ディアボリックガイを除外してデッキからD-I-H-E-R-O ディアボリックガイを特殊召喚！」

「さらに墓地からゾンビキャリアの効果も発動させる！カードを一枚デッキの一番上に戻し場に特殊召喚！」

「レベル2のゾンビキャリアと

レベル6のD-I-H-E-R-O ディアボリックガイををチューニング

！！！」

「鉄塊から生まれ力よ、今ここに咆哮と共に具現せよ。シンクロ召喚！叫べ！スクラップ・ドラゴン」

「スクラップ・ドラゴンの効果発動！俺の場のカードと相手の場のカードを一枚ずつ選択して破壊する！俺が破壊するのは俺の伏せカードとお前の伏せカード！」

お互いの伏せカードが破壊された

「さらに手札から命削りの宝札を発動、手札が5枚になるようにドロし、5ターン後に全て捨てる、

そして、もう一度D-I-H-E-R-O ディアポリックガイを除外してデッキからD-I-H-E-R-O ディアポリックガイを特殊召喚！さらに深海のディーヴァを攻撃表示で召喚」

「レベル2の深海のディーヴァと

レベル6のD-I-H-E-R-O ディアポリックガイををチューニング  
！！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が友の魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「スクラップ・ドラゴンで聖騎士の槍持ちを攻撃！

そしてスターダストドラゴンノバスターを聖騎士ジャンヌに攻撃！  
アサルト・ソニック・バーン！」

シエリーはのライフはあと2900

「俺の勝ちだ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！シエリーに直接攻撃！

「アブソリュート・パワーフォース！」

「クウウウー！」

シェリーのD・ホイールから煙がでて、シェリーは止まった

「全く、さすがね、遊星達と違って速攻型デッキは強いわ」

「あいつらも居るし、何故この時代にいるかは今度きく、それよりアカデミアに来たことが聞きたい？」

## 9話 謀ったな！

大樹 Side

ライディング・デュエルは終わり、十代達のところまで着く前にある程度距離があつた為結局シェリーがここに来たことを教えてもらった

イリアステルが過去を改竄するための装置インフィニティ、遊星達とその装置を発見したが、異次元に飛ばされたインフィニティからシェリーだけが投げ出された、そこで父の姿を借りたゾーンに出会い、真実を探るべく行動を共にしていたがこの時代にたどりつた

そして、レイの母親が困っていたところを助け、気に入られたのか、レイの家で居候になっていた、

レイが飛び級でデュエル・アカデミアに編入すると同時にシェリーはアカデミアの警備員の職につた、後レイの保護者みたいなものも母親から頼まれたらしい。

まあ、シェリーの腕っ節ならそこいらの警備員よりは強いしな

「何か、失礼なこと考えてない？」

「いや、別に」

勘がするどいな

十代達がいた場所に着いた

「スツゲーな、アレがライディング・デュエルか」

「そうだけど、SPを使つてなかったから少し違つかしら、大樹は速攻型だからSPはつかわないし」

「ライフが8000なら他のデュエルも長引くと思うけどな、っとそれより食堂でレイ達の歓迎会やるら、早く戻ろっぜ」

俺も料理するといつたらレイが凄く嬉しそうに腕に抱きついてきた。

家に着くまで十代にSPスピードワールドの効果を教えた、

明日香達はシェリーに何か聞いていたが、小声すぎて聞き取れなかった。

レッド寮の食堂で歓迎会が終わり俺達は俺の家に向かった、

無論、結界の事は驚いていたが、

シェリーの場合はイリアステルが過去を改竄できることからコレくらいならあつても不思議じゃないと思つていたらしい、

レイには以前から色々と話していたから、レイの方も問題は無い

それから、レイが大会で優勝したときや、他の質問をしていたり、アカデミアの授業の事を話していると、レイはいつの間にか俺の膝の上で眠っていた。

「無理も無いわね、朝から船旅に直ぐに授業だもの、レイちゃんの年ではきついわよ」

明日香の言葉で今日はお開きになった、十代達は寮に戻り、シエリは女子寮の警備があるため明日香達と女子寮を案内してもらっらしい。

レイは俺の服を掴んでいた為、俺の家で眠ることになった、無論、雪乃やシエリから余計な一言を貰ったが、寮に戻ったと思ったシエリが俺がいる部屋まで戻ってきた。

「何か忘れ物か？」

「ええ、大事なことを事をね、アナタはレイちゃんの事、どう思ってるの？」

「どつって言われてもねえ？」

「レイちゃんはアナタと同じ学年に通うため大会で優勝して、編入試験を受けるため沢山勉強をした、そんな、レイちゃんの気持ちに分からないほど馬鹿じゃないでしょ？」

「随分とレイに甘いんだな？」

「…そうね、私は一人っ子のうえ、両親をなくしてるから、妹のように思ってるわ」

「だから、妹を泣かせたら承知しないと？」

「ええ」

「俺もお前も未来の人間だぞ、元の時代に戻る時は否応がでも分かれることになるんだ、俺達は事故でたまたまこの時代にきただけだ」

「それは言い訳よ、私達は元の時代に戻る保障はないのよ、それに一人の女の子為に人生を使うのもいいと思うけど？」

「そうだな、（実際、俺は魔法は使えても時空はに関する力は愚か物を見えなくしたりするだけだからな、戻れる保障は無いと覚悟してこの時代に来たんだし）……真剣に考えるよ」

「そう」

そう言ってシエリーは寮に向かった。

「で、何時まで寝たふりしてるんだ？レイ？」

「!？」

「ほほう、ちょっとしびれてみるか？」

バチバチ

「起きますから!」

「まったく、ベタだな」

「ははは、……シエリーさんには事故でこの時代に来たと言ったんですか？」

レイには未来の事は話してある、俺の目的は三幻魔を奪われないためにアカデミアに行くと言った、  
どうも俺は子供には甘い、施設やサテライトで面倒みていたチビ達には嘘を付けなかった、  
つい話してしまった時は酷く後悔した

「ああ、アイツはイリアステルのことになると、犯罪も辞さないからな」

「大樹さんがそれを言うのかな？」

「……そんな事は無いぞ？」

「間があつたうえに疑問系なのは何故？」

「理由が分かつてるのもどうかと思うが、…なんでこのデュエル・アカデミアに編入して来た？」

「はは、シエリーさんが言ったと思うけど」

「俺はレイ本人に聞きたい」

「……私は大樹さんが好きです、少しでも側にいたいからお母さ

んに無理を言っつてこの学園に来ました、」

「はあ、お前も物好きだな、もしかしたら俺は自分がいた時代に戻るかもしれない、それでもいいのか？」

「うん！」

「わかったよ、付き合っつてやる、これで俺ははれてロリコンだな」

「自分で言っつかな？」

「これから散々言われるんだ」

「ははは！」

「こら、お前が笑っつな」

「大樹さん大好き！」

レイは俺に抱きつっつて甘えてきた

(はあ、確かにかわいいし、努力家で真っ直ぐな子が好いてくるのは悪い気分じゃないし、

ロリコンといわれつても言い訳できねえな)

「パジャマ着替え、歯を磨いて寝るぞ」

「はっい」

「雪乃は良かったの？」

「何が？」

「レイちゃんきつと明日にでも大樹に告白すると思っけど？」

「ああ、大樹は類友みたいなものよ」

(ドSコンビね、確か退学になりかけてたとき委員会の一人に眼球内の水分を電撃で沸騰しかけるまで温度をあげた時、苦しんで暴れていた委員会を見た時の雪乃は『ゾクゾクしたわ、また見てみたいわ』  
など言ってたわね)

「私、なんでアナタと仲良くなったのかしら？」

「万条目のボウヤを大樹が殺った時よそういう、明日香はレイちゃんが来たことで自分の気持ちに気づいたのでしょう？」

「(殺った？突っ込んで意味無いわね)  
そうね、悔しいより、うらやましいかな、レイちゃんは真っ直ぐで自分の気持ちに素直そこには」

「今晚は付き合っであげるわ、ふふ」

「警備員の私の前でよく言えたものね？」

「あら？シエリーさんも女なんだから気持ちは分かるでしょう？」

「そうね、初日の仕事はサボりかしら」

「はあ、失恋の実感をくれてありがとう」

大樹 Side

翌日

明日香達はレイの行動が読んでいたらしく、俺達が付き合うことに十代や隼人と一緒に祝福してくれたが、翔が『裏切り者』とって逃げた、先に恋人が出来たのが悔しかったらしい、他の人には言う必要がないと思いいわなかったが、体育の後の放課後で、ある馬鹿が突っかかってきた。

レイとデッキの整理していると十代がデッキを持ってテニスコート

まで着てくれとメールがきた

何故？テニスコートにデツキを？普通はラケットだろ？

など頭で疑問を持ちながらテニスコートに言ってみると

「天見大樹！明日香君のフィアンセの座をかけ勝負しろ！」

目が点になる時の気持ちはこうなのかなと思った

「なんで、俺？」

「貴様は明日香君と一番仲がいい男は君だからだ、  
ははははははは！」

「レイ、アイツ自殺志願者？」

「まあまあ、あの先輩は私達が付き合ってること知らないんだし、  
明日香さんを助けると思って、受ければいいんじゃないかな？」

俺は十代を睨むと十代は掌を合わせ謝って来た

「どのように血祭りにあげようかな？」

そう口にしながらか俺はデュエルディスクを構え、  
この贄をどう料理するか決め手決闘を開始した

「「決闘！」」

レイ Side

「ごめんね、レイちゃん」

「いいですよ、久しぶりに大樹さんのデュエルみたいですから、それに大分キレてるから、

面白いデッキを使うかもしれないし」

「そう、でもやっぱり謝らせて」

明日香さんが律儀に謝って来た、明日香さんも被害者なのに、なんかかわいそう

「先行は「先行は俺だバカ贄、ドロー！」

強制的に先行を取っちゃった

「俺はボルト・ヘッジホッグを守備表示にして、カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

「シンクロデッキ？でもなぜ直ぐにシンクロ召喚しなのかしら？手札事故？」

わかってないな

「多分違うと思います、ボルト・ヘッジホッグを軸にしたあるコンボを使うと思いますよ?」

「コンボ!?」

「はい、カナリ嫌われるコンボです」

私の言葉に?の顔をする明日香さん

「僕のターン!ドロー!僕はサービスエースを発動  
僕が選んだカードを相手はそのカードの種類を当てる  
モンスターか、魔法か、罠かだ」

「モンスターで」

「即答!?も、もう少し考えても「モンスターで」

「僕が選んだのはモンスター、メガ・サンダーボールだ  
当てられたこのカードは墓地に送られる  
僕はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン!ドロー!俺はクイック・シンクロンの効果発動!手札のモンスターカードを一枚墓地にすて、手札から特殊召喚する事が出来る、特殊召喚!そしてキャノンソルジャーを召喚!永続魔法生還の宝札を発動!更に永続罠王宮の鉄壁発動」

「もう決まったかな」

「ええ!？」

「明日香さん、ボルト・ヘッジホッグの効果しってます?。」

「たしか、チューナモンスターが場にいるとき墓地から特殊召喚ができるって、でもその後破壊されたら、あっ!。」

「王宮の鉄壁はそのためです」

「なるほど」

「俺はキャノンソルジャーの効果発動、場のモンスターを生贄にして相手に500ポイントのダメージを与える、ボルト・ヘッジホッグを生贄にする」

キャノンソルジャーから弾が発射される

「ははははは、そんな玉で僕を倒せると思ってるのか!？」

能天気だね、ボルト・ヘッジホッグの効果は知らないだろうな

「どうした、もっと来い!。」

「わかった、墓地のボルト・ヘッジホッグの効果発動!この効果は自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。」

この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。」

「ははは、やるねえ、1ターンに同じモンスターで二回玉に使うとは」

まだ王宮の鉄壁の効果に気づいてない

「生還の宝札の効果発動！墓地からモンスター特殊召喚された時デッキから一枚ドローする！ドロー！」

俺は場のボルト・ヘッジホッグを生贄にキャノンソルジャーの効果で500のダメージを与える」

「これでボルト・ヘッジホッグは除外される」

「なんで？王宮の鉄壁の効果は知ってるだろう？」

「へー！あ！」

ようやく気づいたようだ、無限ループコンボに、しかも生還の宝札でドローする事ができる

「もしかして？僕は？」

「そう、貴様はもう」

ホワイトベースにケツを撃たれるしかないガ○マだ！」

『○○謀ったな!、○○アアアツ!!!』

どこからか幻聴が聞こえたのは気のせいかな

「さあ、ケツをこっちに向けろ!」

「ひいいい」

「ドンドン来いと言ったのはお前だろう?」

この決闘を見てる人達は全員頷いた

「ケツが嫌なら、あそこだ!」

ボルト・ヘッジホッグを生贄にキャノンソルジャーできゆうしよを狙う

「ホンツげ!」

まるで直にダメージを食らったかのようにリアクションが入った  
立体映像なんだよね?

「ボルト・ヘッジホッグを復活、ドロー!生贄、……」

残りライフが500の時

「俺は魔法カード発動！」

「……………え！？」「……………」

「成金ゴブリン、貴様はライフを1000回復し、俺は1枚ドロ―  
！同じく成金発動、回復、ドロ―！」

以下省略、では再開、生贄、ダメージ、……………」

「おらおら、どうした玉に追いついてないぞ？」

などいいながら500まで減らし、恵みの雨、三枚で3000回復  
させ、繰り返した、魔法カードを手札に戻す魔法カードまで使った

「……………」

もはや屍になっていた

「おい、後の片付けはお前が全部しろガ〇マ」

「ガ〇マじゃない！」

復活した

「お前が始めたんだ、撤収するぞお前ら」

その一言でガ○マを残しみんな教室に戻った

「僕はガ○マじゃないいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

教室に戻る途中

「ちょっと待ちなさいよ天見！  
せつかく決闘に勝って明日香さんのフィアンセになれるチャンスなのに

何も言わないの!？」

「なんで!？」

「なんでって、明日香さんのフィアンセになれるのにあなたは明日香さんがため息をついてる

「はあ、ももえ「俺には彼女がいるんだ」

「「は!？」」

「あのね、二人とも大樹はレイちゃんと付き合ってるのよ」

「口、口、ロリコン!？」

「ああ、そう言う事になるな」

「わわ！」

大樹さんが私を抱きしめて言った

「俺はレイと付き合ってる、部外者に文句を言われる筋合いはないぞ」

(はずかしいけど、やっぱりうれしいなあ)

翌日クラスの皆知ることになった

## 10話 遊戯デッキVS魔改造遊戯デッキ

明日香 Side

今日の授業が終わった

「大樹さ〜んっ！帰る帰ろっ！」

大樹に抱き付いて甘えるレイちゃん、そのレイちゃんの頭を撫でる  
大樹

あの甘ったるい空気に男子は大樹を睨む

大樹とレイちゃんが付き合ってからのおきまりの行事

「はあ、胸焼けするわ」

「そうね」

「なあ、大樹、お前らも明日、遊戯さんのデッキ見に行くんだろっ  
一緒に行くっつぜ？」

そして、平気であるの空気をぶっ壊せる十代が凄い

「ああ、でももしかしたら今日見れるかもしれないぞ？」

「マジか!？」

今日の夜には既に準備が終わっている、用は今晚フライングして先に拝めると言うこと。

その日の夜

私達も一緒に見に行くことにした  
展示室に向かう途中

「マンマミーアアア!!」

クロノス教諭の叫び声を聞いて、私達は急いで叫び声が聞こえたほうに向かった

そこにはガラスケースに入っているはずのデッキがなくなっていた

「ガラスケースが割られてる？」

「誰が!？」

「知らないノーネ、私が此処に来たときはもう」

「犯人を捜そう」

十代が言ったが俺は

「それより監視カメラがあるんだ、先生はモニター室に行って、犯人が逃げた方向を俺達に連絡してください」

確かに闇雲に探すよりそっちの方が懸命ね

「分かったノーネ」

私達は展示室に出たところでクロノス先生から連絡がきた  
犯人は崖の方向に逃げたらしい  
私達は崖の方に向かうと犯人がにいた。

「すごい！こんな伝説のカードが・・・俺の手に！！」

犯人は興奮した声を出した。

「ヤッホー、窃盗犯？元気？」

軽い挨拶をする大樹

「貴様は、カイザーに勝った！？ちょうどいい、  
俺は今このデッキを試したかった所なんだ。」

「そんな事言える立場か？犯罪者？」

ビリビリッ

大樹の体中から電流が走り、火花を散らしている

「大樹さん」

レイちゃんが大樹の名前をつぶやく

「レイちゃん…」

大樹がレイちゃんの前で酷いことはしないとしたい

「大樹さん、証拠は残さないでね？」

ズッコケ

雪乃以外の私を含めた皆がその場でズッコケた

「安心しろ、此処は海岸だ、消し炭にすれば証拠は海に消える」

とても恋人どうしの会話に聞こえない

「ちょっと？イキナリ何っているんだ？」

「何って？犯罪者を肅清する話」

「そうですよ！窃盗を働いたんですよ」

「そうね」

私は彼ら思考に頭を痛めた

「まさか俺とデュエルするのが怖いのか。天見？」

こっちの気持ちも知らず大樹を挑発するバカ

「はあ、いいだろう窃盗犯、俺が勝つたらデツキは返してもらおうぞ（校長や先生に貸しを作るチャンスだ、アカデミアから窃盗犯が出たなんてニュースは流したくないだろうし）」

「俺の名前は神「窃盗犯で十分だ」

「グッ！！」

可哀想にもう名前前で呼んでくれないわね

「「デュエル！！」」

大樹と窃盗犯の決闘が始まった

「俺のターン！ドロー、《融合》を発動！《幻獣王ガゼル》と《バフォメット》を手札融合！出でよ、《有翼幻獣キマイラ》！ターンエンド！」

窃盗犯 手札 3

伏せ 0

場 1

「いきなり融合召喚か！」

「あれが武藤遊戯の融合モンスター」

「窃盗犯！お前にはそのデッキは使えない、その証拠を見せてやる」

「言ってる、俺は最強だ」

「俺のターン！ドロー！俺はE・Heroプリズマーを攻撃表示にして、プリズマーの効果発動！」

「おお、今日はヒーロデッキか！」

十代が喜んでいる

「いや違つぞ」

「へ？」

「まあ見てれば分かる、プリズマーの効果で超魔道剣士・ブラック・パラディンを相手に見せ、ブラック・マジシャンを墓地に送る

そしてこのターン、プリズマーはブラック・マジシャンとして扱うぞ  
魔法カード発動！《師弟の絆を発動》

ブラック・マジシャンが場に存在している時、手札かデッキからブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚する

俺はデッキからブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚」

「……な!?」「……」

ブラックマジシャンにブラックマジシヤンガール!!

「大樹!そのデッキは?」

「遊戯のデッキを真似たんだよ、もっとも使いやすいように魔改造したが、魔法カード《苦渋の選択》

を発動する、俺が選んだのは

磁石の戦士 二枚、 の二枚、 で五枚だ、さあ選べ」

「俺は を選ぶ」

「 を手札に加え、《天使の施し》を発動!三枚引き二枚捨てる、  
《死者蘇生》を発動!

墓地にある《ファントム・オブ・カオス》を特殊召喚!

だがその前にチェインして速攻魔法、《地獄の暴走召喚》を発動!  
自分の場に攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時に  
のみ発動可能

相手は自分のモンスター1体を選択し、俺は特殊召喚したモンスター  
1が選択される

選択されたモンスターをデッキ、手札、墓地から特殊召喚するが、  
窃盗犯の場は融合モンスターだから特殊召喚は出来ない、

俺はデッキから《ファントム・オブ・カオス》を二体特殊召喚!」

相変わらず凄い展開力ね

「ファントム・オブ・カオスの効果を発動する  
墓地のモンスターを除外してそのモンスターの名前、攻撃力、効果  
をコピーする

俺は墓地の に に をコピー」

「まさか！？この展開は！？」

三沢君が驚いている、それより何時からいたのかしら

「、、 を生贄にして来い！磁石の戦士マグネット・バルキリ  
オンを特殊召喚！」

「なッ何！」

「バルキリオン！有翼幻獣キマイラに攻撃！」

窃盗犯のライフが2600に減った

「有翼幻獣キマイラの効果発動！破壊されたとき、墓地にある！《  
幻獣王ガゼル》か

《バフォメット》を場に特殊召喚できる、《バフォメット》を守  
備表示で特殊召喚！」

「ブラックマジシャンガール！《バフォメット》に攻撃！  
ブラックバーニング！」

窃盗犯の場がから空きになった

「プリズマーの直接攻撃！」

窃盗犯のライフが残り900

「俺はカードを一枚伏せ1ターンエンド！」

大樹 手札0

伏せ1

場3

「ツク！俺のターン！ドロー！（につ！）俺はホーリエルフを守備  
表示で召喚！カードを二枚伏せ！  
ターンエンド！（さあ、攻撃して来い）」

窃盗犯 手札1

伏せ2

場1

「俺のターン！ドロー！お前バカか？」

「何！」

「伏せカードは聖なるバリヤだろ？」

「なっ何故、わかった!？」

分かるわよ、あんなニヤケタ顔をすれば、大樹のモンスターで追い詰められたから顔に出たんでしょうけど

「俺は《天よりの宝札》を発動し、お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローする！」

大樹は6枚、窃盗犯は5枚ドロー

「プリズマーの効果もう一度発生させるで超魔道剣士・ブラック・パラディンを相手に見せ、ブラック・マジシャンを墓地に送る。そしてこのターン、プリズマーはブラック・マジシャンとして扱うぞ。伏せカードの《融合》を発動させる、手札の《沼地の魔神王》と場のブラックマジシャン（プリズマー）を融合して、超魔導剣士・ブラック・パラディンを召喚」

攻撃力2000以上が3体

「そして手札から《融合回収》を発動！墓地から融合と沼地の魔神王を手札に加える、後《大嵐》を発動！伏せカードは全て破壊する」

「なにー！ー！？」

驚きすぎよ

「融合発動！沼地の魔神王とカオスソルジャーを融合させ！こゝゝゝ  
い究極竜騎士を召喚！」

究極竜騎士 5000

磁石の戦士マグネット・バルキリオン 3500

超魔導剣士・ブラック・パラディン 3400

ブラックマジシャンガール 2300

「は……が……が」

「……………終わった……………」

「ハイ、攻撃、俺の勝ち」

最後は適当に済ませた

「俺はこんな強いデッキを使っても……勝てないのか……俺に  
はやはり才能がまるでないんだ……！」

「ないな」

落ち込んでいる人間をさらに叩く大樹

「遊戯ならあの場を切り抜けられていたし」

「うう、俺は・・・どうすれば強くなれる？」

「いや、その前にお前は窃盗犯だろ、おまけに展示会にだす貴重な物を盗み、ケースを破壊、窃盗罪に器物破損だ、この意味が分かるだろう」

「ううう」

楽しそうに窃盗犯を追い詰める大樹

「ゾクゾクするわね、ああいう顔を見ると」

雪乃もドSモードが発動した

ヤバいわね、どうやって止めればいいにかしら？

「待つノ〜ネ」

「ん!？」

そこにはクロノス先生と校長先生がいた

「どう抹殺しますか？校長先生、クロノス先生？」

「いや、流石にそれは」

「そうなの〜ネ」

「でも、実際に器物破損や窃盗罪ですよ？表に出せば学園の評判が下がるし、なんなら此处で事故に見せかけて始末したほうが得じゃないですか？本人は盗んだ事は謝罪してないし、むしろ調子にのって賭けデュエルしても可笑しくないテンションでしたよ？」

「「うっ」「」

たしかに、最初は調子に乗って、自分は最強になったと言ってたわね

「でも殺すことはないと思いますよ？」

「はあ、分かりました、処分は先生達に任せます、後これは海馬社長に黙っておきますので」

大樹が最後に脅しをかけた

「明日香さん、ていうか、誰ですこの人？」

レイちゃんが窃盗犯の名前を聞いてきた

「彼は神楽坂よ（下の名前なんだったのかしら）」

「お前は視野が狭い、勘も鍛えたほうがいいな」

最後に大樹はアドバイスをやって、私達は寮に帰った

今回はこれで終わった、神楽坂は三日お停学処分ですんだみたい  
十代が大樹に遊戯デッキに使ったデッキでデュエルしようぜとしつ  
こく言っていたが

数日後

「おつかしいな？目の付け所は良かったけど」

神楽坂が新聞を読んで唸っていた

「何やってんだお前？」

「競馬だよ、勘を鍛えようと始めたけどなんか、はまっちゃって」

「……………は！……………」

「それで、外れたと？」

「ああ、昨日は八時間ぐらいあらゆる展開をシュミレートしたんだ  
けどな」

「楽しいか？」

「ああ、競馬は思考のゲーム、さまざまな要素が絡み合い、それが  
結果となる、

勘を磨くため始めたが、最初ツからあたりが出たんだ」

「それで、はまったと？」

「ああ」

「とりあえず、未成年のお前が出来るかとかツッコミたいが、その前に、」

駄目人間に一直線だぞお前？」

その言葉で私達は全員頷いた

## 11話 同時

大樹 Side

レッド寮の食堂から頼んでいた食材を取りに行き、家に戻るため結界に入ったとき

「きゃあああああああ！！！」

レイの叫び声が聞こえて、俺はすぐさま家の中に入った  
そこには全裸の十代と翔と隼人がいた

.....

「お前ら、残す言葉はないか？」

「」「」「へ！？」」「」

俺の姿を見て真っ青になっていた

「ま、まって大樹くん、まさかレイちゃんがいるとは思わなくて」

「そうだ、お前が入ってると思って、一緒に」

「はわわわ」

「問答無用!!!」

明日香 Side

デッキを少し強化する為大樹からカードを売って貰おうと大樹の家に向かった。

大樹は譲ってくれるだろうけど、これ以上は流石に気が引ける、本来なら今のデッキに入れてあるカードもお金を払いたいけど、大樹が断っている。

家に入ると

「「「ギヤアアアアアアアアア#\$&%#\$%\$!!!」「「「

バチバチ

中から叫び声が聞こえ、思わず家の中に飛び出した、そこには全裸で倒れている十代達が

「え〜っつと、どいっつと?」

「はあ、はあ、はあ」

「あが・・・」

「が……が……」

「う……」

「大樹、ちょっとカードをって、明日香も来てたの？」

「え！？ええ、カードを売って貰おうと」

「そう、私と一緒にね、で、これは何」

息を切らしてる大樹に全裸で倒れてる十代達、何気に焦げた臭いがするけど

「こいつらが風呂でレイの裸を見たということだ」

「ああ、なるほど」

大樹の家には露天風呂がある、いつの間にか島のどこからか温泉を引っ張り出したらしい、

掃除を手伝えれば入ってもいいと言われたので、私達も何度が入ってる

それにしても、レイちゃんと付き合ってから、二人は同棲状態で一緒に住んでいる、

学園はもう大樹に逆らえない状態だし、神楽坂君のこととか、侵入者に気がつけなかった事とか、

大樹も表向きは校則違反はしてなし、裏は知らないけど。

「なんでボウヤ達がラブコメやってるにかしら？それって大樹のポジションだと思っけど？」

「いや、大樹がいるかと思ってスッポンポンで入ったらレイがいたんだ」

「白い肌、かわいかったす「まだ言うか」

バチバチ

「「「ぎゃああああああ」

「はははは……」

もう乾いた笑いしか出せない

「で・明日香達は？」

「カードを売って欲しいのよ」

「右に同じく」

「そうか、けどその前に、お前らちょっと来てくれ」

「は……い」

「う……す」

奥から小さくかわいい大樹とレイが来た

「なにか用です?」

「なんか用か本体?」

「ああ、ジュニアはあいつら玄関に運んで服をかぶせてくれ、チビレイは床の掃除頼む」

「は〜い」

「う〜す」

掌サイズの大樹とレイちゃんが仕事にとりかかった

「大樹、あの子達は?」

「ああ、この家限定の俺達の分身みたいなものだ、結界から出られないけど力は人の倍ある、

今朝作った」

「そうなの(かわいい、チビレイちゃんもジュニアも、ほしいわ)」

「名前は?」

「大樹ジュニアとチビレイ」

「随分安着ね?」

「自分の分身みたいなものだからな、俺の方にチビをつけると、なんか違和感があったから」

「それでジュニアと？」

「ああ」

「あれ？明日香さんに雪乃さん、いらっしやい」

「お邪魔してるわ」

「私も。レイちゃん、災難だったわね」

「はは、でもあの惨劇をみたら何もいえないです」

十代達は全裸で気絶している、ジュニアが服を上にかぶせたから大事な部分は見えてないけど

「レイは甘い」

「随分と独占欲があるのね」

雪乃が大樹を挑発する、そういえばこの二人が言い争いになったこと無いわね

「あたりまえ、彼女の裸を他の男共に見られたんだぞ、これでキレないほど、俺は人間できちやいない」

自然に彼女という言葉がでた、その言葉にレイちゃんが嬉しそうな顔をしている、

（はあ、熱いわ）

「そうね、野暮のこと言っつてごめんなさい」

雪乃がアツサリひいた、無理もない、これ以上挑発しても惚気られるでしょうから

「俺は夕飯作るけどお前らは食べるだろう？」

「ええ、いただきます」

「私もお言葉に甘えるわ」

「レイはカードケースで明日香たちが欲しそうなカードを選んでやってくれ、値段が知りたいのら、ノートパソコンでしらべればいい」

「うん、わかった」

レイちゃんはカードケースとノートパソコンをコタツの上において、私達が欲しそうなカード見積もってくれた、私は戦士族やそれに関するサポートカードを雪乃は植物族。

レイちゃんが選んでくれる途中に雪乃がとんでもないことを聞き始めた

「レイちゃんはどこで寝てるの？」

「ふえ？大樹さんと一緒に寝てますよ」

一緒に？でもレイちゃんは大樹の恋人でも小5、いくら大樹でも・  
でも此処にくるとなぜシートが毎日のように干している・・・っは  
違うわよ、きつと暑苦しいだけ

「初めてはどうだったの？」

雪乃おおおおおお

「そりゃあ、痛かったですけど今は／／／」

抱き枕にされてたんでしょうね、ええそうよ、最初は抱き加減が強  
かっただけという意味ね

「どっちから誘ったの？」

雪乃？それ以上はただのノロケ話にならないわよ？

「私です、大樹さんは気をつかってくれてたけど、やっぱり無理  
してほしくないし」

無理？無理ってレイちゃん？あなた本当に11歳？  
違うわよ明日香！そういう意味じゃないのよきつと

「それじゃあ、今は？」

ゆ、雪乃おお

「／／／たまに大樹さんからですけど、私からの方も」

落ち着きなさい明日香……  
そっそうだ、話を変えれば、えとえと

「レ、レイちゃんは今日は災難だったね、十代達に見られたり、見たり」

って私は何を言ってるのよおおおお

「私は背中しか見られてませんし、十代さん達はその／＼大樹さんの比べたら小さかったし／＼」

顔を真っ赤にして言ってくるレイちゃん

墓穴を掘った、もう言い訳できないじゃない、  
11歳の子に色々負けた私っていったい

そう思い、雪乃を見ると笑いを堪えていた、しかもあの目は

(レイちゃんのノロケで私をからかっていた?)

(あら? ようやく気づいたの? 面白い反応ありがとう)

ものすごいいい笑顔をしていた

やり返したいけど雪乃には口では勝てない

そう思っていると、この空気を壊してくれる私にとって救世主達が蘇った

「あてて、酷い目にあつた」

「体中が痛いっす」

「それだけじゃないんだなあ、体中がまだ痺れてるんだなあ」

「ボウヤ達は自業自得よ、女の子がお風呂に入ってるのにそこに入るなんて」

「「「すみません」」」

「はは、私は大丈夫ですから雪乃さん」

「本当に？」

「はい、別に大樹さんより小さいなあ何て考えてませんでしたから」

「「グサツ!!」」

「？」

レイちゃんも大樹に染まってきたわね、いろんな意味で

「そういえばレイ、大樹は明日の友好決闘はどんなデッキつかうんだ？」

その話があった！

「うっっん、私も教えてもらってないし」

「そうなの?」

「はい、そっちのほう面白いので、私から教えないでって言ったんです」

「ふうん、でもノース校の代表が大樹を指名したからな」

そうノース校の代表が大樹を指名した、あつちは一年生が代表になったといってたので、

先生達は一年生の誰かを選ぼうとしたときにノース校が指名してきた、

大樹は亮にも勝っているし、問題は無いといわれそのまま代表になった。

そんな話をしながら夕食を待った。

十代達の夕食は悲惨なものだったのは言うまでも無い

翌日

大樹が決闘場でノートパソコンでお笑い番組の再放送を見ていた

『岡〇は7000円と予想したが正解は6000円と微妙ー』

ノース校の校長がやってきた

「それでノース校の代表って誰だ？」

十代が質問した

「この俺だ!!」

その声の方向を向いてみると、そこには！

「万丈目!？」

「万丈目だ!」

「天見、以前の雪辱をはらせてもらっ」

万条目君がかっこよく決めるが

大樹はテレビの釘付けだった

『佐○木は4500円と予想を変えず、

しかし正解は8000円と大誤さーーーん、クビレー  
ス独走か?』

「貴様はなにをしている?」

「ゴ○○なります○○を見ているから静かにしてろ、初対面なのに  
煩い奴だ」

「誰が初対面だー！」

「まずいでよ、先輩？あの番組を見てるところを放送したら社長に怒られますよ？」

など決闘場のやり取り

「そちらの要求道理、俺が代表になったとき、俺はテレビ持参で行くぞと要求し、お前達も了承したろ？」

そんな取引が行われていたのね

「大樹の奴、本当に万条目のこと忘れてるみたいだな」

「そうね、あの顔は初対面って顔だ物」

「どうやって記憶を消してるのかしら？」

私の疑問にレイちゃんが答えてくれた

「人間は脳からの電気信号で体を動かすじゃないですか？」

「ええ」

「大樹さんは電気を操れるので、その応用で電気信号を操り記憶を

削除してらんです」

「そ、そうなの」

だからあの時特技といったのね

『江〇は5000円と予想したが正解は5000円とビンゴーです  
が女〇〇』

「もついい、早く決闘するぞ」

万条目君が諦めデエエルを開始する

「決闘！」 「デユエって9000?」

「先行は俺が貰う！ドロー！俺は仮面竜を攻撃表示にし、カードを  
二枚伏せ！ターンエンド！」

万条目 手札3

伏せ2

場1

「ん、俺のターン？ドロー！俺は魔法カード《テラ・フォーミン  
グ》を発動！デッキからフィールド魔法を手札に加える！フィール  
ド魔法を発動させる《オジャマ・カントリー》を発動！」

「なんだ！？そのフィールド魔法は！？」

「このカードの効果は1ターンに1度、手札から「おジャマ」と名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、

自分の墓地に存在する「おジャマ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

自分フィールド上に「おジャマ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの元々の攻撃力・守備力を入れ替える」

「貴様も、オジャマを使うのか？」

「も？いや適当なフィールド魔法を入れただけ（ガイヤパワーなどは敵もアップするからな、オジャマは誰も使わないし）」

「神獣王バルバロスを召喚、この効果で攻撃力は1900になる、神獣王バルバロス！仮面竜に攻撃！」

神獣王バルバロスは妥協召喚すると攻撃力が1900に下がる、それでも召喚なしで1900はかなり高い、これからどうつなげるの

「仮面竜の効果発動このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを

特殊召喚することができ！！俺は、『アームド・ドラゴンレベル3』を特殊召喚！！」

「俺はカードを一枚伏せ！ターンエンド！うっわ美味そう」

大樹 手札3 万条目LP3500

伏せ1

場1

「ツチ！俺のターン！ドロー！ドロー、スタンバイフェイズが訪れたことで《アームド・ドラゴンレベル3》の効果が発動！このカードを墓地に送ることで《アームド・ドラゴンレベル5》を手札かデッキから特殊召喚できる！！手札から《アームド・ドラゴンレベル5》を特殊召喚！！」

「アームド・ドラゴンレベル5！神獣王バルバロスを攻撃！」

「速攻魔法発動！《禁じられた聖杯》！このカードはフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される」

「だが攻撃力はアームド・ドラゴンLV5が勝っているぞ?」

「効果が無効化といったはずだ、このカードの本来の3000に戻り更に400上がる」

なるほど、だからなのね、しかも次のターンで1900ではなく3000に戻る美味いわね

「凄いつす、大樹君一回の召喚で攻撃力3000を召喚したっス」

「ああ、やっぱり大機はすげえな」

「なっ!? だったら罨発動! 和睦の使者でアームド・ドラゴンLV5は破壊されない! 俺はカードを一枚伏せ! ターンエンドする」

万条目 手札3 LP3500

伏せ2

場1

「万条目の奴も強くなってるな」



デッキから除外して特殊召喚？聞いたこと無いわよ・

「相打ちねらい」

「お互いのモンスターが破壊された！後は神獣王バルバロスをお前に直接攻撃！」

「畏発動！万能地雷グレイモヤで神獣王バルバロスを破壊する」

「俺はカードを二枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札3

伏せ2

場0

「俺のターン！ドローする前に畏発動！《リビングゲットの呼び声》でアームド・ドラゴンLV5を墓地から特殊召喚！ドロー！魔法カード《レベルアップ》発動！《アームド・ドラゴンLV5》を墓地に送り「手札から《アームド・ドラゴンLV7》を特殊召喚！」

「アームド・ドラゴンLV7！天見に直接攻撃！」

「畏発動！和睦の使者でこのターンで戦闘ダメージは受けない」

「っち！ターンエンド！」

「やっぱ、大樹君の守りは堅いつすね」

「そうだな、俺でも半分も削れてないしな」

私や亮なんて1も削ってないのよ

万条目 手札2 LP3500

伏せ1

場1

「俺のターン！ドロー！俺は手札から<sup>シン</sup>Sin 青眼の白龍の効果発動！先程と同じくデッキから青眼の白龍を除外してSin 青眼の白龍を特殊召喚！Sin 青眼の白龍！アームド・ドラゴンLV7に攻撃！」

またSin しかも青眼の白龍  
ブラックマジシャンとかもあるのかしら

「畏発動！攻撃の無力化！」

「！ターンエンド！」

大樹 手札3

伏せ2

場1

「俺のターン！ドロー！《アームド・ドラゴンLV7》を生贖にして「手札から《アームド・ドラゴンLV10》を特殊召喚！！そしてアームド・ドラゴンLV10効果発動！手札を一枚墓地に送り、アームド・ドラゴンLV10より攻撃力が低いモンスターを破壊する」

「畏発動！スキルドレイン！LP1000払い、場のモンスターの効果を無効にする」

「タッチ！ならアームド・ドラゴンLV3を召喚！そしてアームド・ドラゴンLV10をSin 青眼の白龍に攻撃！」

「Sin 青眼の白龍が破壊されたことにより、手札からモンスター効果発動！LPを半分払い、このカードを手札から特殊召喚！コレがこのデッキのエースモンスターだ！現れる《Sin<sup>シン</sup> トウルース・ドラゴン》！！」

「なっ！？攻撃力が5000だと！くっそカードを一枚伏せ！ターンエンド！」

「攻撃力5000だって、しかも相手のターンに出せるなんて」

たしかにとんでもないわね、LPが半分へるといっても攻撃力5000のためには安いものだわ

万条目 手札1 LP3500 大樹 LP1250

伏せ1

場1

「俺のターン！ドロー！俺は手札から天使の施しを発動！三枚引き二枚捨てる、手札からモンスター効果発動！墓地から《天使の施し》で捨てた機械族のガンナードラゴンと獣戦士族のバルバロスを除外！獣神機王バルバロスUrを特殊召喚！さらに神獣王バルバロスを召喚！」

「まだだ、手札から《二重召喚》を発動してさらに最後の手札天よりの宝札を発動！」

「お互いに手札が6枚になるようにドローする！」

「《二重召喚》により召喚がもう一度可能、だから<sup>ライトニングキア</sup>光神機 - 桜火を召喚！

手札から巨大化を発動！獣神機王バルバロスU rに装備して攻撃力が7600」

シン トウルース・ドラゴン 5000

獣神機王バルバロスU r 7600

神獣王バルバロス 3000

<sup>ライトニングキア</sup>

光神機 - 桜火 2400

「あいかわるず、容赦がないわね、大樹は」

「うん」

私も同意権ね、でも

「でも、あの伏せカードが重要だな」

「速攻魔法発動！《神秘の中華なべ》で獣神機王バルバロスU rを生贄してに7600回復！手札から《手札断札》二枚手札をすて二枚ドロー！俺は速攻魔法 《サイクロン》でお前の伏せカードを破

壊！」

「クツ！」

「《Sin<sup>シン</sup> トウルース・ドラゴン》で アームド・ドラゴンLV10を攻撃！」

神獣王バルバロスをアームド・ドラゴンLV3

ライトニングギア  
最後に光神機 - 桜火の直接攻撃だ」

『最下位は佐○木さんです！自腹です！ゴチ○なりますー！！』

「うわああああ！！！」

万条目君のLPが尽きたと同時に、大樹が見ていた番組の敗者が決定した

「すまない兄さん達」

「大樹君！Sin カードを我々に売ってくれないか？金ならいくらでも出す？」

万条目君をよそに大樹にSin カードを売ってもらうように交渉

し始めた兄二人

「貴重なカードだ、今に所俺しか持ってない、売れるのはSin  
真紅眼の黒竜 一枚だけだ」

「それでもいい、いくらだ？」

「5億」

「……………なにっ……………!?」「……………」

「わかった、今すぐ小切手で払おう」

「……………はぁ……………!?!」「……………」

「小切手じゃなく、此処に振り込んでくれ」

「わかった！ありがとう」

とんでもない値段でカードを売り、対抗試合は終わった

大樹 Side

「大樹さ……ん」

俺はレイを膝の上で抱く、かわいいなあもっ

「貴様ラー————！俺様の前でイチヤツクな！小娘お前は女子寮だろう」

俺達のお楽しみタイムを邪魔する万条目

「いや、元々俺達の部屋だぞ、貴様が横から入ったんだろう？」

俺達は三日に一回は寮で寝ている

「そうだね」

「仕方ないだろう、俺様は出席日数が足りないって言われたんだよ、おかげで俺はレッドからのし上がらなければならん」

「自業自得じゃん！」

「スキあり！」

俺はレイの耳を優しく噛んだ

「ひゃん？、大樹さん耳は駄目？」

「いちやつくな——————！！」

ノース校のこいつの前で散々レイといちやつき、三つ貸しとして部屋を貸し俺達は家に戻った。

## 12話 新たな力

万条目 Side

イライライライライラ

「はい、大樹さん」

「モグモグ」

イライライライライラ

「オイ！なんでこいつらがいるんだ？」

「なんでって、大樹君が作った弁当ツス」

十代に誘われた昼、本来なら断るが、天上院君も一緒にしてるから来てみたら

昨日のバカップルも一緒だ

「ホイ、レイ」

「アーン」

しかも、お互いに食べさせてるときた

そのとき翔の目が

(美味しい弁当の為に空気になるっすヨ)

(なれるか！)

(じゃあ、ドローパンを買いに行きなさい万条目君)

(君まで)

「うっめくな、大樹が作る弁当は」

「」「」「そうね」「すね」「」

十代、貴様空気を壊すならもつとやれ、この馬鹿

(空気になるだけで、美味しい弁当が食べられるんだから、カマンするんだなあ)

(クッソ！確かに美味しい、家のコック達より美味しいのが性質が悪い)

「万条目は食わないなら、俺が貰っぜ」

「待て、十代、食べる！」

俺達のやり取りを他所に、二人はお互いのおにぎりで汚れた指をなめてる

(おにぎりを入れるな！)

大樹曰く、野郎の握ったおにぎりはいやだろ？

大樹はレイ以外の弁当はおにぎりは絶対に入れないらしい、大樹が食べるおにぎりはレイが握ったもの  
という要らん情報を翔がよこしてきた

(明日はドローパンだ、これ以上こんなところでご飯が食えるか)

翌日、ドローパンを三つ買ったが、  
野菜パンに納豆パンに熟成チーズパンだった

「この世には神も仏もないのか——————!？」

次の日からは、万条目も空気になる努力をしながら大樹の弁当を涙を流し、胃つを傷めながら食べることにした

大樹 Side

万条目の名前を覚えてから数日後

「今度の日曜日に島に眠る遺跡を訪ねるピクニックを企画しているんだにゃあ。希望者はこぞって参加してほしいんだにゃ」

暇な授業で退屈してた俺にとってサプライズだった、俺だけじゃな

く十代達も参加を決めた。

翌日

しばらく険しい道を歩いている途中

「大樹？あの荷物は何なの？」

明日香が聞いてきたので

「バーベキューセット」

「なんで、そんなものを」

「俺が手案しんだ」

十代が俺の変わりに答えた

明日香はあきれていたが、実際にはちゃんとした理由がある、万条目が野菜嫌いだからどうしようかと悩んでいた。せっかく美味しく作ったのにあいつは食べ物を粗末にした

許せん

そしたら、十代が「バーベキューなら野菜を別の味付けで味を消して焼けばいいんだ」とかいつてたが実際、自分が食べたいだけだろ、遠足やキャンプ気分だし

明日香には万条目に野菜を食べるように行ってくれと頼んだ

目的地に着き、十代達は直ぐにバーベキューの準備をした

(速い!)

「さあ、焼けるぞ〜」

わいわいしながらお昼を過ごす、そして俺のミッションも開始した

「ほい、万条目」

「なんだ？野菜しかないじゃないか？」

「駄目よ、万条目君好き嫌いしては」

「ぐっ、天上院君!」

「これを食べたら、あのフィールド魔法をやるよ、それに貸し一つチャラだ」

「グッ、しかしなんだこの色は」

「野菜の味を完璧に消すために、コーティングした」

「なんのコーティングだ!？」

「チョコに、プリンにクリームミルクだ」

「殺す気か？」

「十代!万条目をおさえる」

「サー・イエッサー」

「まで、おい、ホンッガ」

「は〜い、まずはピーマンのチョコ漬け」

「はが、もが」

「コレを食べれば君は「村の少年」から「勇者を目指す旅に出た少年」にクラスアップだ」

万条目の口にピーマンのチョコ漬けを流し込む

「ん—————」

「よし、飲み込んだな、次はコレだ、玉ねぎとプリンのコラボレーションだ!」

「んが—————」

「さあ、君は「小さな町を救った勇者見習い」なるんだ」



「どうしたのにや、太陽が三つに」

何か危ないのでみんなで遺跡に逃げ込んだ

「俺は大丈夫だ！みんな、隠れてろよ！」

十代は何かを感じたのか行ってしまった

「十代！」

「二人共！」

「ダメなんだなあ」

「アニキ！大樹君！」

俺達は光に飲み込まれてしまった

「大樹さん！」

「……………樹」

「……………きる」

「おい！起きろ大樹！」

「ん！？」

「なんだ？」

「やっと、起きたか？」

「いいご身分だな、俺達は死にそうになったのに（何故か胃が気持ちがるい）」

レイ達に起きたことを話してもらった

過去にタイムスリップしたとか、遺跡番人に殺されそうになったとか

番人を倒したと思ったら、また光に包まれここにいたらしい

「此処は何処か分からないということか？」

「はい、大樹さんは体は大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だよ」

心配した顔をするレイの頭を撫でる

「イチヤツクな」

「いいじゃないか、俺達付き合ってるんだから」

「いいじゃないですか、私達つきあってるんだから」

「時と場合つい考える！」

万条目が叫んだ

「ツシ！誰か来る！？」

「また同じ展開すつ力？」

「大声をだすからだなあ」

「誰だ！？」

「「「大樹！？」」」

「遊星、ジャック、苦労？」

「まて、俺の名前だけ間違えてないか？」

「苦労してるんだろ？どっかの働かない奴のせい？」

「誰の事だ？」

「お前だよ！！」

俺とクロウがツツコミを同時に入れた

「この人たち大樹の部屋にあった？」

十代が俺の部屋にあった写真うを思い出す

「此処は何処かしてるか？」

俺は遊星達に聞いた

「わからない、WRGPの決勝前日だったから、会場を見に行ったら、光に包まれて此処にいた」

遊星が答える

「決勝！？てことはあいつらと？」

「ああ、ようやく戦うことになる」

クロウが気合十分に答えた

「しかしお前は どうして？」

「俺達は遺跡を見学にいったら、光に包まれ俺は此処に、こいつらは過去に言ったらしい」

「大樹！俺達とデュエルしろ！」

「ジャック!?」「」

「明日はイリアステルと戦うんだ、お前と再会できたのは偶然じゃないだろう、

それに、いずれ元の世界にもどるかもしれない」

その言葉に遊星とクロウも「確かに」と言いながら納得した

「そうだな、久々にお前らとやりたいしな」

俺は本音のまま口にした

「奴らとやる前に大樹と戦えるなんてな、神様を信じてみたくなっただぜ」

「活を入れるには絶好だな」

レイ達の紹介を他所に話が進んだ

ルールは四人のバトルロワイヤルにしようと思ったが、  
タッグ形式にした

フィールドとLPと墓地を共有  
LPは8000

俺とクロウVS遊星とジャックになった

俺、ジャック、クロウ、遊星の準になる

「「「デュエル!!」」」

十代 Side

なんか、俺達をよそに大樹とその知り合いがタッグデュエルする事  
になったみたいだ

「俺達は空気か？」

「そつすね」

「いいじゃないですか、大樹さんも久々に親友達と再会したんだですから」

レイは事情を知ってる風だった

彼等は大樹の部屋にあった写真に載ってた奴らだった

「『デュエル!!』」

つと、考えるのは後だ、大樹の昔の友達なら強いだろうし、楽しみだな

「俺のターン！ドロー！俺は《ドラグニティーアキュリス》を召喚！そして効果を発動！手札からドラグニティを特殊召喚する！来い《ドラグニティアームズーレヴァティン》を特殊召喚！効果を発動！アキュリスを装備カードとしてアームズーレヴァティンに装備！カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札3

伏せ1+1

場1

大樹はいきなりレベル8のモンスターを特殊召喚した

「ドラグニティ！みたこないモンスターだ」

「俺のターン！ドロー！俺はモンスターを伏せ！カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

ジャック 手札4

伏せ1

場1

「俺のターン！ドロー！俺は《BF - 黒槍のブラスト》を召喚！バトルを行う！アームズ・レヴアティンをモンスターに攻撃！」

「モンスター効果発動！ダンディライオンの効果で綿毛トークンを二体特殊召喚！」

「BF - 黒槍のブラストで綿毛トークン攻撃、黒槍のブラストには貫通ダメージがある」

ジャックLP6300

「カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

クロウ 手札4

伏せ2+1

場2

「俺のターン！ドロー！俺は手札を一枚捨て手札からクイツク・シンクロンを特殊召喚！《ジャンク・シンクロン》を召喚！ジャンク・シンクロンの効果発動！墓地から《ボルト・ヘッジホッグ》を特殊召喚！」

「レベル2のボルト・ヘッジホッグに、  
レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！  
シンクロナ召喚！現れる！！《ジャンク・ウォリアー》！」

「墓地からボルト・ヘッジホッグの効果が発動！ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

「レベル5のクイツク・シンクロン  
レベル1の綿毛トークン  
レベル2ボルト・ヘッジホッグをチューニング！」

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンクロナ召喚！粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

「畏発動！奈落の落とし穴！ジャンク・デストロイヤーを破壊するぜ！」

「なに！？だがジャンク・デストロイヤーの効果は発動させてもらう！

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる、俺はアームズ・レヴァティンと右の伏せカードを破壊」

「モンスター効果発動！アキュリスを装備カードとして破壊された時、相手のカードを一枚破壊させてもらうぜ！ジャンク・ウォリアーを破壊させてもらう！」

「なら手札からクイック・シンクロンの効果発動！カードを一枚ずつ特殊召喚する！墓地からボルト・ヘッジホッグの効果発動！場にチューナーモンスターがいる時、ボルト・ヘッジホッグに特殊召喚する」

「レベル5のクイック・シンクロンと  
レベル2のボルト・ヘッジホッグにチューニング」

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

「畏発動！強制脱出装置！ニトロ・ウォリアーをエクストラデッキに戻すぜ！」

「カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

遊星って人は次々シンクロ召喚するが、大樹とクロウって人がすべて破壊したりして対応してる。

クロウって人や遊星って人と俺もデュエルしてえな

遊星 手札0 LP6300

伏せ2

場0

「俺のターン！ドロー！調和の宝札を発動！手札の攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー墓地に捨てることで、デッキから二枚ドローできる！二枚ドロー！」

「そしてドラグニティードウクスを召喚！モンスター効果発動！」

このカードが召喚に成功したとき自分の墓地にあるレベル3以下のドラグニティーと名のついたドラゴン族モンスター一体を選択し、装備カードとしてこのカードに装備する事が出来る！

俺は調和の宝札で捨てたチューナーモンスター《ドラグニティーフランクス》を装備して効果を発動させる！

フアランクスは装備カードとなったとき場に特殊召喚できる！

フアランクスを特殊召喚！」

「そして

レベル2ドラグニティーフアリンクス

レベル4のドラグニティードウクスをチューニング!」

「溪谷から現れし竜よ、風を切り裂き空を舞え!シンクロ召喚!天翔せよ、ドラグニティナイト・ヴァジュランダ!」

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、墓地にあるレベル3以下のドラグニティと名がついたドラゴン族を装備する事が出来る、俺はファリンクスを装備!」

「そして、ヴァジュランダのもう一つの効果発動!1ターンに一度このカードに装備してある装備カードを墓地に送ることでエンドフェイズまで攻撃力は倍になる!

ヴァジュランダの攻撃力は3800!」

「ヴァジュランダと黒槍のブラストを直接攻撃!」

「くあああああ」

大樹が一気に遊星達のLPを削った

遊星LP800

「ターンエンド！」

大樹 手札 4

伏せ 0

場 2

「俺のターン！ドロー！俺はバイス・ドラゴンを特殊召喚！そして  
ダーク・リゾネータを召喚する！」

「レベル3ダーク・リゾネータと

レベル5のバイス・ドラゴンをチューニング！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シ  
ンクロ召喚！我が魂、「レッド・デーモンズ・ドラゴン」！」

アレは大樹が使ってたカード？それに我が魂って事はもともとあの  
人のモンスターか！？

「更に魔法カード二重召喚を発動！俺は深海のディーヴァを召喚！  
そして効果を発動！」

このカードが召喚に成功したときにレベル3以下の海竜族をデッキ  
から特殊召喚する事ができる！」

「深海のディーヴァをデッキから特殊召喚！」

「大樹！俺が新しく手に入れた力をお前に見せてやる！」

「燃え上がる俺の魂、究極のパワーを見るがいい、バーニングソウル！」

「どんなカードを出すんだろうな、あのジャックって人？」

「ふん、究極の力が随分と傲慢なやつだな」

（（万条目君がいえる台詞じゃないと思うけど））

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに  
レベル2の深海のディーヴァを二体ダブルチューニング！」

「ダブルチューニング!?」

「ついに来たか！ジャック！」

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあ

げよ。シンクロ召喚！いでよ。《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》  
《！》

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！！」

「『『『ダブルチューニング！？』『』『』」

「すっげーよ！あのモンスター！」

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナーの数×500ポイントアップする。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は6500。

そしてこのカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。

そして罠発動！シンクロ・ストライク！シンクロ召喚したモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで、シンクロ素材にしたモンスターの数×500ポイントアップする」

「なっ！？攻撃力が自分の墓地に存在するチューナーの数×500  
つて事は、最低でも5000じゃない!?」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は  
3500 + 3000 + 1500 = 8000

「手札から巨大化を発動させスカーレット・ノヴァ・ドラゴンに装  
備させる」

3500 × 2 = 7000 + 3000 + 1500 = 11500

「11500かよ!?!」

「まだまだ、罨カードシンクロ・バトン発動！自分フィールド上に表  
側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。  
発動ターンのエンドフェイズまで、選択したモンスターの攻撃力は

自分の墓地に存在する

シンクロモンスターの数×600ポイントアップする、  
スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は13300だ」

「なっ！」

「「「13300!」「」」

「究極の力を食らうがいい、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！ド  
ラグニティナイト・ヴァジュランダに攻撃！バーニングソウル！」

大樹 クロウ LPO

のこりLP800から逆転した  
ていうか大樹に勝った奴始めてみたぜ

「たつく！とんでもないカードを手に入れたな、ジャック？」

「ああ」

「遊星もだろ？」

「わかるのか？」

「なんとなくな」

「あゝクッソ、道理で簡単にライフが削れるわけだよ、お前ら狙ってたんだろ？」

「まあな」

「ん！？」

「あれは、石版」

いきなり大樹達の前に巨大な石版落ちてきた

「なんすつか!?!」

「呼んでいる?」

大樹が石版に近づき触れたら、石版が砕けカードになった

「なんあの、あれは?」

「これは、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンにシューティング・スター・ドラゴン？」

「なるほど、お前にこのカード達を渡すため俺達は此処に呼ばれたのか」

「そのようだ」

「大樹、そのカードなら、地縛神や三幻魔に対抗できるだろう」

「ふん、対抗してもらわなければ困る」

「時間か！」

「「大樹！過去は頼んだぞ！」」

「ああ、それとシエリーが過去に来てる」

「なに！？」

「ミゾグチのおっさんにいってくれ、アンタのお嬢様は元気でやっ  
てるって」

「わか・・・」

俺達はまた光に包まれもと遺跡に戻った

「ここは？」

「戻ったみたいね」

「よかつた〜」

みんな戻ったことにほっとしていたが俺は大樹が石版に触れたことで手に入れたカードが気になった。

「なあ、大樹さつき手に入れたカードは何だ、見せてくれ？」

大樹はカードを見せてくれたそこには

フォーミュラ・シンクロン

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

シューティング・スター・ドラゴン

極神皇トール

極神皇ロキ

極神聖帝オーディン

「すっげ〜！」

「いいな〜大樹君」

「なんで、貴様だけ？」

「また差が」

「凄い効果なんだなあ」

「良かったね、大樹さん！」

今日は色々あったが、そんな事よりも大樹の新しいカードと早くデユエルして〜な

未来 Side

「遊星、ミゾグチのオッサンにどう伝える気だ？」

「……………」

「俺は知らん、シエリーとはお前と大樹が一番接点があったからな」

## 12話 新たな力（後書き）

トンでも展開に呆れた人もいると思います

すいません、大樹にスカーレット・ノヴァ・ドラゴン

シューティング・スター・ドラゴンをつかわせたために書きました

三極神はどうしようか迷ってますが、多分つかいません

作者の文才ではとても書けるとは思えませんし、自信がありません

ちなみに万条目はアレを食った記憶がありません、

あまりのショックで消えています、

大樹は約束道理、オジヤマ・カントリーを渡し、貸しを一つ減らしました

### 13話 ババア（前書き）

終盤は結構残酷です、

残酷な描写が苦手な方は

デュエルが終わったら、直ぐに戻るを選択する事を推奨します

### 13話 ババア

明日香 Side

遺跡見学から一週間した日曜日

昨晚、校長からメールが着た、  
十代、万条目君、亮に私、大樹にはメールが送れなかったらしいから、私が直接呼びにいった。

結界の中だと圏外になるから、大樹を呼ぶには直接しない、

(不便ね)

家の玄関が少し開いていたから、私は入った、そのとき

「ああん、い…いいよ、大樹さん」

「ここが気持ちいいのか？」

「う…うん……もっと」

なっなんなの！？ちょっと大樹！今は真昼間よ、何やってるのよ！？

「ああん…気持ちいい…よ」

あ・・・あああ

「ちょっと！あなた達何やって・・・るの・・・よ？」

「ああ、いいよ、この低周波マッサージ」

「そうか、んじゃあここは？」

「ああ・・・気持ちいい・・・最高だよ大樹さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／」

「ん？明日香？」

「ふえ？あ！明日香さんこんにちわ」

「／／／／」

「なに赤くなってるんだ？」

「熱でもあるんですか？」

「っは！そ、そつだ校長から3時に校長室に来て欲しいそつよ」

「俺達？」

「いえ、大樹だけよ」

「大樹さんだけ？」

「最近は何もやってないんだけど」

小5の女の子と付き合ってたば問題だと思っけど

「私や十代に亮やあと二人呼ばれてるわ？」

「そうなのか？わかった」

「確かに伝えたわよ／＼」

大樹がレイちゃんの上に乗ってる図っってちょっとヤバいんじゃないかしら

「大樹さん？まだ時間があるしもうちょっとお願いしていいかな？」

「ああ、それじゃ今度はここかな？」

「ああん…そこも…い…いよ」

「／＼少しは周りを気にしなさい」

大樹 Side

「相変わらず、脱兎のごとくだな、明日香の逃げ足は」

「はは」

「それにしても、タイミングがいいのか？悪いのか？」

「大樹さんや雪乃さんがからかう気持ちがちよっと分かりました」

「ん、そうか」

その後、マッサージを再開した、校長室に向かうときレイの顔はツヤツヤと笑顔になっていた。

校長室では三幻魔の封印を解くための鍵を守って欲しいと俺達に頼んできた、

セブンスターズと名乗る連中から鍵を守ることを俺達は了承した。

イリアステルが送った刺客がセブンスターズの中に入るかもしれない、

あるいは、セブンスターズにかまけてる隙に鍵を奪うかな

鍵を受け取ってから数日たったとき十代がセブンスターズの一人を倒したそうだ、

けどその人物は明日香が探していた兄だった、さらに厄介な事に記憶がないといっている、

俺の家で看病する事になった、理由はレッド寮だと小さいから、それに俺の家にはジュニアとチビが

平日でも看病できるからだ

十代は俺があげた家に入るための鍵の御蔭で軽症ですんだ、その所  
為で鍵は跡形もなく消えた  
俺もそんな副産物があるとは思わなかった

「どうするんだ明日香？」

「わからないわ」

「だったら俺に任せな」

「「大樹！？」」

「君は？」

「俺は大樹、挨拶より記憶だな」

俺は吹雪の後ろに回り首に触れた

ビリビリ

「があ！！」

「「大樹！？」」

「はい、お仕舞い」

「「え？」」

「明日香？」

「兄さん！？記憶が戻ったの！？」

「ああ、それにしても頭が」

「眠ってる」

「そうさせてもらう」

「何やったんだ？」

「記憶が削除や破壊されたわけじゃない、ただ忘れてるだけなら脳が発する電気信号と同じ微弱な電磁波で脳に、って分かってないだろう十代？」

「悪い、難しい話はさっぱりだ」

「はあ、まあいい、校長に伝えたほうがいいだろう」

「そうだな」

「そうね、ありがとう大樹」

「どづいたしまして、それより問題はデュエル中にダメージが直に  
来ることだろう？」

「そうね、LPを削ればやばいわ」

「ふう、レイを巻き込まないよう言ったのは正解か」

「だから校長先生がレイちゃんを呼ばなかったの？」

レイは強い、レイは月一試験でライトロードデッキで負けたことがない、しかもデッキは三軍、

二軍はアンデットを加えたライトアンデットデッキ、一軍はホワイトロードデッキだ。

明日香達はレイのデュエルを見たことがあるから、レイが呼ばれなかったのが可笑しいと思っていたようだ

「ああ、レイは本来小学生だぞ、校長には危険な目にあわせないように言ってる」

ちなみにレイは夕飯を作ってる途中だ

「レイちゃんは知ってるの？」

「ああ、俺から教えた、出来るだけ一人にならないようにと（それに俺の目的も知ってる）」

「そうね、今回は翔君や隼人君が人質になったし」

「おまけに闇のゲームだ、十代は翔達にデュエルの観賞はやめるといったほうがいいぞ」

「そうだな」

「今回は吹雪が僅かに良心があつたからいい様な物、闇のゲームを使うやつは大半がイカレてるからな」

「詳しいのね」

「ああ、いい機会だしお前ならいいか」

「??？」

俺は未来から来たと二人に伝えた、

明日香は信じれない顔をしていたが、

十代は直ぐにしんじた、精霊が見えるから直ぐに信じられたみたいだ

207

俺はD・ホイールにあるデュエルのデータを見せたダークシグナーの戦い、そして地縛神を

『地縛神 ウイラコトチャラスカ Wiraqocha Rascasの効果発動！1ターンに1度、自分のターンのバトルフェイズをスキップする事で、相手ライフを1にする事ができる、クロウのライフを1にしる』

クロウが地縛神の効果を受け、LPが1になると同時に、ダメージが直に喰らったことでクラッシュした

『『『クロウ！！』』』

『はははははは、クラッシュすればデュエル続行は不可能だ!』

「なんて、効果なの!？」

「このカードを持った誰かが三幻魔を狙ってるって言うのか？」

「ああ、吹雪が目を覚ましたら、他のセブンスターの情報より地縛神を持った奴がいるかどうか聞きたい」

十代達には地縛神が召喚するとき、周りの人達の魂が生贄になるとも言っておいた

「もし持っていたら」

「召喚される前に倒すのがセオリーだ」

「今回は遊びじゃないか」

十代が珍しく冷静に答えた、モニターでは

遊星の腕に赤き竜の痣が浮かび上がった

『何故だ!？赤き竜は神たる我を選んだのではなかったのか?』

「違う！絆を選んだんだ、俺達のこの絆が運命を超えていく！俺のターン！」

「俺のフィールドにスターダスト・ドラゴンが存在する時、墓地からスターダスト・シャオロンを特殊召喚する！そして救世竜 セイヴァー・ドラゴンを召喚」

「そのカードは！？」

「レベル8のスターダスト・ドラゴンと

レベル1のスターダスト・シャオロンに

レベル1の救世竜 セイヴァー・ドラゴンをチューニング」

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光差す道となれ！シンクロ召喚！光来せよ、

《セイヴァー・スター・ドラゴン》！」

「セイヴァースタードラゴンの効果で地縛神 Wiraqocha Rascasの効果を無効化する、

そして罨カード発動！シンクロ・バトン、俺達の墓地に存在するシンクロモンスター、一対に付き俺のシンクロモンスターの一体の攻撃力を600ポイントをアップさせる、墓地にあるシンクロモンスター6対、仲間の絆が今ここに集結する」

遊星、クロウ、ジャック、大樹の墓地にあるシンクロモンスターの

数で攻撃力がアップした。

『セイヴァースタードラゴンの攻撃力は3600ポイントアップする、

セイヴァースタードラゴンで地縛神 Wiraqocha Rasca  
aに攻撃！

シューティング・ブラスター・ソニック』

モニターでは遊星がセイヴァースタードラゴンで地縛神を倒していた

十代は言葉も出ないくらい興奮してモニターを見ていた、

そのあと十代がやっと落ち着いたから話を戻した

「とりあえず、他の連中には黙っててくれ、余計に混乱するからな」

明日香 Side

「わかった」

「私もいいわ」

そんな事を話したら、イリヤ何とかかが命を狙ってくるからとか  
いつてたし、

シエリーさんば両親は知りすぎたため、殺されたと聞いた、大樹は  
シエリーさんにも言わないでくれと

頼んだ、私と十代は言わない約束をした。

「大樹は目的を果たしたらどうするの？やっぱり元の時代に戻るの  
？」

私が一番気になっていた事

「帰るわけ無いだろう、レイの側に居たいんだから」

そうね、聞いた私が馬鹿だったわ、

大樹がレイちゃんと別れるとは思えないわ、

最初は好きになってくれたから付き合ってみる感覚だったけど、  
次第にレイちゃんを本気で好きになっていったし。

その後に夕飯をご馳走になった、

レイちゃんは料理の腕が上がっていた、

シヨックだわ、あらゆる点で負けてるなんて、そんな私を他所に十  
代は遊星さん達が凄いだの、

デュエルしたいだの、大樹に彼らのデュエルを聞いていた

私はレイちゃんを巻き込まないようと思いながら女子寮に戻った。

が、次の日レッド寮の食堂で聞きたくない情報が入ってきた

「あのさ、もう一度いつてくれないかしら？」

「早乙女が負け、魂がカードの中に封印された、クロノス教論が早乙女を助けるために挑んだが返り討ちにあい、早乙女と同じく魂をカードに封印された」

レイちゃんが通販で頼んだものが港に着いたので取りにいった、亮は両親から荷物が届いた為ついぞと言いながらレイと港に行った、兄さんも回復し亮と久々に話すためについて行った、

ちなみに兄さんは大樹が作った薬で大分動けるまで回復した、兄さん曰くアレは生き物が口にするもではないと言って吐きそうな顔をしていた、

三人で港に着き、クロノス先生から荷物を受け取るときセブンスターズと名乗るヴァンパイアが廃寮に連れて行き

デュエルを申し込んだ、しかも最初にレイちゃんを指名、

亮はレイちゃんの実力なら大丈夫だろうと思っただが、廃寮の雰囲気苦てだったのか、震えていたことに気づかなかつたらしい、おまけに廃寮はお化け屋敷と言っても可笑しく無い状態、結果は僅かの差でレイちゃんが負け、クロノス先生が助けるため挑んだが結果は先ほど言ったとおり。

亮と兄さんは一度こっちに戻った、

理由はカミューラはこっちの手を読んでいるような感じだったため、あのまま決闘すれば負けていたかもしれないと思ったみたい。

私は頭を抱えた、よりによってレイちゃん犠牲になった、大樹が知ったらどう出るのかしら？

「なあ、明日香？大樹が知る前に助けたほうがいいよな？」

十代が当たり前の事を言ってきた

「当然じゃない、こんな事大樹が知ったら、そのカミューラはどうなるか？」

魂をカードに封じた相手でも死体になってほしくない

「彼、大樹君はそんなにヤバイの明日香？」

「以前、大樹を無理やり退学にさせようとした事件があったのよ、倫理委員会の一人が大樹によって失明寸前になったのよ、その後から倫理委員会は大樹に近づいてないのよ」

「失明寸前なんてまねどうやったんだ彼は？」

「……聞かないほうがいい」「」「」

「そうなの」「」

「取り合えず、私は敵とは言え、死体寸前の物は見たくないから、大樹に知られる前にレイちゃんを助けたいわ」

「翔、そんなにやばいのか彼は？」

「はい、兄さんが思ってる以上にこわいっす」

「だったら、今直ぐに

ズズスカタ

「……だ、大樹！？」「」

「へ？」

私が後ろを向くと一番合いたくない人物が立っていた

「十代、レイはどうした？」

「え！」

「チビレイが意識を失った」

な、ちよつと待って、じゃあレイちゃんに何かあったら直ぐに分かるって事？

十代達は大樹に説明した、ほぼ大樹の雰囲気恐怖してただけど

「そうか、ちょうどいい機会だ、このデッキの生贄も決まったな、そのババアは俺が殺る」

明らかに場の空気が痛い、隼人君と翔君は既に目眩を起こし気分を悪くしてる

「クロノス先生を運ぶ奴が必要だから、亮も来い」

この中で力があるのは亮、兄さんは体がまだ本調子じゃないし、十代には重いでしょうね

私も雰囲気にかけてか乗ってか、大樹達に付いて行った。

廃寮に入ったとき、カミューラが立って待っていた

「いらっしやい、今度は誰が生贄になってくれるのかしら？」

「お前じゃないのかババア」

「随分と口の悪い坊やね、目つき悪いし」

あなたのせいよと大声で叫びたい

「つとと殺るぞ、醜い貴様の顔とおさらばしたいからな」

「後悔しなさい」

「デュエル!!」

このデュエルを観戦してるのは、私、十代、亮、万条目君に兄さん、翔君達は吐き気まで起こしフリタイア

「私が先行ね！ドロー！不死のワーウルフを攻撃表示で召喚！カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

カミューラ 手札 4

伏せ 1

場 1

「俺のターン！ドロー！俺はバイス・ドラゴンを特殊召喚！このカード相手の場にモンスターが居て、自分の場にモンスターが居なければ特殊召喚することが出来る、ただし攻撃力と守備力は半分にな

る！」

「これでレベル6のモンスター召喚が出来る」

兄さんが口にした、シンクロ召喚を知らないからしょうがないけど

「さらに速攻魔法を発動！このカードは自分の手札またはデッキからレベル3以下の

サイキック族モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは

このターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される」

「……サイキック族！？」「……」

「俺はレベル3のチューナモンスターサイコ・コマンダーをデッキから特殊召喚！」

「レベル3のサイコ・コマンダーと

レベル5のバイス・ドラゴンをチューニング！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が友の魂、「レッド・デーモンズ・ドラゴン」！」

「シンクロ召喚！？」

やばっり兄さんも驚いてる

「俺はまだ通常召喚はしていない、俺はチューナモンスター深海のディーヴァを召喚！」

ディーヴァの効果を発動！このカードが召喚に成功した時、自分のデッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚することができる。俺はデッキからもう一体の深海のディーヴァを特殊召喚！」

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに

レベル2の深海のディーヴァを二体をダブルチューニング！」

「『ダブルチューニング！？』」

亮もカミューラも驚いている

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ。シンクロ召喚！いでよ、《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》！」

「すっげー、大樹の奴イキナリ出してきた」

「これは！？」

「《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は3500、そして自分の墓地に存在するチューナーの数×500ポイントアップする。スカーレットの攻撃力は5000

さらにこのカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破

壊されない」

「『なっ!?!』」

兄さん達が驚いている、無理も無いわね、激流葬や聖なるバリアが聞かない攻撃力5000のモンスターなんてどう倒せって言うのよ

「そんな情報聞いてないわ!」

「情報ね、なるほど道理でクロノスが負けたわけだ、レイはこういつた場所が苦手だからミスやら冷静な判断ができない、レイを最初に倒し、生徒を助けるためクロノスが挑む、生徒を助けたいが為に勝負を焦る、後は俺達を焦らせ、クロノスの二の舞」

「っク!」

大樹の言ったことに舌打ちをしたカミューラ、凶星だったみたいね、確かに仲間を助けるために何時も以上に力を入れ判断力が鈍る」

「くわえその目、この上で飛んでる蝙蝠で俺達の手札が見える」

「『なんだって!』」

「あなたはいつたい!?!」

「落ちこぼれの魔法使いだ、このデュエルが終わったら苦しませてやる、俺は手札からバスタービーストの効果を発動!このカードを手札から墓地に捨てることでデッキから《バスターモード》を加える」

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを不死のワーウルフに攻撃させる!」

「くう!不死のワーウルフの効果発動!このカードが戦闘で破壊された時、デッキから「不死のワーウルフ」を1体特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚に成功した時、そのカードの攻撃力は500ポイントアップする

不死のワーウルフを守備表示で特殊召喚!」

カミューラ LP600

「俺はカードを三枚伏せ!ターンエンド!」

大樹 手札0

伏せ3

場1

「私のターン！ドロー！」

「永続トラップカード発動！《呪縛牢》、このカードは自分の融合デッキからシンクロモンスター1体を自分フィールドに表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは効果は発動する事ができず、効果は無効化される。また、表示形式を変更する事はできない。

俺はスターダストドラゴンを守備表示で特殊召喚、

さらに、トラップ発動！《バスターモード》！このカード効果は自分フィールド上に存在する

シンクロモンスター1体をリリースして発動する。

生贄したシンクロモンスターのカード名が含まれる

「ノバスター」と名のついたモンスター1体を

自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

俺はスターダストドラゴンを生贄にし、

現れる《スターダスト・ドラゴンノバスター》」

大樹の場には

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン 攻撃力5000

スターダスト・ドラゴンノバスター 攻撃力3000

しかもスターダスト・ドラゴンノバスターの効果は神の宣告と同等

「どんなに攻撃力が高いモンスターを並べても意味無いわ、

私は幻魔の扉を発動！」

「アホ！スターダスト・ドラゴンノバスターの効果発動！

魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。  
この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、  
この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカード  
を、

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる、不死つてのはこうだ  
よババア」

「何てデタラメのカードを使っただ彼は」

その言葉には同意見ね兄さん

「私のお株を、ならヴァンパイアレディーを守備表示で召喚！  
カードを二枚伏せ！ターンエンド！」

カミューラ 手札2

伏せ2

場2

「スターダスト・ドラゴンノバスターを墓地から特殊召喚！、俺の  
ターン！ドロー！」

俺は永続魔法 《生還の宝札》を発動！スターダストでワーウルフ  
を攻撃！ワーウルフの効果をスターダスト・ドラゴンノバスターの  
効果で無効にさせる！」

スターダスト・ドラゴンノバスターで不死のワーウルフの効果を無  
効化！

「スカーレットでヴァンパイアレディに攻撃！」

「掛かったわね！罨カード魔法の筒発動！アナタの負けよ」

「カウンター罨カード闇の幻影を発動！」

フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする効果モンスターの効果・魔法・罨カードの発動を無効にし破壊する、魔法の筒の効果を無効にし破壊する！

スカーレットの攻撃を再開してヴァンパイアレディを破壊」

「つく！」

「俺のターンは終了と同時にスターダスト・ドラゴンノバスターを墓地から特殊召喚！」

生還の宝札を発動！カードを一枚ドロ！」

大樹 手札2

伏せ0

場2

「私のターン！ドロ！」不死のワールフを守備表示で召喚！カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

カミューラ 手札1

伏せ2

場1

魔法カードを使ってもノバスターで防がれるうえ大樹はエンドフェイズでドローできる

「スツゲーやなコンボだな」

「そうだね、スターダスト・ドラゴンノバスターの効果でも厄介なのに、

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンもいる、しかも破壊効果が効かない、

除去やコントロール奪取をつかってもスターダストの効果で無効化されるうえにドローをしてしまう

厄介ってレベルじゃないよ」

「俺のターン！ドロー！俺は強欲な壺を発動！二枚ドローする、さらに天使の施しを発動！三枚引き二枚墓地に捨てる」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力が500上がった

「俺が捨てたカードにはチューナが一枚ある、スカーレット攻撃力を500アップ！俺はダーク・リゾネーターを攻撃表示で召喚！墓地からポルト・ヘッジホッグの効果発動！場にチューナモンスターがいる時墓地から特殊召喚できる、この効果で特殊召喚し墓地に送られたら除外される！

ポルト・ヘッジホッグを特殊召喚！生還の宝札の効果で一枚デッキ

からドロー！

魔法カード二重召喚発動！コレでもう一度通常召喚をする事が出来る！俺はボルト・ヘッジホッグ生贄捧げバイス・ドラゴンを召喚！」

「レベル3のダークリゾネータと

レベル5のバイス・ドラゴンをチューニング！」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

「スターダスト・ドラゴンでワーウルフを攻撃！」

「っく、畏カード威嚇する咆哮を発動！」

「無駄だ、スターダスト・ドラゴンノバスターを生贄にして無効化し破壊する！スターダスト・ドラゴンワーウルフに攻撃を再開！」

不死のワーウルフが破壊される

「止めだ、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！直接攻撃！バーニングソウル！」

カミューラのライフが0になった

「私が、誇り高いヴァンパイアである私が人間に負けるなんて」

デュエル終了

「喰らえ」

え！？

「ぐわあああああああ!？」

大樹がカミューラに電撃を目に浴びせた

カミューラがあまりの激痛で床に転がっている中、大樹はカミューラの腕を掴み腕の骨を折った。

ゴキ

「あああああああああ!」

「ちょっと待て!大樹!何もそこまで」

「黙れ!こいつはレイに手を出した!」

さらに折った腕に電撃を浴びせた

「#\$%&#\$%\$&!」

カミューラはもうまともな叫びすらしてない

「貴様は後悔させる時間すら与えない」

そういつてもう片方の腕に電撃を浴びせた、この時落雷した音が鳴った

信じられないことにカミューラの手が消し炭になっていた、

「がああ・・・ああ」

「まだだぞ」

大樹は更に電撃を放った、カミューラの顔の皮膚や髪が焼かれた

「まだ足が残ってるな」

大樹は500円玉二枚を両手の親指に載せレールガンを両足に放った

「がああああああ！！！！」

その光景に私達は絶句した、私と十代はタイタンの時みたいに脅すだけだとおもっていたが大樹は間違いなくカミューラを殺そうとしている

「さあ、扉が開くぞ！」

その言葉にカミューラがつかっていた幻魔の扉が現れカミューラを飲み込んだ

「な、なんで幻魔の扉が！？」

「当然だろう、闇のゲームは魂を奪う儀式みたいなものだ、自分が

負けたり、儀式に失敗すれば自身の魂や肉体が奪われる、魔術の常識だ、幻魔の扉は闇のゲームに繋がるパイプみたいなものだ」

「じゃあ、カミューラが負けたから扉が」

「闇のゲームの敗者は闇に吸い込まれ、闇による永遠の苦しみを味わう、死ぬことすら出来ない、

加えババアは俺から受けた怪我は一生治らずあの激痛を永遠に味わう」

「………な!?!?!?!」

「いっただろう、アイツには後悔する時間すら与えないと」

カミューラが闇に飲み込まれてレイちゃんやクロノス先生の魂が戻った

「ねえ、明日香?」

「なに、兄さん?」

「もし、僕がダークネスの時にレイちゃんを人質に取ってたらあんなっていたかな?」

「あれを見てなっていたかな？と言える兄さんはすごいね」

「うう、レイちゃんを巻き込まないようにしないといけないね」

その言葉に皆が同意し、大樹を怒らせないようにする事を誓った

大樹が勝ったら、カミューラは勝手に闇に飲み込まれていた、大樹がしたことはオマケみたいなものだとして理解するしかなかった。

大樹は随分と加減が出来ていなかったみたいで、制服が焦げていた。

帰りは大樹がレイちゃんを抱っこし、亮と十代がクロノス先生を運んで今回のセブンスターズの事件は終わった。

## 14話 小娘vs筋肉女

明日香 Side

カミューラを倒してから翌日、  
レイちゃんとクロノス先生は問題なく学園に通っているが、  
大樹の制服がボロボロで大樹は私服で通った、けどその服はいまど  
き珍しい着物だった、

しかも違和感がない、校長先生から許可をえているらしい。

レイちゃんはかつこいいといいながら喜んだり、うつとりしていた、  
万条目君も私服だが大樹のは行き過ぎだと思っが誰も突っ込まない  
のが不思議でしようがない。

それから数日、大樹の服は中華服よりの和服と言ったほうがいい服  
をきる様になった、  
似合ってるからしょうがない、それより今日は生徒の数が可笑的い、  
半分の生徒も出席していない、  
不思議に思っていると教室に入ってきた女性がこのクラスの生徒の  
かばんを道端で拾ってきた。

それを機に私達は生徒を探しに、かばんが落ちていたに森に入った、  
そこには、

「コロシウムが何であるんだよ？」

大樹が疑問を口にした、でも大樹、アナタの家や来ている服も可笑しいと思うわ。

私達がコロシウムの中に入ったら、そこには来ていない生徒達が強制労働させられていた、そこにはクロノス先生も混じって労働していた、

「グウウウウ!!!」

「コッコッコットラ!?」「」「」「」

いきなりトラが目の前に現れた、けどトラは脅えて威嚇してるように取れる

「な、なんでトラがここに？」

翔君が脅えながら口にした、そうしたら大樹がトラに近づくとトラは脅える、

「なんで、大樹に脅えてるんだ？」

「大樹さんは常時微弱な電磁波を発してるみたいで、動物達に怖がられているんです」

レイちゃんが私達の疑問に答えてくれた、すると置くから人が現れた。

「あんだ、強いわね、私と七星門の鍵を賭けた決闘しましょう？私  
が勝ったら私の物になってもらうわ」

「アンタは？」

「私はセブンスターズの一人タニア！さあ」

「なるほど、だったら「私がやります！」」

「「レイ！？」「」」

「「レイちゃん！？」「」」

「小娘！？」

「人の彼氏に色目使ってるんじゃないわよ、ゴリラ女！」

「ゴ、ゴリラ！？」

「たしかに似てるな、暑苦しい雰囲気」

「小娘の分際で」

「売れのこった腐れかけのおばさんに言われたくないよ」

「う、売れ」

レイちゃん、いくらなんでも言いすぎだと思っけど

「その言葉、後悔させてやるわ、てっいて来なさい」



「ん、何が？」

「カメラ見たいになつたら」

「今回はレイから挑発したんだ、自分の責任は取らないと」

「・・・」

「以外つて顔だな？」

「ええ」

「自分の犯した事に責任を持つようとガキの頃から教えられたんだ、

チビ達にも言いつけてるからな（俺のは世間に出てないだけだけど、サテライトじゃ、

死んでも気づかれない、チビ達に危害を加えないように見せしめが必要だった）」

「チビ達？」

「両親がいない子供達が施設にいるんだよ、俺はその施設に遊びに行ったり、金を寄付してるんだ」

意外な言葉に私達は言葉を失った、

そういえば、大樹や遊星さん達も両親がいない、施設で預けられていたと十代と一緒に教えてもらった

「じゃあ、以前兄さん達に売った《Sin<sup>シン</sup> 真紅眼の黒竜<sup>レッドアイズ・ブラックドラゴン</sup>》お金は？」

「施設は一つじゃないからな、大抵そういった施設は常に資金不足だ、関係なくても寄付するぞ、

俺や遊星達はそういう数少ない人たちの御蔭でまともな人生を送れたからな、あそこはまともに食べ物も手に入らないからな」

親が当たり前にいる私達には重い話だった。

「デュエル!!」

「私が先行を貰う！私のターン！ドロー！私はカードを一枚伏せ！  
《ライトロード・パラディン ジェイン》攻撃表示で召喚！ターン  
エンドする時ジェインの効果でデッキの上からカードを二枚墓地に  
捨てる」

レイ 手札 4 墓地 2

伏せ 1

場 1

「私のターン！ドロー！アマゾネスの剣士を攻撃表示で召喚！永続魔法《アマゾネスの闘志》を発動！このカードはアマゾネスと名がついたモンスターが、その攻撃力より高い攻撃力を持つモンスターを攻撃する場合、ダメージ計算時のみ攻撃モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする」

「レイの奴いきなりやばいカードを出されたな！」

「レイちゃん大丈夫かな？」

十代と翔君が心配してる

「随分と余裕ね、レイちゃんのモンスターは殆んどタニアのバトルフェイズで破壊されるも同然なのよ？」

大樹は全く心配した様子が無い

「レイの伏せカードが解決する」

「え！？」

「アマゾネスの剣士！ライトロード・パラディンを攻撃！その年でその体系は絶望よ幼児体系！」

「速攻魔法サイクロンを発動！アマゾネスの闘志を破壊！」

アマゾネスの剣士は破壊されたがそのダメージはレイちゃんが受けた、けどタニアの場はがら空きになった

「ク、カードを二枚伏せ！ターンエンド！」

タニア 手札2

伏せ2

場1

「私のターン！ドロー！私はジェインを生贄にしてライトロード・エンジェル ケルビムを攻撃表示で召喚！ケルビムの効果発動！このカードがライトロードと名のつくモンスターで生贄召喚に成功したとき、デッキの上からカードを4枚墓地に送り、相手フィールド上のカードを二枚まで破壊する！私は二枚の伏せカードを破壊！残念私はまだ11歳、これから成長するんだから！」

「っク！」

「ケルビム！肌の衰えを隠すため筋肉をつけたゴリラに直接攻撃！」

「クーーーー！」

凶星なのかしら、LPが削られたよりレイちゃんという言葉にダメージ

うけてるし、  
それにしても大樹もレイちゃんもお互いのことになると容赦がない  
わね

「カードを一枚伏せ！ターンエンド！デュエルで勝たないと男を手  
に入れられないアナタはもう売れ残り組みよ」

レイ 手札3 墓地7 LP3700

伏せ1

場1

「私のターン！ドロー！私は強欲な壺を発動！二枚ドロー！アマゾ  
ネスの格闘戦士を攻撃表示でターン終了！ふん、11でも成長する  
とわかぎらないわよ」

タニア 手札1 LP1700

伏せ2

場1

「残念ねコレでも成長してるんだから、ブラもきつくなっただし！大  
樹さんの御蔭でね？

私のターン！ドロー！」

「大樹、アナタ「一方的じゃない、俺達は愛し合ってるんだから」  
・・・」

「大樹？」

「十代達にはまだ早い」

「私は永続魔法生還の宝札を発動！強欲な壺を発動！カードを二枚ドロー！」

さらに魔法カードソーラ・エクステンジ発動！手札のライトロードを墓地に捨てデッキからカードを二枚ドロー！その後デッキの上から二枚墓地に捨てる！

フィールド魔法アンデットワールドを発動！お互い場と墓地のモンスターはアンデット族になる！」

「大樹、そういうばレイちゃんはお化けの類が苦手じゃないのかしら？」

「立体映像なら大丈夫だよ、本物と区別はできるからな、以前廃病院に友達と行った時は泣いて帰ってきたからな」

「そう」

「さらに、墓地から馬頭鬼の効果を発動！このカード除外する事でアンデット族を一体墓地から特殊召喚できる！私はライトロード・ドラゴン グラゴニス等特殊召喚！ 生還の宝札でデッキから一枚ドロー！」

「レイちゃんのデッキ今までと違うけど、なんで？」

「レイは今まで3軍デッキを使ってた」

「試験のときも？」

「ああ、これは恐らく二軍だ」

「恐らくってどついう意味？」

「二軍と一軍はにてるんだよ、一軍はワイトロードデッキ」

「ワイト？あの最弱？」

「ワイトロードデッキ、ワイトキングがエースモンスターだ」

「その効果は？」

「墓地にあるワイトとワイトキング一枚に着き1000ポイント攻撃力がアップ、ワイト三枚にワイトメアとワイト婦人はワイトとして使うから攻撃力は最高11000だ」

「……………11000!?!」「……………」

「コレがタッグなら倍だ」

驚いたわ、レイちゃんは今まで三軍で負けなしなもの

「なんで、カミューラの時に二軍や一軍を使わなかったの？」

「廃寮の雰囲気に加え、あのフィールド魔で雰囲気が倍増するから、使いたくないだと、明るい場所や俺が近くに居れば平気だけど」

「そう（惚気ないで欲しいわ）」

「アマゾネスの格闘戦士をケルビムで攻撃！」

「罨カード攻撃の無力化を発動！」

「げえ、私は一枚カードを伏せ！ターンエンド！そしてグラコニス  
の効果でデッキの上から三枚墓地に送る！」

レイ 手札 5 墓地 1 4

伏せ 1

場 2

「私のターン！ドロー！アマゾネスの格闘戦士を生贄にしてアマゾ  
ネス女王を召喚！  
男を分らない小娘が！」

「残念ですー！ゴリラよりは分かってるもん、  
フィールド魔法がアンデットワールドの時、アンデット族以外のモ  
ンスターは生贄召喚できないんだから！」

「なんですって!?!」

タニアの驚きは除外されたのか、レイちゃんのいったことなのかわからないわね

「アマゾネスの聖戦士召喚！」

「畏カード奈落の落とし穴！アマゾネスの聖戦士を破壊して除外！」

「グツ！アマゾネスの格闘戦士を守備表示にしてターンエンド！」

「私のターン！ドロー！墓地から馬頭鬼の効果を発動！馬頭鬼を除外して、墓地のゾンビマスターを特殊召喚！生還の宝札でデッキから一枚ドロー！」

よし！いいカードを引けた！

魔法カード大嵐を発動！魔法・畏を全て破壊！

そして裁きの籠ジャッジメント・ドラグーンを特殊召喚！このカードは通常召喚は出来ないけど、墓地にあるライトロードが四種類以上あるとき手札から特殊召喚する事ができる！」

「「「「「攻撃力が3000を特殊召喚!?」「」「」「」

クロノス先生が何時の間に私達のところに来ていた

「ケルビムでアマゾネスの格闘戦士を攻撃！」

「人の彼氏を奪おうとする筋肉に天誅、裁きの龍で直接攻撃！  
それとその年で心が〇女なんて気色悪いのよ！」

タニアのLPが0になった

「小娘にここまでやられるなんてね、いやもう小娘といえないわね」  
そう言うとタニアはトラになった、って

「トトラ！？」

トラになったんじゃないの？

「レイ、楽しいデュエルだったわ」

そう言っつて、この場から出て行った

これで強制労働されていた生徒達は解放できたうえ、セブンスターズを一人倒した、レイちゃんがだけど、  
帰りは十代がレイちゃんとデュエルしたあの言い出してきたうえ、  
レイちゃんは十代を無視して、勝ったご褒美にと大樹に甘えた、  
帰りはその甘い空気の中帰ることになったのは言う必要ないわね

ちなみにタニアはぶじつてての書を庄るのかしら

14話 小娘vs筋肉女(後書き)

明日香の視点多すぎね？

といわれともしょうがないくらいに明日香視点が多いです

あと大樹とレイはお互いイチャツクだけだし、お互い過大評価しちゃうからどうしても他の視点になります。

くわえ二人の惚気やアレな意味を分かっているのは明日香だし。

## 15話 王はスキップ

明日香 Side

タニア戦か数日、十代と万条目君が授業でふざけあいそのとぼつちりで大樹と翔君の四人が居残りになった。

大樹はやる気がなく寝ていたからしょうがないけど、レイちゃんは大樹が帰るまで教室で待つといったので私も付き合うことにした。

その帰り、私達はゾンビに襲われた、大樹が反撃に出ようとしたら、空から船らしきものが浮かんでいて気づいたら王様と名乗るセブンスターズにデュエルを挑まれた。

神を持つとといったから皆警戒したが、この人は凄く弱かった、

(十代は大樹から貰ったカードの御蔭でラクに勝ったと言ってたけど、そうじゃなくとも楽に勝てたと思うわ)

それから、私達は地上に降りて寮の方に歩いていたらフードをかぶった人物が現れた。

「久しぶりね、天見君」

十代 Side

「いきなり、大樹に久しぶりというお姐さんが現れた

「ミスティ!？」

「知り合いなのか？」

「…誰だ!？ミスティはダークシグナーに戻る理由が無いぞ？」

「ククク、悪いなあ、俺の趣味だよ、ダークシグナー達の残留思念を使って具現化してるだけだ、そんなことより闇のデュエルといこうぜ」

「狙いは？（残留思念ということは鬼柳の思念も、それに具現化？）

「わかってるだろう、三幻魔だよ、イリアステルはその為に俺を作り此処に送った、

ダークシグナーの残留思念とともに地縛神もここにあるからな、どうする、デュエルなしで地縛神の力でここの連中を生贄するぜ」

「ちょっと待つノーネ！そんなデュエルは私が認めないノーネ」

「クククククロノス先生!？」

「すっこんでろピエロ、大樹はシグナーじゃなかったのにダークシグナーと戦えたんだ、  
ようやく戦えるんだからな、テメエら今度遊んでやるよ、まずはこいつがどれくらいかだ」

「だそうだ、コレは俺の仕事ですから、それより5千年周期じゃないと地縛神は使えないんじゃないのか？」

クロノス先生が納得してない顔で引いた

「カードが消えない内にここに送っただけ、お前らシグナーは地縛神がカードごと消えたと思っっていただろうが、実際イリアステルが回収したんだよ」

俺のハネクリボーや万条目のオジヤマ三兄弟が脅えている

「さて、質疑応答は終了だ、始めようぜ！」

「デュエル！！」

大樹とミステイさんの姿をした奴がデュエルディスクを構えた途端に青い炎が壁になった、

「明日香、地縛神というのは？」

吹雪さんが明日香に質問した

「詳しくは分からないけど、かなりヤバイカードみたいなのよ」

「そうなのか？」

カイザーは半信半疑といった顔をしてる

「大樹さん」

「俺から、いやこの姿では私といったほうがいいのかしら？」

「好きにしる」

「ふふ、私のターン！ドロー！フィールド魔法ダークゾーンを発動！ブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚！カードを一枚伏せ！ターンエンド！

ちなみに拾ったのは地縛神だけよ、デッキはダークシグナー達と違う」

ミステイ 手札3

伏せ1

いきなり攻撃力2400のモンスターを出しやがった、しかもレベル4で、

「なるほど、俺のターン！ドロー！

（ノバスターが二枚かよ、しかもバスターモードを引いた、救いはレッドデーモンズが直ぐにシンクロできることと、和睦の使者）

俺はバイス・ドラゴンを特殊召喚！そしてフレア・リゾネータを攻撃表示で召喚！」

「レベル3のフレアリゾネータと

レベル5のバイス・ドラゴンをチューニング！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が友の魂、「レッド・デーモンズ・ドラゴン」！」

「やったぜ、いきなりシンクロ召喚だ、しかもダークゾーンで攻撃力500アップだ」

「そうね、いつきに決めれば」

「フレア・リゾネータはシンクロ素材として使ったとき、そのシンクロモンスターの攻撃力は300ポイントアップ！ダークゾーンと合わせたら3800だ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！ブラッド・ヴォルスに攻撃！」

「ミステイのライフが残り2600になった」

「俺はカードを一枚伏せ！」

「速攻魔法《終焉の焔》発動！私の場に二体の黒焔トークンを特殊召喚！」

「まさか！？」

「ええ、もう手札に地縛神があるのよ」

「なんだって」  
「な！？」

「ターンエンド！」

大樹 手札3

伏せ1

場1

「私のターン！ドロー！ふふ、二体の黒焰トークンを生贄にささげ、我が命蘇らせし神よ、さあ、この魂を捧げる！永き呪縛から解放たれよ！」  
地縛神 Cc ar ay h u a「！」

上空に黒く丸つこいとはいえない何かが浮いてう

「心臓！？」

たしかに心臓に似ている

「な、なんだあの光は」

心臓に集まっていく光

「ははは、あの光はこの島の人間どもだよ、さあ地縛神 Cc ar ay h u a！人間どもを生贄にして現れなさい！」

興奮しているのか、口調がバラバラだ、いやそれより

「ちよつと待つノーネ!？」

「じゃあ、島の皆は!？」

俺達が混乱している中、地縛神 Ccarrayhua が現れた、しかも攻撃力が3300  
ダークゾーンで攻撃力がアップしてる

「「「「「な!？なんだあのデカさ!？」「「「「「

「あれがモンスターだと!？」

「それにしてもでかすぎる!？」

俺や万条目の精霊がさらに脅えた

「それより、天候が!？」

カミナリがなり、風もいきなり強くなった

「みんな、出来るだけ集まって」

レイの指示道理俺達は集まる

「面白いものを持つてるようね、地縛神の力を防ぐなんて」

大樹がくれた家の鍵が光りだした

「これがあつたから私達は助かったの？」

「そのようね、でも他の人達はもう地縛神の中よ、ふふふ」

「そんな!？」

「彼が、地縛神を倒せば解放されるわ、でも彼が負け、次にあなたが負けたら永遠に地縛神の中で苦しむことになるわ」

「大樹さん!」

「さあ再開よ、地縛神 C c a r a y h u a 大樹に直接攻撃!」

「『『『『直接攻撃!』』』』」

俺とレイと明日香以外は驚いていた

「畏カード和睦の使者発動！このターン受ける戦闘ダメージを0にする」

「ふん、最初のターンでそのカードを引いたのね、悪運が強い、私はカードを一枚伏せ！  
ターンエンド！分かってるでしょう、地縛神は攻撃対象にならない、つまり地縛神がいる限り直接攻撃は出来ない！」

ミスティ 手札2

伏せ1

場1

「なんて、デタラメなカードなんだ！？」

「バーン系でLPを削るしかないのか」

「大樹！」

「俺のターン！ドロー！俺はクリッターを攻撃表示で召喚！ターンを終了させる！エンドフェイズ時に攻撃を行わなかったクリッターをレッド・デーモンズ・ドラゴンの効果で破壊！クリッターの効果でデッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！俺は深海のディーヴァを加える」

大樹 手札4

伏せ0

場1

「よし、次のターンで、スカーレットが召喚できるぜ」

「でもこのターンで、地縛神の攻撃は防げない」

「私のターン！ドロー！カードを一枚伏せ！地縛神 C c a r a y  
h u a 大樹に直接攻撃」

「グッワー！」

大樹が数メートル後方の森に吹き飛ばされた

大樹のLPが700に

「大樹さん！」

「な、モンスターが実体化！？」

「闇のゲームじゃこんなことは」

「大樹！」

俺とレイが大樹に駆け寄ろうとしたとき

「待ちなさい、二人とも、あの焔に近寄っちゃだめよ！」

「明日香さん！？でも？」

「そつだぞ、明日香、大樹は「黙ってそこにいろ！」

大樹が立ち上がり叫んだ、でも体中傷だらけで血もたくさん出ている、

大樹は元のいた場所に戻っていく、ここから見える様に歩いてると血が吹き出てる

「そうね、闇のゲームでは傍観者はただの傍観者、黙っていなさい」

「「「「つく！」「」」」

「たつく、あゝ〜思い出せず、ダークシグナーと戦った時のことを、  
まだお前のターンだぞ」

大樹は口を大きくニヤケけながら歯をだし笑っている、今まで見た  
こと無い笑いだ  
楽しんでないか？

「ターンエンドよ！」

ミスティ 手札3

伏せ1

場1

「俺のターン！ドロー！俺は深海のディーヴァを召喚してディーヴァの効果を発動！デッキからレベル3以下の海竜族をフィールドに特殊召喚できる！俺はデッキから深海のディーヴァを特殊召喚！」

「チューナを二体？」

どうやら、ダブルチューニングは知らないみたいだ

「テメエにいいもんを見せてやるよ、

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに

レベル2の深海のディーヴァを二体をダブルチューニング！」

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ。シンクロ召喚！いでよ、《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》  
《！（攻撃力5000）」

「スカーレット・ノヴァだと、なんで貴様が最強の地縛神を？」

「『『『『『地縛神だつて！』『』『』『』』』』」

「ああ、ジャックのバーニングソウルの御蔭だな、アイツはタダの無職じゃねんだよ、

ジャックが最強の地縛神スカーレット・ノヴァの力を取り込んでできたのがこの

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》だ！」

「ツチ」

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンドだ！」

大樹 手札3

伏せ1

場1

「けど地縛神の直接攻撃能力は無いみたいだな、俺のターン！ドロ  
ー！」

「どうした、口調が戻ってるぞ、焦ってるのか？」

大樹は楽しそうに挑発する、

「っ！か痛くないのかあの傷どう見てもたつてられない傷だろ？」

「ほざいてろ、魔法カード地縛旋風を発動！自分の場に地縛神がい  
るときに発動できる、  
相手の魔法・罫を全て破壊！」

「不味い、これで大樹君の伏せカードが！」

「地縛神 C c a r a y h u a 直接攻撃！」

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果発動！

相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、  
相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する」

「何だと!？」

「さあ、これで俺達の決着はお互いのモンスターの効果を無効しないと終わらないぜ、

いや、先に貴様がモンスターを召喚して地縛神の攻撃をスカーレツドで無効にしたときに

他のモンスターで攻撃する手があるな」

「っく!ターンエンド!」

除外したスカーレツド・ノヴァ・ドラゴンが大樹の場に特殊召喚する

ミステイ 手札3

伏せ1

場1

「俺のターン!ドロー!くく、俺は魔法カードバスターテレポートを発動!

自分の手札にノバスターと名のつくモンスターをデッキに一枚戻し、デッキをシャッフルしてデッキから二枚ドローする、

二枚ドロ―！さらに強欲な壺を発動！二枚ドロ―！  
俺の勝ちだな、魔法カードハリケーンを発動！魔法・畏を手札に戻  
しな」

「くー！」

「さらに速攻魔法禁じられた聖杯を発動！フィールド上に表側表示  
で存在するモンスターを選択する、

エンドフェイズ時まで攻撃力を400ポイントアップし、効果を無  
効化させる、

地縛神 C c a r a y h u a を選ぶぜ、これでそのトカゲに攻撃を  
ぶち込めるぜ、

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで攻撃する前に

速攻魔法収縮で地縛神の攻撃力を元々数値半分にする、つまり  
1400にしそれから禁じられた聖杯との効果で1800だ」

263

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで地縛神 C c a r a y h u a  
を攻撃！

バーニング・ソウル！」

「ぐぬうううう」

LPが0になる

地縛神 C c a r a y h u a が倒されたと同時に生贄にされた生徒  
達や先生達が解放されていく

「よっしゃ、大樹が勝ったぜ！」

青い炎の壁が消えた

「くくく、流石だな、シグナーでもないのに地縛神を倒すなんて、  
実際この目で見ないと信じられなかったぞ、

今日は此処までだな、次にデュエルするのを楽しみにしてるぞ」

そついいながらミスティの体が黒い霧になって消えた、  
体だけじゃなく、使ってたカードも同じように消えた

俺達は大樹の側に駆け寄った、

「クツソ、久々に血を流した所為でテンションが上がったうえ、  
血がたんねえ」

といて倒れた、亮とクロノス先生が一番近い保健室まで運んだ

その間レイはスッゲー心配してたけど

???

S i d e

「くくく、ようやく地縛神の腹から開放された、待ってる不動遊星、  
天見大樹、ミステイ  
貴様らを殺してやるからな」

## 15話 王はスキップ（後書き）

大樹が痛みでテンション上がってる、

大樹はデュエルよりバトルが好きな性格です、  
精霊の世界だと自身の力で戦いそう

地縛神の効果を少し変えています、

フィールド魔法がなくても存在できる、  
攻撃対象にならない

OCGとテレビ版を合わせました

16話 十代vs????(ルドガー)

十代 Side

大樹が地縛神と戦ってから一晩たった  
レイは大樹の看病と言って保健室に止まってる、  
俺達は大樹の様子を見るため保健室に向かった

「それにしても、昨日のモンスターは怖かったっス」

「そうなんだなあ」

「でも大樹は勝ったんだぜ」

大樹が勝ったがまだ地縛神は残ってる、大樹に教えてもらったときは7枚あるって言ってた、  
多くてもあと6枚だ、大樹に悪いけど俺は地縛神と戦いたい、  
昨日のデュエルをみてすげえワクワクした

そんなふうに考えてると保健室についた

「大樹無事か？」

「おお、テンションが上がってるせいで痛みは感じない」

「それは以上よ」

「そうだよ」

「あれ、明日香も来てたのか？」

「ええ、レイちゃんは徹夜で看病してるから交代にね」

「だから、痛みは無いの！」

「アレだけ血を流して、先生は出血多量で当分起きれないで言ったの、黙って寝てなさい！」

「却下だ！」

そんなに酷いのか？たしかに昨日大樹が吹き飛ばされ、自分が居た位置に戻るとき変な歩きたしてたからな、保健室に運ぶ時も血が止まらなかったし

「大樹さん！」

「タダ吹き飛ばされとき、木にすりむいたり、石に当たっただけだいやあれだけ強く吹き飛ばされちゃあ危ないだろう、俺達が見えない位置に木の枝が刺さってたし」

「とりあえず、家に戻る、あそこには俺やジュニアが作った薬があるからな」

「は〜あ、わかったよ、でも家では寝てて」

「うい」

「なあ、大樹」

「俺も地縛神と戦いたい、だろ？」

「「「へ！？」「」」

「ああ」

「止めても勝手に突っ込むんだ、止めないよ、それで大怪我したら  
「おれ自身の所為だ」」

「取り合えず和睦の使者みたいにダメージ0にするカードは多めに  
入れとけよ」

「わかった！」

「アニキ、本当に戦うんすか〜？」

「ああ、昨日のデュエルをみてワクワクしたんだ」

「シヨニール天見、怪我はど〜ナノ〜ネ？」

「ああ、クロノス先生無事無事！」

「は、あ、無理しないでよ」

クロノス先生が保健室にやってきた

「校長は？」

「それは大丈夫すゝノ、みんな無事すゝノ」

「そりゃあ良かった」

「ん！？」

「……校長先生！？」「……」

校長先生も大樹の様子を見に来たみたいだ

大樹はいきなり近くにあつた何かを校長先生に投げつけた

「……大樹！？」「……」

「シヨニール何してるのゝネ！？」

「誰だテメエ、校長はデュエルディスクを腕に装着しないぞ？」

「……ア！？」「……」

そういえばそうだ、なんか違和感があると思ったら

「それに殺意丸出しの校長がどこにいるんだ？」

「サテライト育ちのクズが」

そついいながら校長の顔がから知らない男の顔に変わった

「お前、デイヴァイン！？なんでってそうか」

「知り合いなのか！？」

「こいつ実体化した昨日の地縛神に食われたんだよ、まさか生きてると、ゴキブリ並みにしぶといな」

「俺は貴様と不動遊星とミステイを殺すまでゴッホ！？」

デイヴァインが最後まで喋る前に大樹は何かピンを顔に投げつけた

「グワーーーーー、貴様何を？」

「アルコールが目に入ったか、っへ死ね！」

大樹ーーーーー！！

「ちよつと大樹！？」

「何してるノーネ!？」

「こいつはサイコデュエリスだ」

「『サイコデュエリス?』」

「カードを実体化できる能力者だ、自分と同じ子供達を集めたり、攫ったりして、紛争地域に送り込もうとしたクズだ、しかも人体実験で殺された子供もおおい、ミステイがダークシグナーになったのはこいつがミステイの弟を実験で殺したからだ」

「『な!?!』」

「ふん、奴の弟は力が弱かったから死んだに過ぎない、それに世間で化け物と呼ばれてるガキ共に居場所を生きる目的を与えたんだ、感謝されこそ怨まれる筋合いはに」

「ダイヴァインが目を片手で押さえながら、もう片方の手でカードをディスクにさしたら、  
剣が出てきた」

「本当に実体化しやがった」

「バチバチ」

「グワーーーー!?」

「アホ、剣を持ってくるなら電気を通さないセラミック製などにしろ」

大樹は容赦なく電気を放った

「ぎざつま、」

デイヴァインが一枚カードをセットすると、今度は嵐が吹き荒れる

「大嵐!?」

「いやこの規模はハリケーンだろ!?!」

「ちょっと、なんとかして!」

「どうすの〜ネ」

保健室が阿鼻叫喚な状態になっていく

大樹はレイを抱きついて守ってる

「たつく、しつこいんだよ!」

ハリケーンの中心に電気をいやあれは雷かを放った

ガッ

「ぐわああああああああ！！！！！！」

デイヴァインは転げまわってる、デッキはバラバラになっていく

「収まった？大樹何したの」

「別に、ただ左目だけを1、2億ボルトで焼いただけだ」

「……………」

ひでえ、でもこいつはそれだけの事をしたからな

（こいつはそれだけの事をしてきたんだ、加え攫った子供にチビ達の友達もいたんだ、

そえにレイを巻き込んだ）

「ついでにっ」と

そういつと電気がデイヴァインのカードを燃やした

「やらに」

落ちていたハサミをデイヴァインの股間に刺しやがった

「サービス」

バチバチ

「……「げえ!?!」……」

「ぐぎゃー……!」

ディヴァインのアソコが電気で焼ける

「ガ、ガードを!」

ディヴァインは残った力でカードを手にディスクに刺していく

「ほつでほび、ばつびい(げぎ)どれでもいい、やつに攻撃を(」

「まだやんのか!?!」

「もうこりこりなノーネ」

「あれ?あのカードは?」

超進化薬 ドーピング

実体化したモンスター?がディヴァインに薬を飲ませていく

「ちょ、どうなんす力？」

「分からないんだなあ」

「超進化薬は恐竜族関連カードだ人間に使ったらどうなるんだ？」

「大樹！冷静に分析してる場合？」

俺達があわててるとダイヴアインの体が

「でかくなってる？」

「いや十代、この場合は肥大化と言う」

ありがとう、勉強になるぜ

「じゃなくって」

「はがああつああああ！」

ダイヴアインは最後の力を振り絞って最後の無事だったカードをセツトした

「ほがあああ！？」

「闇の誘惑、手札に闇属性のモンスターを除外してカードを二枚ドロ―する魔法カード、  
しかし手札に闇属性モンスターがない場合手札を全てすてる、  
けど今は手札はない、自分自身を除外だな、この世界から除外される！」

「はがあああああああ！！！！！」

デヴィアインが闇に吸い込まれた

その後大樹は暴れすぎたのかまた倒れた、保健室の事はセブンスターのせいにし校長先生に伝えた

クロノス先生は保健室の後片付け、俺達は大樹を家に運んだ、  
その途中にカイザーと吹雪さん合流した、どうやら二人でセブンスターズの一人を倒したそうだが、  
一人じゃなく集団だといってたけど

大樹の家にカイザーと吹雪さんも付いて来た、あと何故か万条目と三沢も

「なんじゃーこれーこれは！？」

「コレは！？」

「すごいよね、僕も外に出たとき驚いたから」

万条目と三沢が大声で驚いたと同時にレイが煩いと叱る

中に入るとジュニアが待っていた

「よう、事情はしってる、本体を奥に運んでくれ」

「「「天見!?!?!」」」

「は~~~~い、ジュニア君久しぶり!」

「黙れ、ノー天気親不孝」

グサ

「そうね、兄さんは親不孝したし」

「あ、アスりんホッゴ」

俺達は吹雪さん無視して（無視しろと明日香に言われ）ジュニアの説明をした

大樹を寝かした部屋でジュニアがいろんな薬草を調合している

「レイ、コレを口移しで飲ませろ」

「『『『『口移し!?!?』』』』」

「ああ、漢方は舌の器官に感じ取らんといけないからな、ただ口移しをした後うがいをしとけ、かなえい不味いからな」

「はいはい、男共は回れ右」

俺達は後ろを向いた

「ムムー」

レイがうがいするために走り出した

「そんなに不味いの？」

「ゴツホ、ゴツホ」

大丈夫か

「僕も飲んだけど生き物が飲むものじゃない」

「そうなのか吹雪？」

「ああ、でも効き目が凄い」

「なあ、ジュニア何の漢方を使ったんだ？」

「トリカブト」

「鳥兜？」

「……トリカブトって猛毒じゃないか？」「」

「健康体に使えば猛毒だけど、本体みたいのに使えば立派な蘇生薬だ、

ちゃんと分量を使えばだけど」

「くわしいんだな」

「ああ、お前等はどこまで聞いた？」

ジュニアに説明をして、大樹のことを教えてもらった、レイが戻ってきてからだけど

吹雪さん達は信用できるからかジュニアは説明した、ただし未来を知るための質問は答えないと強く言ってきた

「ダイヴァインが集めたサイコデュエリス、

「お前達、よく無事だったな？」

「大樹君が先制攻撃で」

「「「なるほど!」「」」」

「それに最後は自縛だし」

「自縛?」

「闇の誘惑で自身を世界から除外されたみたいだったぜ」

「闇の誘惑は出たばっかのレアカードか」

それと俺達は大樹がハサミでさし電撃をぶち込んだことを話したら、吹雪さん達も痛そうな顔をした

俺達は大樹の家を出た、その時昨日と同じようにフードを被った人物が現れた

「天見は!?!」

「悪いが、今回は俺が相手するぜ」

「アニキ!?!」

「十代貴様!？」

「へへ、さあ早くデュエルしようぜ」

「いいだろう、楽しませてくれよ?」

「てゆうかお前の名前は?」

「この姿の時はルドガーだ」

「デュエル!!」

昨日と同じように炎の壁が出来た

「私のターン! ドロー! 私は魔法カード愚かな埋葬を発動! デッキからカードを一枚墓地に捨てる!

俺は地縛神 Uruを墓地に捨てる」

「「「いきなり墓地にだと!？」」「」

「そして、カードを一枚伏せ、マッド・リローダーを守備表示で召喚してターンエンド!」

ルドガー 手札3

伏せ1

羽1

「俺のターン！ドロー！俺はE・HEROエアーマンを攻撃表示で召喚！エアーマンの効果でデッキからHEROと名のついたモンスターを手札に加える！俺はスパークマンを手札に加えるぜ！そして融合を発動！手札のバーストレディとバブルマンを融合！現れるE・HEROアブソルトZero！」

「エアーマンでマッド・リローダーを破壊しろ！」

「マッド・リローダーの効果発動！このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、自分の手札を二枚墓地に送り、デッキから二枚ドローする、私は二枚ドロー！」

「アブソルトZeroの直接攻撃！」

「ぐううう」

「よしLPを1500まで減らした」

「いけるっすよアニキ！」

「俺はターンエンド！」

十代 手札3

伏せ0

場2

「私のターン！ドロー！永続罨リミット・リバーズを発動！自分の墓地から攻撃力1000以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚！こいDTナイトメア・ハンド！」

「……レベルマイナス10!?!」「……」

「DTナイトメア・ハンドの効果発動！召喚・特殊召喚に成功したとき手札からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する事が出来る！も一体のマッド・リローダを守備表示で特殊召喚！」

さらに壺魔人を攻撃表示で召喚！壺魔人の効果発動！手札の強欲な壺を一枚墓地に送ることで、自分はデッキから三枚ドローできる、三枚ドロー！」

「レベルマイナス10のDTナイトメア・ハンドとレベル3の壺魔人をダークチューニング！」

「……ダークチューニング!?!」「……」

「暗黒より生まれし者、万物を負の世界へと誘<sup>いざな</sup>つ覇者となれ！ダークシンクロ！現れよ、《猿魔王ゼーマン》！」

「攻撃力2500！アブソルートZeroと並んだ」

「猿魔王ゼーマンをエアーマンに攻撃！」

「ク」

「カードを2枚伏せ！ターンエンド！」

ルドガー 手札2

伏せ2

場1

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード強欲な壺を発動！デッキから二枚ドローする！」

俺はスパークマンを攻撃表示で召喚！アブソルートZeroで猿魔王ゼーマンを攻撃！」

「畏カード聖なるバリア ミラーフォースを発動！」

「けどアブソルートZeroでお前のモンスターは全滅だ！」

「ならカウンター罫威風堂々を発動！バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。  
相手が発動した効果モンスターの効果を無効にし破壊する。  
アブソルートZeroの破壊効果を無効！」

「カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

十代 手札4 LP3300

伏せ1

場0

「私のターン！魔法カード死者転生を発動！手札を一枚墓地に捨て！墓地にあるモンスターを手札に加える！私に加えるモンスターは地縛神 Uruだ、場のモンスター二対を生贄にし！」

「我が運命の光に潜みし亡者達の魂よ！流転なるこの世界に暗黒の真実を導くため、我に力を与えよ！現れよ！」地縛神 Uru！」

「来たか、地縛神がしかも昨日と同じく島の皆が！」

「それに攻撃力が3000！」

「アニキ！」

「十代！」

「貴様の場はがら空きだ、地縛神 Uruの直接攻撃！」

「畏カード和睦の使者を発動！このターン戦闘ダメージはゼロだ」

「ふん、やはり天見か？」

「ああ、地縛神の攻撃だけは絶対に喰らわない」

「カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

ルドガー 手札2

伏せ1

場1

「俺のターン！ドロー！俺の勝ちだぜ！速攻魔法サイクロンを発動！お前の伏せカードを破壊するぜ！」

魔法カード俺は手札から魔法カード《融合回収》 発動

墓地に存在する融合のカード1枚と、融合に使用したモンスター1体を手札に加える、

俺は融合とバブルマンを手札に戻し、融合を発動！スパークマンとバブルマンを融合！

現れるE・HEROアブソルートZero」

「だが地縛神に攻撃対象に出来ないぞ」

「ああ、でもE・HEROアブソルトZeroの効果は何も墓地に送って破壊効果を発動するわけじゃない！俺は速攻魔法融合解除！フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター1体を選択して融合デッキに戻す。」

さらに、融合デッキに戻したこのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

E・HEROアブソルトZeroの効果はフィールド上から離れた時、

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する」

「なに！？」

「つまり融合デッキに戻ったことで場に離れた、E・HEROアブソルトZeroでお前のモンスターを破壊する！そしてスパークマンとバブルマン場に特殊召喚！スパークマンで直接攻撃！」

「くううううう」

「ガツチャ！俺の勝ちだ！」

「やりやがった十代の奴」

「やったーアニキの勝ちだ！」

「それより、お前は何者だ？なぜ残留思念に取り付く？」

「ふふ、勝った褒美だ、教えてやる

取り付いてるわけじゃない、残留思念を具現化させて操ってるだけだ」

「じゃあ、お前の本体は？」

「ちゃんとあるぞ、全ての残留思念を倒せば俺が直戦ってる」

そういつて昨晚のの用にカードともに消えた

俺達はそのまま寮に帰った

明日香 Side

「ジュニア、本当にいいの、私が看病で？」

レイちゃんに睡眠薬の入った紅茶を飲んでもらった  
昨日からろくに寝てないから無理やり寝かした

大樹は別に大怪我じゃないからほっといて寝かせておけとジュニア  
がいった

「考えてみる、本体が自分が寝ているあいだにレイと他の男と一緒に  
一晩過ごしたら、

本体はあした怒り狂うぞ」

「そこまで？」

「本体は何かに興味を持つのは珍しいが、興味を持ったら尋常じゃ  
なく執着する」

「そうなんだ、ありがとう」

ジュニアが紅茶を入れてくれた、しかも本人は水を飲んでるし

「電撃だって、本来は静電気程度だったが、興味をもっていまじゃ  
あ、7・8億ボルトまでだしたり、

器用に皮膚だけ焼いたりできるようになったから」

「ん!？」

この匂いは

「ん? コレは酒だぞ」

「ブッフ!？」

「汚い」

「いや、だって」

「俺は人間じゃないからな、年は関係ない」

「そ、そう」

「プツハー、うめえ」

親父？

「それより、薬とかに詳しいのね」

「ああ、サテライトじゃあ薬は愚か食べ物もろくに無い、シティに行っても薬を買う金が無いから、

図書館で調べて、山で薬草を取りに言ったんだよ本体は」

「大樹はやっぱり苦労してたの？」

「チビ達は4人いたからな、大人は信用できない、最悪持っていた食料を狙って殺しにくることもあった」

「.....」

「子供だから殺さないなんて事は無い、そう言った奴が本体が居た地区にはゴロゴロいた、だから気に入らない奴には容赦がない」

「そう」

「今日のデイヴアインって奴にも容赦が無かっただろっ？」

「ええ」

「けど気に入った奴には世話をやくからな」

「アナタは大樹と記憶が共通してるの」

「俺が生まれた前の本体の記憶があるだけだ、同じ記憶を持っても同じ性格になるわけじゃない」

私が疑問に思っていたことを答えてくれた

「デュエルするときや制裁を加えるだけ、記憶というか感覚や視覚を共通する」

「チビレイちゃんも？」

「そうだ」

「アナタとチビレイちゃんは記憶とかは共通しないの？」

「……………」

ん

「まねに、というか夜勝手に意思がリンクする」

「夜？なにか原因は？」

「少し考えれば分かるだろう？俺とチビは何を元にしたか？」

「元って、大樹達よね？」

「っは／／／／／／／／／／」

「わかったか」

「ごめんなさい」

「苦労してるのね」

「……………」

私はこれ以上質問が出来なくなり、客間で寝ることにした

学校

「誰かーーーーー手伝って欲しいーーーーノーーーーネ」

16話 十代vs??? (ルドガー) (後書き)

デイヴァイン登場そして除外

17話 デュエルしろ(前書き)

終盤勝負はノリだけなのでツッコミはなしの方向で

## 17話 デュエルしろ

明日香 Side

十代が地縛神を倒してから数日、大樹は学園に通えるまでに回復した  
ジュニアは出血が多いのに電撃を使うと脳に負担が馬鹿にならない  
らしい

原理は分からないけど大樹が元気になったのは良かった

学園祭が始まる四日前に白昼堂々とセブンスターズと名乗る男が現  
れた？

「俺は6人目のセブンスターズ、鍵を賭けて勝負しろ」

「誰だ貴様？」

「挑んでくるなら倒すだけだぜ」

6人目のセブンスターズはホームレスと言ってもいい格好だった

「今までにみたセブンスターズと雰囲気が違うな」

「そうなのーネ」

「お前、まさか？」

「なに？天見、貴様の知り合いか？」

大樹は6人目のセブンスターの知り合いらしい

「いや、というよりお前らは気づかないのか？」

「「「「へ！？」「」「」」

「さすがだな、気づいたのか？」

「雰囲気が大分違うが声は同じだ」

「誰だよ、こいつは？」

「はあ、神楽坂だ」

「「「「は！？」「」「」」

「「誰？」「」

神楽坂つてあの？

確かあの事件から2週間ぐらいたったところ、彼は退学届をだし学園を出て行った

「ああ、吹雪や万条目は知らないな」

大樹は神楽坂君の説明をした

「本当に神楽坂なのか？」

十代は質問する、その気持ちは彼を知ってるなら同じ気持ちね

「人は変わるものですね」

レイちゃん、大樹を変えたあなたが言う台詞じゃないわ

「なんで、お前がセブンスターなんか？」

「鍵を持つお前ら一人倒すたびに5000円くれると依頼人が言うてきたので」

「『『『『安！』』』』」

「高いだろう？自給1000以上に比べたら」

たしかに、七人倒せば35000円

「たしかに」

大樹が納得してる

「競馬や麻雀資金の為に前らを倒すぜ！」

なんという不順な動機

「だったら俺が行くぜ！」

十代が名乗り出た

「じゃあ、始めよう」

神楽坂はポケットから何かを出した

（デッキ？）

違った、簡単デュエルフィールドだった

「お前、ディスクは？」

「ない！」

断言

「うっ、誰か神楽坂にデュエルディスクを貸してやってくれないか？」

十代が私達に頼んできた

「ほい」

大樹が神楽坂君に渡した

大樹 Side

「ほい」

「助かる」

俺がディスクを神楽坂に貸した、  
神楽坂はデッキをディスクに装着した

しかし、こつも雰囲気が変わるものだな、  
覇気というか、やる気が感じられん、俺も人の事は言えないが

「デュエル！」 「デュエル」

「俺のターン！ドロー！手札から融合を発動！手札のE・HERO  
フェザーマンとE・HEROバーストレディを融合！来い！E・H  
EROフレーム・ウィングマン！ターンエンドだ！」

十代は何時も道理に融合を行いターンエンドした

「俺のターン、ドロー、俺は魔法カード洗脳・ブレイン・コントロールを発動！」

フレイルム・ウィングマンのコントロールを得る」

「何!」

「さらにゴブリン突撃部隊を召喚、二体のモンスターで攻撃、俺の勝ちだ」

「アニキが1ターンキルを決められた?」

「うそ?」

「十代のミスだ、伏せカードをしていたらフレイルム・ウィングマンだけの攻撃ですんでいたか、

フレイルム・ウィングマンを生贄要因にしていたかで、また違っていた」

「そうだ、伏せカードがなかったから簡単に決められた」

神楽坂が肯定した

ライフが8000だったら結末は完全に違った、4000だと1キルが簡単に決められる、

だから別に不思議じゃない、それに洗脳・ブレイン・コントロール

はカナリのレアカードのうえ、制限になっていない、たしかかなり後だったような？

その後も万条目が挑んだが、帝デッキにやられた、氷帝で伏せカードを破壊、強者の苦痛で相手の攻撃力を下げる、邪帝でアームドラゴンを除外など簡単なコンボを決めた

「こんなに強くなってるなんて」

「信じられないッス」

「マンマミーヤ」

「天見の言ったことで俺はデュエルでは強くなったが、満足できない、俺が満足できるのは競馬と麻雀だけだ！」

俺が言ったこと？もしや！

「視野が狭い？」

「ああ、デュエルは複雑なコンボより簡単なコンボのほうがいい、それがわかった」

「確かにな、複雑なコンボは手札の消費が激しい、強者の苦痛とレベル5、6のモンスターだけで、相手は苦戦する、そのあいだに手札のんびりたればいいか？」

「なるほど」

俺や神楽坂の言葉に何人か納得した

「次は誰だ？」

「俺がやるっ」

「『大樹！』」

「ただし、場所を移す、それと依頼人は鍵を奪えといったのか？」

「？ああ」

「デュエルをしろとは？」

「いや、ココはデュエル・アカデミアだから言わなくても言いと思  
つたのだから」

「ふむ」

「大樹さん？」

たしか大徳寺も経験者だったな、後は

「明日香」

「何？」

「ガ○マをデュエル場まで呼んでくれ、十代は大徳寺を」

「「??」」

「なんで？」

「大徳寺はやったこと有るといつていたからな、ガ○マはタダの人数あわせだ」

「にんずう、四人でタッグでもやるの？それがバトルロワイヤル？」

「神楽坂の本気を見たい」

十代達は？顔で俺が指名した人達を呼びに言った

明日香 Side

大樹にたのまれテニス部長を呼んだ

何を考えてるのかしら

4人ともデュエル場に立った、いつの間にかギャラリーがたくさん来ていた

「凄いことになってるすっね」

「何を考えてるんだ天見は？」

四人の真ん中から小さい台と椅子が出てきた

「何だあれ？」

「これから麻雀をする」

「「「「「「「「「「麻雀!？」」「」「」「」「」

「さて何で僕が？」

「そうニヤー」

「先生は経験者だよな？」

「そうだけどニヤー」

「先生が一位を取ったら半年、ファラオの餌を俺が持ちます、二位なら一月、三位なら一週間」

「やるぞー、おお！」

大徳寺が壊れた

「どうだ、神楽坂？これならやる気がでるだろう？」

確かに十代や万条目君に勝ったときはこんなもんかというよりデェ  
エルそのものにやる気が無かった

だからといって麻雀をやるといっても彼がやる気を

「やる！」

出すの！？ていつか大樹なんの本気？

三人は椅子に座るが

「さて、何故僕がここに居る？僕は初心者だぞ」

「人数あわせ」

三人でハモル

「大丈夫だ！俺が補佐する、いいだろう？」

「ああ」

誰だか知らないが彼の、って名前は何だっけ？

綾小路だったわね、その友人が補佐ををすと言った

「勝利の栄光を君に」

「謀るき満々か？」

なぜだか彼、綾小路は怒った

「それよりやるぞ」

神楽坂君が異様にやる気を出している

「わかったよ」

四人がすわる、そしてもう一人はガ○マの後に立つ

どうやら開始したみたいね、私たちを含め、会場の殆んどが麻雀を知らない、

けど野次馬根性丸出しで勝負を見ようとしてる

注 ここからは麻雀ですが細かくどころか、麻雀をしらない明日香視点だから

雰囲気だけです、専門用語少ししか出てきませんが、説明は有りません、あしからず

「親は私ニヤー」

親？先生はそう言って牌？を取り始める、自動で混ぜるのね  
それより彼らの後ろ何か見えるんだけど？

- 1 ・先生の頭上には赤い着物を着た白髪の長髪
- 2 ・大樹にはジュニアが、でもジュニアより顔がフレンドリー
- 3 ・神楽君の頭上は阿修羅の顔をした本人が
- 4 ・綾小路の頭上には丸い？紫色？の戦艦かしら

あれってなんなの？立体映像よね？  
デュエルディスクと同じ仕組みよね？

彼は順番に牌を取り牌を捨てていく、各25000から見たいね  
モニターに半荘戦？どいう意味かしら？  
なぜにデュエル・アカデミアにこんなものが

4「ははは、リーチ！」

2「それツモ！満貫8000点」

4「なにー！ー！ー！？」

綾小路の戦艦？が落とされる

(見え見えじゃねえか、初心者かよ)  
(見え見えニヤー、邪魔だな彼は)

4「クッソー」

「「「何をやっている？」「」」

「は？なにつて？」

「」「脱げよ」「」

先生の口調が変わってる

「脱衣麻雀か！？」

「当たり前ニヤー（邪魔だからとっと思えて欲しいニヤー）」

「1000点に付き一枚な（邪魔だから退場させるか）」

「当然だろう（人数あわせで呼んだのは失敗した）」

「お前たち謀ったな！お前たちいいい」

綾小路が逃げ出した、無理も無いわね脱がないといけないなんて  
変わりはあるのかしら？それにしても彼が座ってた椅子って金色だ  
ったのね、趣味が悪い

「私が変わりにやろう」

「いいのか？じゃあ点数は戻すぞ」

「そうだな、仕切りなおしだ」

「それがいいニヤー」

「いや、このままでいい」

「」「！」「」

「此処からが逆転して見せよう、ふふ」

「すごい自信だな」

「じゃあ、再開するか」

「それにしても金色か、目立つ色であるがそれがかえっていい」

「どうやら脱衣は綾小路を追い出す為なのね、それなら呼ばなければいいのに」

「また順番道理に牌をとり始めた」

「大樹が捨てた牌を取った」

「4「ツモ！4000」」

「チッ！」

「4「戦いとは常に二手三手先を読むものだ」」

フレンドリーなジュニアが大きなビームバズーカを持った金色のロボットにやられた

1 「それロンニャー！8300」

4 「なに、ええーい」

赤い着物を着た先生のモンスター？が金色のロボットに「爆○破！」  
といいなが竜巻で倒した

3 「残念だな！ロン！12000」

どうやら前半は終わったみたい、しかしネット中継までしてる、  
しかも見て居る人が1000を超えてる、彼らのコメントは

「マジかよーパネー」

「おいおい、4000以上しか出てないじゃねえか」

「ドンだけ運がいいんだよ！？こいつら？」

など書いてある

後半が開始した

4「ロン！2000・4000！」

綾小路の代わりに人の頭上が赤いロボットに変わった、しかも三人に「ファール」といいながら何かを六つ放った

1「負けないニャー！リーチ！」

4「やるな」

2、3「ちい」

しかし誰も上がらず

「テンパイ」

3「ノーテン」

神楽坂が三人に1000点ずつ与えた

全くわからないわ、何がどう進んでいるのか、

でも神楽坂君はデュエルの時と違って凄いやる気がでてる

先生と大樹は楽しそうにやってるし、

綾小路の代わりに人はニヤケている、本当に楽しそうにやってる

3 「リーチ！」

2 「残念！ロン！リーチ一発ドラ4！12000！」

「何！？」

ジュニアがウロボロス？をもって修羅神楽坂に何か光を放った

大樹が一気にトップに出た

1 「チー！」

2 「ツモ！8000オール！」

牌が左からパタパタと綺麗に順番に落ちていく

大樹が他の3人から大きく点差を広げたが

3 「ツモ！3000・6000！」

神楽坂君が追いつく

修羅が三人に殴りかかる

「やるニヤー！」

「クツ、オーラスか」

どうやら最後まで

どう見ても大樹に追いつけるのは神楽坂君だけ、他の二人はどう出るのかしら

4 「リーチ」

3 「リーチ」

2、1 「追っかけリーチ！」

場が緊張の雰囲気になる

1 「来たニヤー！ロン！緑一色しかもドラ3」

「なにーーーーー!?」

「金剛〇破！」 赤衣着物の長髪が攻撃する

先生が最後に得大点を取り1位、大樹2位、神楽坂3位、そして代わりが4位

1 「やったニヤー！ファラオの餌をよろしくニヤー」

2 「わかった」

3 「クツソー負けたー！！」

4 「認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを」

とりあえず大樹が神楽坂に勝ったから神楽坂は島を出た、

神楽坂君はデュエルでは恐ろしく強くなったが、

競馬と麻雀の掛け金を稼ぐためにしかデュエルはやら無いみたい

「100000円手に入ったからいいか」

と最後に言っつて島を出て行った、そんなに生活キツイのかしら  
順位つて順番と同じになっただけど麻雀はああいう物なのかしら？

6人目のセブンスターズを退けた？でいいのかしら？

それより代わりの人誰だったのかしら？

さらに驚くことに地縛神をもつ者を二回倒したのは神楽坂君だった  
理由は「同じ獲物を狙う奴を倒して何か可笑しいか？」

もう今回は色々な意味で変な一日だったわ

## 17話 デュエルしろ（後書き）

麻雀の経験はゲームで少しあるだけです、  
間違いはご了承ください。

次回は学園祭

## 18話 二人の狩人（前書き）

この回でとんでもないミスをしたので、  
デュエルの部分を少し変えました

## 18話 二人の狩人

大樹 Side

学園祭早朝

俺は他の寮の様子を見に行つたその帰り

「なんでお前が居るんだ、瀬人？」

「貴様の様子を見に来ただけだ」

「で、本音は？」

「学園のレベルを図りにきた」

「だったらブルーに言って来い、連中は弱いくせに態度は悪いぞ」

「噂は本当だったのか」

「噂になるぐらい悪いってことだろ、このカードを貸してやる」

「ん、コレは!?!」

「本物だぞ、ただ遊戯やお前が使っていたように現実世界には干渉しないが、デュエルでは効果はかわらん」

「オベリスクの巨神兵!」

遊戯やペガサスは俺が三幻神を知っている、むやみに使わないでくれとお願いされたが、  
今日は祭りだから良いか

「とりあえず、連中は傲慢だ、客に対しても傲慢だと来年の入学希望者は激減だ

この手の悪い噂は直ぐに流れる、お前が直々に制裁しろ、社長としてのストレスも発散できるしな」

「いいだろうクズどもの制裁は俺がする」

「ああ、それと変装ぐらいしたほうがいいぞ」

「分かっている」

瀬人はそのままブルー男子寮に向かった

「ご愁傷様、ブルー男子、これであの態度が直ればいいけど少しは面白くなりそうだな学園祭」

レッド寮は名物コスプレデュエルをやる

俺は着替えるため直ぐにレッド寮に戻った

「なんで、明日香や吹雪がこの寮にいる？」

しかも、明日香はコスプレしてるし

「翔君に頼まれたの」

「僕は面白そうだから見に来ただけだよ」

「自分達の寮はいいのか？」

「それはオツケー」

「私も大丈夫よ」

「大樹！どこ行ってたんだ？家にもいなかったし」

「他の寮の様子を見に、似合ってるぞ十代」

「おお、そうか？」

「ああ、馬鹿っぽくて」

「ひでえ！」

「大樹はどんな格好するの？」

「俺は氷結界の風水師だ」

俺は氷結界の風水師のカードを見せた

「好きなのねこの手の服」

「おう、大好きだぜ」

「でもコレ男性なの？」

「しんねえ、でも気に入っているからオーダーメイドして頼んだ」

「……いくらしたの？」

「生地が200万、後は職人に頼んだから80万かな」

「……280万!?」

「一度試着したが、結構良くてな幾つか色違いの生地を5つほど頼んだ」

「……1400万!?」

「いや、生地だけ、後は自分で出来る、今回は時間が無かったから頼んだ」

「そうなの、裁縫とか得意なの？」

「ああ、チビ達の服は俺が作った」

「そうなの…、レイちゃんはどんな格好？」

「レイは以前使っていたカードのコスプレを選ぶと思ったが、屋台で汚したら嫌だから、リチュア・エアリアルを選んだ」

「また聞いたこと無いカードを」

「これだ」

「コスプレは絶対だと翔が煩いからな、レイは結構気に入ってるぞ」

「それはよかったわ、以前使っていたカードって？」

「恋する乙女ってカードだ」

「恋する乙女は守護のたゴッホ!？」

「吹雪、黙ってる」

俺は吹雪に蹴りを入れる

それから数分経ち、何時ものメンバーが集まった、  
なぜか三沢や亮までできていた

「さてと、とりあえず適当に誰かを戦わせるぞ」

「じゃあ、俺と大樹でいいか？」

「かまわん」

「じゃあ今回は今朝作ったデッキでいいか」

「今度はどんなデッキだ？」

俺達は決闘場の向かった

「ちょっと待ったーーーーー」

「「「「「ん？」「」「」「」

「あの私がデュエルしたです」

ブラック・マジシャンガールのコスプレをした子が叫んだ

「誰とやりたい？」

万条目が聞く

「マスターと！」

（（誰だよ？）（）

「とりあえず、マスターって誰だ？」

万条目が顔を引きついている

「天見大樹さんです」

「なんで俺がマスターと呼ばれるんだ？」

そんな疑問に十代が答えた

「あれ多分精霊だけ、大樹が一回使ったよな？」

「精霊？（龍可が言ってた精霊か）」

「ハイ！そうです、それ以降使ってくれないから、こうして頼んできたんです、

私が勝つたらこれから沢山使ってください」

「お前が勝てばだけど、もし本当に俺のカードの精霊なら俺の強さを知ってるよな？」

「グツ、ハ、ハイそれでも使って欲しいから」

「どうするんだ、大樹？」

俺達の会話は観客や翔達に聞こえてない

「断つ」駄目に決まってるだろう、客が見てるんだぞ」・・・わかった」

明日香 Side

大樹達が話を終わらせたみたいね

大樹がああブラック・マジシャンガールのコスプレをした子とデュエルするみたい

レイちゃんが何か不機嫌だ、お互い独占欲が高い

そんな風に思っているとデュエルが始まった

それにしても、翔君や周りの観客が一気に盛り上がってる

「デュエル!!」

「私のターン!ドロー!モンスターをセット!カードを一枚伏せ!  
ターンエンドです!」

ガール 手札 4

伏せ 1

場 1

「俺のターン!ドロー!モンスターをセットして!カードを一枚伏  
せ!ターンエンド!」

大樹 手札 4

伏せ 1

場 1

「私のターン!」

「うおおおおお!頑張れ!」

周りの声援が煩いわね

「ドロー!モンスターを生け贄に捧げ」

「来るの!?!」

「私を召喚しますー」

「「来たー」」

「そしてモンスターに攻撃します！」

破壊されたのはヘカテリス

「このままターンエンドです！」

ガール 手札4

伏せ1

場1

「俺のターン！ドロー！魔法カード神の居城・ヴァルハラを発動！1ターンに1度、自分の場にモンスターが存在していない時、天使族を特殊召喚できる  
俺は手札から守護天使ジャンヌを特殊召喚！」

「おーとつ、大樹選手はレベル7のモンスターを特殊召喚した！」

「おとなげ無いぞー」

「さらに智天使ハーヴィストをブ通常召喚！伏せカード王宮のお触れをオープン！」

「「「悪魔ああー！」」」

「畏ぐらい使わせる！」

「守護天使ジャンヌでブラック・マジシヤンガールを攻撃！」

ブラック・マジシヤンガールが守護天使ジャンヌに破壊される

「きゃあああああ！」

「守護天使ジャンヌはモンスターを戦闘で破壊し墓地に送ったとき、破壊したモンスターの元々の攻撃力分ライフポイントを回復する！俺はライフを2000回復！」

「少しは手加減しろー！？」

「ブラック・マジシヤンガール！そいつを殺せー！」

「がんばるっすよー！」

「そんな奴にまけるガハッ！？」

「へ!？」

何故か大樹に罵声を浴びた連中は倒れた、

「大声出しすぎだ、目眩でも起きて倒れたんだろう？」

大樹はしつれと言う、間違いなく大樹がやった見たいね

その御蔭か煩い観客は気絶して、純粹にデュエルを見たい人だけが残った

ちなみに翔君も気絶してる、と思ったが

彼らはゾンビ用に起き上がった

「チツ!再開するか、智天使ハーヴィストで直接攻撃!ターンエンド!」

大樹 手札2 LP6000

ガールL

P1400

伏せ(2オープン)

場2

「がんばれ!」

「ぼ．．くたち．．おうえん．．してるっす」



カード強欲な壺を発動！二枚ドロ！ウィクトーリアを通常召喚！  
The splendid VENUSでブラック・マジシャンを  
攻撃！  
最後にウィクトーリアで直接攻撃！」

大樹が勝利したと同時に男達はブーイングを始める

大樹 Side

「さてと、俺の勝ちだ」

「やっぱりマスターに勝てないか」

十代が近づいてきた

「どうするんだ、大樹？この子はお前のカードの精霊だぜ？」

「はあ、そうだな、レイの側に居てやってくれ」

「レイさんですか？」

レイの事は知ってるみたいだな、どうやら本当に俺の精霊みたいだ

「レイ自信に説明して、許可を貰って、側に居てやってくれ」

「あー、もし断られたら?」

「諦めてくれ」

「そんなー」

「レイの精霊なるならレイも断らないはずだけど」

「はい、逝って来ます」

しょんぼりしたままレイの方に向かうブラック・マジシャンガール  
行くが逝くになってる

「大丈夫かあの子?」

「大丈夫だろ、俺の精霊ならレイは断るだろうが、レイ自信の精霊  
なら望みはある」

「ふん、それより今度は「悪いが俺は他の豚共をかる、十代は遠  
慮してくれ」…おおっ」

瀬人もブルーで暴れてるみたいだし、俺も此処で暴れるか

ブラック・マジシャンガールが私達のところにきて自分が精霊であると説明して、

レイちゃんの側にいて良いかレイちゃんに聞いてきた

はつきり言えば大樹はレイちゃんの精霊になれとっているようなもの

「うーん、私は精霊は見たこと無いけど、どうしてアナタが見えるの？」

それは私も不思議に思った

「今は実体化してますから、私が見えるんす」

「じゃあ、実体化してない時はどう認識すればいいの？」

「私のカードを、というよりマスターである大樹さんがもってるカードを持っていれば実体化しなくても私が見えます」

「じゃあ、最後の質問、どうして精霊かというか実体化したの？」

「うう…、大樹さんが私を全く使ってくれないから頼みに来たんです」

それはまた健気で、確か神楽坂君の時に使ってから一度も使ってなかったわね

レイちゃんはどう出るかしら

「いいよ、大樹さんは別に強く断ったわけじゃないし、」

「本当ですか？」

「うん、夜はジュニア達と一緒に寝てもらっけど、それでもいいの？」

「はい！わかってますお二人の邪魔はしませんから」

そのあと、授業中は側に居るときは実体化しないように約束した  
そんな話をしていたら会場がとんでもないことになっていた

「いけF・G・Dの直接攻撃！」

「ぐぎやあああああ！」

大樹が先程のデュエルでブーイングしていた人達を狩っていた

「次は貴様だ！」

「ひひひひひひ！」

「ブラック・デーモンズ・ドラゴンの直接攻撃！」

ドラゴンデッキのパワーで獲物（ブーイングした人達）を狩っている大樹

まともに大樹とブラック・マジシャンガール戦をみていた人達には爽快だったらしく、

大樹に声援をおくるだけじゃなく、逃げる連中を取り押さえた

Side OUT

そのころブルー男子寮

「滅びの爆裂疾風弾！」

「うわああああ！」

「それでオベリスクブルーとは笑わせる、消えるクズが」

「次は貴様だ、さっきの客にたいする態度はなんだ？」

「アルティメット・バースト！」

「ぐぎぎやああああ」

「ブルーがここまで酷いとは」

「ふははははは、くらえオベリスクの巨神兵の攻撃！」

「もうやだああああ！」

海馬瀬人はLPを削らずブルー男子を狩っていた

翌日から海馬の指示によりブルー男子の食事などはレッド以下になった、

ブルー男子は海馬に勝てるわけが無いと開き直り、傲慢な正確は直らなかった

海馬がなぜオベリスクを持っていたことは、学園祭の為に武藤遊戯から借りたと噂がながれた

俺と瀬人が暴れた御蔭で、お客さんは満足していた、ブルーの方は学生の態度が気に入らなかった人が多かった、レッドの方は気持ち悪い連中がやられていくのは爽快だと言われた

夕方

「もう行くのか？」

「ああ、貴様とちがって俺は忙しい、本来ならあんなクズの相手をしてる暇すらない」

「はは、少しはまともな性格になっていれば良いけど」

「ふん、もしあいつ等がああの態度のままプロになるなら徹底的潰すだけだ」

「それがいいな、あんな連中がアカデミアに沢山居ると思われたら、だれも来ないだろうからな」

「それより、コレは返す」

「なんだ、てつきり売ってくれと言つと思つたが？」

「ふん、それを手に入れるときは貴様を倒して手に入れる」

「そうか、それじゃあ」

「ああ」

自前のへりど帰った

俺は瀬人を見送った後、そのまま家に戻った

十代は瀬人が来た事をこの後知り、デュエルしたかったと言っていた  
ブラック・マジシャンガールは俺達と住む事になった、

実体化してもいいのはレイが危ない時と、家の中だけだが

とりあえず学園祭は無事に終わった

## 18話 二人の狩人（後書き）

アテナの効果で手札から天使族を墓地に送り、手札の天使族を一体を特殊召喚するというありえない間違いをしました、なんで間違えた！と叫びたいです、とりあえず大樹が使ったモンスターを変えました。

19話 肩透かし(前書き)

今回主人公が使うデッキはありえねえよこんなものと言っても良いよ  
うなデッキですので、ご了承ください

## 19話 肩透かし

大樹 Side

学園祭から大分経った、十代最後のセブンスターズをいつの間にか倒したらしい、

鍵も封印し、あとはイリアステルの刺客に注意を向くだけだ

つーかアイツの本体は愚か名前も知らんけど

ある日の休日にレイと他三名で気持ちよ〜く日向ぼっこしてるときイキナリ地震が起きた、

火山の方に大きな柱が出てきた

(イリアステルか?)

ジュニア達をおいて俺達は火山の方に向かった、無論D・ホイールで(猛スピード)

火山に着いたとき何故か何時ものメンバーが居た

「おい、何が起こった!？」

「大樹!？実は万条目が鍵を盗み出し、明日香とデュエルしたら、

三幻魔の封印が解けちゃったみたいだ」

「なんだ、そのありえない展開は？」

「……万条目が悪い！」「」「」

「ち、ちがうこんなはずじゃ」

「こんなはずじゃなかったてか？俺だって驚いてるんだまさか貴様が此処まで馬鹿だなんてな」

どうやら校長やクロノスも来たみたいだ

「どうなってるノーネ？」

「コレは？」

「……「こいつの所為です！」「」「」「」

皆一斉に万条目に指を刺す

「おい！アレ！？」

三枚のカードが出現した

十代達が近づこうとしたとき

「そのカードを渡すわけにいかん」

空から鉄の塊？が落ちてきて着地した、塊の中に人が、爺さんが液体の中に居た

爺さんは校長に挨拶し、

それから爺さんが説明をし始めた

明日香 Side

影丸理事長の説明は長かった、要は三幻魔で永遠の命と世界を手に入れたいと、

痴呆なのかしらこの爺さん？

皆が自分が戦って野望をとめるといい始めるが

「私の相手は遊城十代、お前だ、精霊の力を強く持つお前だ」

理事長が十代を指名した時、いままで静かだった大樹が

「悪いが、先に俺がやる！」

何故かキレ気味でいう

「雑魚は「テムエがセブンスターズをけしかけたんだよな?」

「「「「「あ!?!」「」「」」」」

忘れてた、レイちゃんは一度、巻き込まれ魂をカードに封印されていた

「貴様は此処でぶっ殺す!」

「待て、大樹!一応爺さんなんだぜ?」

「関係ない」

大樹の体から電気が発し火花が起きる、理事長は命の危険を感じたか

「だったらわしとデュエルだ、十代の前に貴様を倒そう」

今の大樹が断つて、攻撃すると思っただが

「いいぜ、完膚なきまで叩き潰し、ショック死させてやる!」

勝利宣言した

三幻魔の力は知らないけど、大樹にはスカーレット・ノヴァ・ドラ

ゴンや  
出したこと無いがシューティング・スタードラゴンがある

「その言葉後悔させてやるっ!」

「デュエル!!」

「俺が先行だジジイ!ドロー!俺はモンスターをセット!カードを一枚セットそて!ターンエンドだ!」

大樹 手札 4

伏せ 1

場 1

「わしのターン!ドロー!手札から《トライアングル・フォース》を発動!

このカードが発動した時、デッキからトライアングル・フォースを2枚選択し、

発動する事ができる、そして手札から降雷皇<sup>レインボウ</sup>ハモンを特殊召喚!》

そんな、いきなり三幻魔を召喚するなんて、大樹はどうするの?



皆が思った

だってあの笑い方は外道というかなんというか

「俺は、手札から永續魔法生還の宝札を発動！

さらに魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札1枚をコストに手札・デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！

来いD・HERディスクガイを特殊召喚！

そして手札から速攻魔法地獄の暴走召喚を発動！

俺はワン・フォー・ワンでコスト捨てたディスクガイと最初のターンで破壊されたディスクガイを墓地から特殊召喚！

ジジイはハモンしかないから特殊召喚はできないな

墓地から特殊召喚したディスクガイの効果発動！

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを2枚ドローする

生還の宝札の効果で俺は合計6枚ドロー！」

「……………な、6枚！？」「……………」

大樹とレイちゃん以外がおどろいた、大樹の手札が1枚から一気に7枚になった

「さらに三体のモンスターを生け贄して、現われオシリスの天空竜！」

「なっ！？」

「なんで大樹がオシリスを！？」

「あれは武藤遊戯がもってるんじゃないのか!？」

「正真正銘俺のだ、遊戯と違って世界に影響は与えないが、このカードの攻撃力・守備力は自分の手札の数×1000だ、つまり7000だ!オシリスよあのラーもどきを破壊しろ!  
ちよつてんどじは  
超電導波サウンダー・フォース!」

影丸理事長のライフが1000になった

大樹が高笑い?というか爆笑するはずよ、なんてカードなのよ

「カードを一枚伏せ!エンドだジジイ!ちなみに神は畏・モンスター効果を受けず、魔法カードの効果は1ターンのみ受け付ける」

大樹 手札6

伏せ3(一枚オープン)

場1

「わしのターン!ドロー!」

理事長は既に戦意を失ってるわ

「わしはカードを三枚伏せる、そして伏せた三枚の畏カードを生け贄にして神炎皇ウリアを守備表示で

特殊召喚」

「オシリス効果発動！相手フィールド上にモンスターが召喚・特殊召喚された時、そのモンスターが攻撃表示なら攻撃力を、守備表示なら守備力を2000ポイントダウンする、この効果によって攻撃力または守備力が0になったモンスターは破壊されるぞ」

「召雷弾<sup>しやうらいだん</sup>！ウリアは守備力が2000ポイントダウン！」

「くう、しかしウリアの効果発動！相手の伏せカードを一枚選び罨カードなら破壊できる！で左の伏せカードを選ぶ」

「残念！魔法カード！」

「ターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

罨カードエンジェル・リフト発動！墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚！

D・HEROディスクガイをを特殊召喚！更にリバースカードオーブンを！速攻魔法地獄の暴走召喚を発動！残りのディスクガイを墓地から特殊召喚！生還の宝札で9枚ドロー！」

オシリスの攻撃力が15000になった、でもエンドフェイズに6枚になるように手札を捨てなければならぬわ、どうするの大樹？

「俺は三枚のディスクガイを生け贄にして、全てを破壊しつくせオベリスクの巨神兵！」

二枚目の神、もう私達は言葉を失った

.....

「手札から永続魔法無限の手札を発動！これでエンドフェイズに6枚になるように捨てる必要は無い、更にカードを3枚伏せ！ターンエンド！冥土の土産に全ての三幻神の攻撃を味あわせてやる」

大樹 手札12 LP3000

伏せ5 (内二枚オープン)

場2 オシリスの天空竜 攻12000

オベリスクの巨神兵 攻4000

「オベリスクは自分フィールド上のモンスター2体を生け贄に捧げる事でこのカードの攻撃力は(無限)となる、ククク、さあ足掻

けジジイ、貴様の風前の灯火の命など神で消してやる」

もう大樹が悪役ね、それにしてもなんてデタラメなカードなの

「わしのターン！ドロー、ウリアの効果で一番右の伏せカードを選  
ぶ」

「よかったな、二枚目のエンジェル・リフトだ」

大樹の罠カードが破壊された

「俺のターン！ドロー！俺は永続罠カード発動！《呪縛牢》、このカードは自分の融合デッキからシンクロモンスター一体を自分フィールドに表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは効果は発動する事ができず、効果は無効化される。また、表示形式を変更する事はできない。

俺はスターダストドラゴンを守備表示で特殊召喚、

さらにバスターモードで場のスターダストを生け贄して

デッキからスターダスト・ドラゴン/バスターを特殊召喚！

手札から融合を発動！手札のE・HEROオーシャンとエアーマンを融合！

E・HEROアブソルートZeroを融合召喚！

さらに手札からミラクルシンクロフュージョンを発動、墓地にあるスターダストとディスクガイを除外、

波動竜騎士 ドラゴエクティスを融合召喚！」

「シンクロモンスターの融合素材にした融合モンスター!?」

「俺はまだ通常召喚を行っていない、俺は神以外の3体を生け贄にして。」

ラーの翼神竜を召喚!このカードの攻撃力・守備力は生け贄にしたモンスター元々の攻撃力・守備力を合計した数値」

つまり

3000 + 2500 + 3200 || 攻撃力8700  
2500 + 2000 + 2000 || 守備力6500

フィールドは地獄絵説かしてる

オシリスの天空竜 攻11000

オベリスクの巨神兵 攻4000

ラーの翼神竜 攻8700

「ラー翼神竜よ、オシリスもどきを破壊しろ!ゴッド・ブレイズ・キャノン!」

ウリアがあっけなく破壊される

「もう後がないなあ、遺言を書く時間1ターンやる、だからエンドする」

もはやタダの処刑、3ターン目でLPを0に出来たのにそれをやらず理事長の戦意が失っていく様子を見て楽しんでる

「わ、わしのターン！ドロー！タ…ターンエンド」

「俺のターン！ドロー！ラーとオシリスをオベリスクの効果で生け贄する、

これでオベリスクの攻撃力は無限！オベリスクの直接攻撃！インフィニティ・ゴッド・インパクト！」

理事長のLPが0になった、三幻神の前だと幻魔が弱く見えるわ

「わ、わしが・・・」

「チツ、興がそれた、十代！お前が息の根を止めて来い」

「お、俺！？」

「ジジイはお前とデュエルしたいといったんだ」

「そりゃあ、どうだけど」

十代が理事長を見る

魂の抜け殻状態の理事長と戦うのは流石に抵抗するみたいね

「安心しろ、三幻魔を召喚すればテンションも上がるだろう、三幻魔は三幻神と違ってモンスター効果は受けるからお前でも勝てる」

「そういう問題じゃないぞ？」

「ジジイ、勝者である俺に従って十代と戦え！」

「ほ！？」

本人はびっくりした顔をしている

十代と理事長（強制的に）がデュエルを始めた

「さてと、俺はゲストの相手をするからな」

「『『『『ゲスト！？』『』『』』」

「出て来いよ」

いきなり私達の目の前に老人が現れた

「んだよ、ホセのジジイのコピーか？もっと凝らすかと思ったが」

「何時から気づいた？」

「はあ、カマを駆けたただけだ、三幻魔の封印がといた今が絶好のチャンスだろ、

これを見逃すならタダのアホだ、でも三幻魔はあの程度だったぜ」

「デュエルでは使えんが、世界に影響を与える力は凄まじい、だから必要なのだ、

三幻魔を手に入れ、ネオ童実野シティを破壊する」

十代達のデュエルを無視をし大樹達の話に耳を傾けた

「……ネオ童実野シティ!?」「……」

「ゼロリバーはイリアステルの仕業だったな、未来を変えると言っていたが、

どんな未来だ、あの三人から記憶が与えられたんだろう?」

「滅びだ、シンクロ召喚にたどり着いた事で世界は滅んだ、イリアステルはそれを防ぐため過去のネオ童実野シティでWRGPを開催した」

「シンクロ召喚?」

「そうだ、さらなる進化を求めた結果が世界を滅ぼした」

大樹がホセのコピー呼んだ人物の話に驚くが

「クハハハハ、今日はお笑いデーか?シンクロ召喚以前にこの世界は可笑的だよ」

「なんだと!?!」

「考えても見ろ、デュエルモンスターズが始まる前と明らかに世界が変わった、

デュエルは本来は遊びだ、しかし今はどうだ、犯罪を犯してもデュエルで勝てば見逃すなんて当たり前になってる」

大樹の言葉に私達は言葉がない

「デュエルモンスターズは戦争をモチーフにしてる、殺し合いをうんと簡単に血がでないようにな、いやコレはいいか、それよりこのまま決闘者が増えればどうなる？」

「？」

「デュエルをすれば飯は出来るのか？ちがうだろ、飯を作る人間、それ以前に材料を作る農家の人間が必要だ、建物や他のものもおなじだ、別にデュエルは絶対に必要じゃない、このさき決闘者が増え続ければ人が必要なことする人間が減るだろう、

十代みたいにデュエルさえあれば良いと思う人間が出てくる

「つか、現実から目をそむけデュエルに逃げ出すと行ったほうがいいか、

まるでネットゲームの廃人だ

デュエルは本来遊びにとどまるべきだった

未来を変えたいならさらに過去に行ってデュエルの発展をとめるべきだったな」

大樹の言葉に戸惑いを感じるホセの「ピ」

「だったら、私がこの時代に来た意味は？」

「無意味だ！遊星達に勝とうが負けようが結末は変わらん

人間がデュエルだけに目を向けず、世界に目を向けさせるべきだ」

十代達のデュエルは終わりそうね、なんか理事長が三幻魔を融合させたいんだけど、皆は向こうには無関心だった

「俺は滅びの未来を知っていても変える気は無い、悲劇が起こったことで覚悟をした人も居るし、

世界が人類が消えても新たな生物が地上に誕生するだろう、それを止める権利は誰にもねえぞ」

「く、」

「そろそろ退場だ、もっとマシな理由で未来を変えろと思っただ、拍子抜けだ、

人類が滅びるならそれは自業自得、因果応報だ、そろそろ消えろ」

大樹の掌から電気いや雷と言ってもいいものがホセのコピーの放たれた

ズゴツ バチバチバチ

残ったのは影だけだった

「大樹君、彼は？」

「ただのロボットだ、自分の人格をコピーしてこの時代に送ったみたいだな、

電撃をとばしたと同時にスキャンもした、人間じゃない」

「そうですか」

校長が大樹と話す

二人で話が進む

「てっ！何でも誰もデュエルを見てないんだよ、俺がかっこよく転じたのに」

十代が文句を言いながらこっちに来た

三幻魔の事件はこれで終わった、大樹は理事長が三幻神にやられる姿で満足したのか

あれ以上理事長に手を上げてない

それから学園の授業が普通の学園の授業が少し加わった、

そのおかげで殆んど生徒は頭を痛めた、

成績に反映するのは来年からだと言った校長が伝えた

大樹 Side

「にしても、イリアステルの件を重く見てた分、真実知ったときは肩透かしだったな」

「大樹さんは未来に帰るの？」

レイが心配した顔で聞いてきた

「俺は帰らないよ、レイと一緒に居たいから、ペガサスにシンクロ召喚のテストモデルになると以前から言ってるから、此処に残る」

「そうなんだ、良かった」

レイを抱きしめ答える

「此処に、レイの側にいたいから」

「じゃあ、これからもよろしくね」

「ああ」

Side OUT

「あの〜私達はどうすれば？」

「出て行くな」

「そうですね、お邪魔だし」

「うっわ、キスしてます、私あの空気に耐えられるかな」

「耐えろ、ここに住みたいなら」

「耐えないといけませんよ、ここに住みたいなら」

ジュニア達は少し離れたところで話していた

19話 肩透かし（後書き）

イリアステルの件はアツサリ終わらせました、  
期待はずれですいません、

## 20話 江戸じゃないエドだ！

大樹 Side

三幻魔の事件から数日、亮は卒業して、隼人はカードデザイナーになる為学園を出た

そして俺はある夢を見た、三極神を扱う者達の夢、彼等はいずれこのカードと出会うだろう、

俺は直感に任せペガサスに夢の相談をし、三枚の三極神を見せた、俺が夢で見た場所にそれぞれのカードを埋めに行きたいと頼んだペガサスも同意し埋める為に力を貸してくれた

アカデミアは三極神を埋め終わるまで休むことにした

瀬人に頼み公休扱いにして、俺は三極神を埋めるのに集中できた

三極神をすべて埋め終わりアカデミアに帰ってきた

「なんか久しぶりだな」

俺はレイにだけ休む理由を話した、今日戻ると言ったのもレイにだけだ、

もっとも今朝言ったけど

「お帰りなさい、大樹さん！」

「ただいま、レイ！」

俺はレイを抱きしめ頭を撫でた、十代達には内緒にしてくれと頼んだ

「十代達は今どこに？」

「十代達は決闘場でプロデュエリストとデュエルだよ」

「こんな時間にか？」

時間は夜だ、しかも決闘場

「見に行ってみる？」

「そうだな、そのプロもきになるし」

俺はレイの手を握り決闘場に向かった

その途中に学園で起きたことをレイは細かく説明してくれた

S i d e O U T

「これで最後だ、いけドレッドガイ！  
プレデター・オブ・ドレッドノート！消える雑魚！」

十代のLPがゼロになる、そして十代は気絶した

「十代！」

「アニキ！」

翔達が十代に駆け寄る

「動かすな！」

「へ！？」

「俺が見る！」

そこに居たのは大樹とレイ

大樹はすぐさま十代の元により十代の瞳孔を調べた

「大樹！？」

「天見！？」

「大樹くん！？」

「誰だドン！？」

「大丈夫だな、おい三沢に万条目、十代を運ぶのを手伝ってくれ？」

「「あ、ああ」」

「とりあえずその席に眠らせる」

「大丈夫なのか？」

「タダの気絶だ、頭を打ってない、もしかしたら直ぐに目覚めるかもしれない」

俺達は十代を観客席に運んだ

「さてと、始めましてかな」

「誰だドン？」

「天見大樹、学園じゃあ負け知らず、アニキも勝った事ないんだよ」

「まじザウルス！？」

「君が天見大樹か、君もD-I-H-E-R-Oを持ってららしいね？」

「ああ、と言っても二種類しか使わないけど、  
っ！かお前の名前は？」

「エド・フェニックス」

「俺の紹介は必要ないみたいね、何故俺がD・HEROを持ってるか知りたかったら俺にデュエルで勝てよ」

最近山登りやら洞窟の中歩き回ったりでデュエルは全くやってない、十代を誘うと思ったがこの状態じゃあ出来ないし

「いいだろう、僕が勝ったら説明してもらおう（僕しか持っていないデュエルにディアボリックガイを何故持つてるか喋ってもらおうぞ）」

「教頭、俺が勝ったらレッド寮の取り壊しをやめて貰うぞ？いいな！負けたら好きにしてもいい」

「ひ、わ、わかった（いくら彼でもエドには勝てんだろう）」

S I D E O U T

「デュエル！！」

「先行は僕が貰う！ドロー！D・HEROダイヤモンドガイを召喚！ダイヤモンドガイ！  
エフェクト発動！デッキから一枚カードを確認し魔法カードなら墓地に送り次のターンに発動できる！  
僕が引いたのはD・スピリッツ、次の僕のターンでこのカードを発動する！」

「十代のときと違いいきなり使ってきたな」

「そうね」

「あの先輩、勝てるザウルスか？」

「勝たないとレッド寮が潰されるぞ」

「大丈夫！大樹さんなら勝てるよ！」

「さらにカードを一枚伏せ！ターンエンド！」

エド 手札 4

伏せ 1

場 1

「俺のターン！ドロー！俺は天使の施しを発動！三枚ドローして二枚墓地に捨てる！」

手札から永續魔法生還の宝札を発動！

チューナーモンスターデブリ・ドラゴンを召喚！デブリ・ドラゴン・ドラゴンの効果発動！

このカードが召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを自分フィールドに特殊召喚できる！天使の施しで捨てたチューニング・サポータを特殊召喚！

生還の宝札の効果で俺はデッキからカードを一枚ドロー！」

「さらに墓地からボルト・ヘッジホッグの効果発動！場にチューナーモンスターがいる時、

ボルト・ヘッジホッグは特殊召喚できる！この効果で特殊召喚したとき場から離れたときは墓地にはいかず除外ツする、ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！

生還の宝札で一枚ドロー！」

「俺は

レベル4のデブリ・ドラゴンと

レベル2のチューニング・サポータと

レベル2のボルト・ヘッジホッグをチューニング！」

「「チューニング!?!」」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ!シンクロ召喚!飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!」

「シンクロ召喚!?!」

「さらにチューニング・サポータの効果発動!このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用した時、自分のデッキからカードを一枚ドローする、ドロー!スターダスト・ドラゴンでダイヤモンドガイを攻撃!シューティング・ソニック!」

「クウウウウ!」

エドのLP2900まで減った

「すごいドン、攻撃力2500のモンスターをだして手札が減ってないドン!」

「カードを二枚伏せ!ターンエンド!」

大樹 手札6

伏せ2

場1

「僕のターン！ドロー！先程のD-スピリッツの効果発動！このカードは自分の場にD-HEROがない時、手札からレベル4以下のD-HEROを特殊召喚できる！僕はD-HEROディスクガイを特殊召喚！ディスクガイを生け贄にして来い！

D-HEROダツシユガイを攻撃表示で召喚！さらに手札からフィールド魔法ダークシティを発動！

ダツシユガイ！スターダスト・ドラゴンに攻撃！」

ダーク・シティでダツシユガイの攻撃力が3100になった

「畏カードくず鉄のかかしを発動！相手モンスター一体の攻撃を無効にする、

発動後このカードは墓地に送らず、そのままセット！

このカード破壊されない限り毎ターンに一度だけ発動できるぞ」

「「「「「なっ！？」「「「「「

「つまり僕がそのカードを破壊しない限り、攻撃は1度は確実に防げるといことが、

十代よりやるようだな、ダツシユガイのエフェクト発動！バトルフェイズ終了後ダツシユガイは

守備になる！カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

エド 手札2

伏せ2

場1

「俺のターン！ドロー！俺は畏カードエンジェル・リフトを発動！  
チューニング・サポートを墓地から特殊召喚！

生還の宝札で一枚ドローする！

手札からクイック・シンクロンの効果発動！手札のモンスターを一枚墓地に捨て、

手札からクイック・シンクロンを特殊召喚できる！

チューナーモンスタークイック・シンクロンを特殊召喚！

さらにバトルフェーダーを召喚！

それとチューニング・サポーターはシンクロ召喚に使う時、レベル2として扱うことができる」

「凄いドン、次々モンスターが出てくるドン！」

「あれが天見大樹、カイザーにノーダメージで勝った男だ」

「俺はレベル5のクイック・シンクロンと

レベル1のバトルフェーダーと

レベル2になったチューニング・サポーターをチューニング！」

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

「2ターン連続で高レベルモンスター召喚！」

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる、

俺はダツシュガイと右の伏せカードを破壊する！タイダル・エナジ

ー！」

「なに！」

「さらに、チューニング・サポーターの効果でデッキから一枚ドロ  
ー！」

俺は速攻魔法サイクロンを発動！お前の伏せカードを破壊する！

これでフィールド魔法しか残ってない、

ジャンク・デストロイヤー！エドに直接攻撃！デストロイ・ナック  
ル！

スターダスト・ドラゴンの直接攻撃！シューティング・ソニック！」

「うわああああー！」

「そ、そんなエド・フェニックスが負けた」

「相変わらず」

「ふん！」

「腕が全く落ちてない」

「凄いドン」

「大樹さーん！」

「カイザーや他の学生が言っただけの事はあるか、今回は僕の負けだ」

「ああ、D・HEROの事は別に盗んだ訳でも、奪ったわけでもない、

正真正銘俺のだ、何故手に入ったかは俺に勝ってからだ」

「わかった、信じよう、僕はここで君の後輩だ、いずれ君を倒す！」

「オツケー！気が向いたら相手してやるよ江戸くん」

「江戸じゃない、エドだ！」

「俺に勝つか、俺に認めさせれば覚えてやる」

「大樹さ〜ン！」

「おっと！」

レイが大樹に抱きつき、大樹はレイを受け止め頭を撫でる

「へへへ〜」

「こんなところでイチャツクな！」

「これも、あいかわるずね」

エド Side

大樹は観戦していた生徒の方に歩き出した

僕はそのまま学園を出て斎王のそこに向かった

「お帰りエド、どうだった十代は？」

「十代は問題なく勝てた、しかし」

「しかし？」

「そのあと現れた天見大樹にLPを削れず負けた」

「！！！」

「それは本当か！？」

「ああ、シンクロモンスターと言う新しいモンスターにやられた」

「シンクロモンスター？（占いではそんな人物はでていない）」

僕が大樹の事を伝えると斎王は占いを始める

「これは！？」

「なにか、分かったのか？」

「魔術師！」

「結果は？」

「無限の可能性と出ている」

「そうか（シンクロモンスターにD・HERO）これで僕は失礼する」

「ああ、お休み。エド」

斎王 Side

「無限の可能性、敵になるなら邪魔な存在だが、手駒にすれば・・・」

## 21話 明日香VSコレ

大樹 Side

十代が江戸に破れてから、一晩たった、  
どうやら負けたショックでカードが白く見えるらしい

「アニキ…」

「どうすればいいザウルス？」

十代以外のメンバーがD・ホイールが置いてある倉庫に集まる

「ほっとけ」

「そんな、大樹君はアニキの事が心配じゃないんすか？」

「そつだドン？」

「十代の問題だ、メシを食べる気力があるなら死なんだろう」

「それもそつね」

「たしかに、今回は十代自身が乗り越えるしかない」

「明日香さんや三沢君まで」

「そんなに元気付けたいなら十代を決闘場に呼んで、お前らが裸踊

りでもして元気付けさせる」

「それはちょっと」

「ドン」

「つーか、なんでお前ら倉庫に来てるんだ？こっちはD・ホイールの調整に忙しいのに」

「ごめんなさい、こっちの方が落ち着くから」

「そうすっね」

「ていうか何やってるんだ、大樹？」

「新しいエンジンを作った、コレの微調整をしてるんだよ」

「作った!？」

「ああ、外国で珍しいのエンジンのパーツになる物を見つけたからな、

それをエンジンにして今は俺のD・ホイールのエンジンと交換して微調整やら

っち、こっちだと駄目だな、ブルーノがいれば速いけどやっぱり制御プログラムを一から作ったほうがいいな、

このコンセクトで…」

「なんかすごいッス」

「キーボードを叩くスピードがとんでもないな」

「いたのか、三沢？」

「いたよ」

「はは、大樹さん、三沢さんよりこれからの事じゃないかな？」

「そうだな、教頭がレッド寮を潰すのを諦めたとは思えんし」

「そうね」

「そうすっね」

「そうだドン」

「そうだな」

「そんな事……」

外からギター音が聞こえてきた

「なんだ？」

俺達は外に出て確かめたら、吹雪が船の上でギターを弾いていた

「兄さん！？」

「師匠！？」

「吹雪さん!？」

「誰だドン？」

「年長さんだ」

吹雪が影から上ってきた

「兄さん、どうしたの」

「お前を迎えにきた」

「え!？」

「おめでとう、明日香!」

俺が明日香に言う

「な、何が？」

「だって、吹雪と結婚するんだろ? 迎えに来たと言っただし? 大丈夫だ、兄弟でも俺は気にしない」

「なんだって—————!!!!」

「そうなんすっか!？」

「ドン!？」

「おめでとございます、明日香さん、世間の風当たりは厳しいけど、私は応援しますから」

「ちょっと、レイちゃんまで？なんで私がコレと結婚しないといけないのよ？」

「コレ」

吹雪が膝を着いた

「迎えに来たと言ったぞ、吹雪は？」

「違うわよ、コレは私をブルー寮に迎えに来たと言ったのよ」

「Kore……」

「そうなノーネ」

今度はクロノスカ、しかも小船を背負って崖を上ってきた

「シエノール明日香、アナタにはアイドル要請コースに戻っていただきすニヨーネ」

「お断りします」

「何故だい、明日香？」

「アイドル？」

「クロノス臨時校長は私と兄さんにユニットを組ませようとしているのよ」

「明日香はそれを嫌がってるのに、この二人は無理やり入れようとしてるの？」

「そう」

「ご愁傷様です、明日香さん」

「なんで？」

「この二人はしつこいですよ、明日香さんが入るといつまでやめな  
いと思います」

「そう」

「そつなノーネ」

「キモイな！」

「」「うん！」「」

「兄妹として恥ずかしいわ」

「だったらデュエルで決めればいいじゃないですか？」

「そうだな、アスりんゴツホー！」

「その呼び名で呼ばないで、殴るわよ？」

(( )) (( )) (( )) (( )) (( )) (( ))

「それじゃ、明日デュエルしてもらおうノーネ」

「だったらLPはお互い8000からやればいいじゃないか？」

「「「「8000!?!?」「」「」

「どうしてなの、大樹？」

「8000なら手札事故の言い訳も聞かないだろ、4000だと直ぐに決まる、

8000なら手札事故が起こっても挽回は出来る、これで明日香が勝てば文句はないはずだ

(ただ吹雪を出来るだけ大差で勝つためだけだ)

「ほ、僕はそれで構わないよ」

これで兄妹同士のデュエルが決まった

「明日香さんはどんな先方で行くんですか？」

「そうね、LPが8000だと長期戦になるし」

「コレを使え」

俺は明日香にデツキを渡した

「コレは？」

「圧倒的な差で勝たないとあいつら諦めなさそうだからな、これなら確実に勝てるだろう、それに吹雪は獣戦士族をつかうから、同じ種族デツキで負けたら少しはおとなしくなるだろう  
他の人が作ったデツキを使ってまでアイドルになりたくないと思表示にもなる」

「いいの？」

「明日香にはレイの面倒を見てもらったしな」

「むっっ」

「あ、ありがとう」

俺は明日香にデツキの流れを教えた

「さーて、いよいよなノーネ」

明日香は普通に登場したのに対し、吹雪は上から目立つように登場した

「はじまるすっよ」

「天上院くん」

「俺は寝る」

Side OUT

大樹はレイの膝に頭を置いて寝始めた

「貴様はこんなときに天上院君の応援をしないのか？」

「そうすっよ」

「そつだドン」

「今回、明日香が使うデッキは俺が構築した、負ける要素は殆んどない、それに昨日貴様達のせいでD・ホイールの整備を徹夜でする羽目になったんだ」

「……うっ」「」

「あはは」

レイは大樹の頭を優しく撫でて苦笑した

「もっと」

「は〜い」

（（（イチャツクな）））

大樹達が観客席争ってるあいだデュエルが開始された

「デュエル！！」

「僕のターン！ドロー！僕は漆黒の豹戦士パンサーウォリアーを召喚！カードを一枚伏せ！」

ターンエンド！」

「私のターン！ドロー！私は神獣王バルバロスを妥協召喚！」

「あれ？明日香はサイバー・ガールデツキじゃあ？」

「大樹が言ったのよ、私がどれだけ嫌かを馬鹿に教えるには馬鹿と同じ種族デツキ圧倒的倒すのがいいって」

「明日香：怒ってない？」

「大樹の言ったとおり、馬鹿は死んでも直らないみたいね」

明日香はこめかみヒクヒクと引きつらせながら口元がニヤけている

「カードを二枚伏せ！ターンエンド！」

「ぼ、僕のターン！ドロー！手札から魔法カード迷える子羊を発動！  
二体の子羊トークンを特殊召喚！バトル！パンサーウォリアーを攻撃させる為、

子羊トークンを生け贄にしてバルバロスに攻撃！」

「リバースカードオープン！禁じられた聖杯を発動！モンスターー  
体選択して、

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力を400ポイントアップし、効果は無効化される、私は神獣王バルバロスを選択」

吹雪 LP6600

「やるね、アスりん、僕はこのままターンエンド！」

「私のターン！ドロー！」

「あれなんでバルバロスの攻撃力が3000なんだい？禁じられた聖杯の効果はエンドフェイズまでじゃ？」

「大樹が言ってたのよ、エンドフェイズの後。攻撃力は1900になるんじゃないか3000になるって、私も1900に戻ると思ったけど、大樹は私達より細かくルールを知ってるみたい」

「もしかして、そのデッキは大樹君が？」

「そうよ、私はどうしても負けたくない」

「そ、そこまで嫌なのかい？」

「当たり前でしょう」

「それより、明日香は大樹君のことが好きだったのかい？」

「なっなにいつてるのよ？」

「だって、彼が作ったデツキで戦ったり、よく一緒にいたし」

「大樹にはレイちゃんがいるでしょう?」

「否定はしないんだね?」

「あ!」

「そっかー、あの明日香が」

「もういいでしょう!私のターン!ドロー!私は可変機獣ガンナー  
ドラゴンを妥協召喚!

そして罨カード亜空間物質転送装置を発動!可変機獣ガンナードラ  
ゴンをエンドフェイズまで除外!

ターンエンド!そして可変機獣ガンナードラゴンは場に戻る」

「なっ!?!攻撃力2800!?!」

「召喚がリセットされたの、妥協召喚はリセットされる見たいなの」

「クッ、僕のターン!ドロー!」

「すごいっす、二ターンで最上級モンスターを揃えたっす!」

「大樹が組んだだけのことはあるな、亜空間物質転送装置をこんな風に使うなんて」

「チツ」

「凄いドン！」

「僕はモンスターをセット！カードを一枚伏せターンエンド！（明日香が攻撃するのを待つしかない）」

「私のターン！ドロー！伏せカードは大方聖なるバリアでしょう兄さん？残念だけどこのターンで終わりよ！」

「まだ分からないよ明日香」

「私は魔法カード天使の施しつを発動！死者蘇生でパンサーウォリアーを特殊召喚！」

「モンスター三対生け贄して！来なさい神獣王バルバロス！」

「なぜ、わざわざ神獣王バルバロスを生け贄にしてまた神獣王バルバロスを召喚を？」

会場の皆が不思議に思っていた

「神獣王バルバロスは三対のモンスターを生け贄にして召喚すると、相手の場のカードを全て破壊するの」

「なにー！ー！で、でも攻撃力が足りないよ」

「さらに墓地の獣戦士族一体と機械族一体を除外して、獣神機王バルバロスU rを特殊召喚！

攻撃力は3800！でもこのカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージがゼロになる」

「ま、まさか手札に禁じられた聖杯が？」

「えい、私は装備魔法愚鈍の斧を、獣神機王バルバロスU rに装備するわ！

この装備カードを装備したモンスターの攻撃力を1000ポイントアップし、効果は無効化される、

そして装備モンスターのコントロールは自分のスタンバイフェイズごとに500ポイントのダメージを受けるけど、兄さんのLPはここで0になる、

二体のモンスターで直接攻撃！」

「うわああああー！」

吹雪は合計7800のダメージをつけてLPが0になった

「私の勝ちよ兄さん、」「これで諦めてもらっわ」

「わかったよ、でも僕は明日香も応援するよ」

「は？」

「ガンバ！略奪愛ンゴツホー」

「もう喋らないで」

「LP8000で3ターンで勝つなんて」

「とんでもないパワーデッキだな」

「何気にライフが減ってないし」

明日香のアイドル要請はなくなったが、数日後十代は行方不明になり、  
万条目は光の結社になるなど色々起きた

## 21話 明日香VSコレ（後書き）

禁じられた聖杯を使ったバルバロスがエンドフェイズのあとの攻撃力が3000に戻るいい説明が思いつきません、作者は馬鹿なので  
だれか知りませんか？Wikiでみたけど詳しく乗ってなかったなので

## 22話 3人のバトルロワイヤル

明日香 Side

十代が行方をくらましてから数日、ナポレオン教頭はレッド寮は邪魔だと言って  
性懲りもなく、レッド寮を賭けたデュエルを仕掛けてきた、  
最も本人がやるわけじゃないけど

大樹と十代に万丈目君以外は決闘場に向かった、待っていたのはナポレオン教頭にクロノス臨時校長  
私達が着いたと同時に対戦者が現れた

「「「エド・フェニックス!?!?!」」」

「教頭、よく彼がこのデュエルを承諾したノーネ?」

「挑戦者を倒せば天見と戦わせてやると約束したのである」

「シヨニール天見もよく受けたノーネ、彼はそう言ったことは引き受けないのに」

「・・・」

「約束道理、代表に勝てば大樹と戦えるんですね」

「どうやらエド・フェニックスの目的は大樹みたいね、大樹は今D・ホイールのテスト走行に出ている、彼はレッド寮を潰すと警告してある立て札を見ていない」

「立て札にはレッド寮の代表と学園の代表がレッド寮の取り壊しを賭けたデュエルをしろ、しないのなら問答無用でレッド寮を取り壊す」

「学園の代表はエド、レッド寮は私が立候補した、教頭は大樹がテスト走行してる間に仕掛けてきた」

「彼女が僕の相手か、なら早く終わらせて大樹と戦わせろ」

「エドはあれから大樹に挑んでいるが大樹はやる気が無いなどいって断っている」

「そ、そうなのである」

「どうやら大樹に言っていないらしい、大樹が来る前に私に勝ち、直ぐにレッド寮を潰すはらみたい」

「どうなっても知らないノーネ」

「ちょっとー！タンマ！大樹！ストップ！ストップ！」

懐かしい声が私達が来た方向から聞こえてきた、そこには大樹のD・ホイールが猛スピードでこっちに向かって来た

「おおおお、ぶつかる!!!!!!!!!!」

「何事であるか？」

「こっちに来るノーネ!？」

私達やエドは安全な場所に避難したが

「止まるノーネ!!!!」

「来るなであーる!!!!!!」

「イツヤツホーーーーoooooooooooo!!」

キキキ

教頭との距離は僅か数センチで大樹はD・ホイールをとめた

「見たか、十代、俺のドライビングテクニクを？」

「テクニクじゃねえ、死のピクニクだ!死ぬかと思ったぞ」

「ん、何してるのそこで、ブルドック教頭？」

「ぶ、ブルドック!？」

「お漏らしって歳か？」

よく見ると教頭は恐怖のあまり漏らしたようだ

パシ、パシ

大樹がカメラでナポレオン教頭を撮った  
大樹はレイちゃんの写真を何時でも撮れるようカメラを持ち歩いている

「な、何をとっているのでアルか？」

「風景、ただお前がた・ま・た・ま・そ・こ・に・い・た・だ・け・だ」

あの怒りようは立て札を見たようね

「「アニキ!？」」

「おお、お前等なんか久しぶりだな」

翔君達は大樹達のやり取りを無視をして十代に話しかけている

「待っている大樹、直ぐに終わらせる」

「は？何言ってるんだ？」

「何って、僕がレッド寮の代表とに勝ったら君が戦うといったじゃないか」

「んなもん知らんぞ、そうかブルドック、以前の言葉は難しかったか、だったら今度は言葉じゃなく行動で伝えよう、今撮った風景写真をネットで全世界にばら撒いたらわかるかな？」

「脅迫なのであるか？」

「ああん？俺はただ風景の写真を世界に流すだけだ」

明らかに脅迫なんだけど

「だから言ったノーネ、シヨニール天見を利用するなら人生を賭けないと駄目だよ」

クロノス臨時校長は間近で大樹が本気のところを見たことあるからおとなしい

「なんでエドが大樹とデュエルしたがつてるんだ？」

「アニキが負けたあと大樹君とデュエルして大樹君に負けてるッス」

「



退学事件のことか、懐かしいわね

「テムエの家族が橋の下や、駅前で物乞いをさせたいのなら好きにしろ」

これ以上やるなら家族もただじゃ置かないと脅迫してる  
ヤクザか暴力団ね

「待つのである」

「ああ、ワンワン煩いぞ、十代もしつこいからな、だったら十代の後に三人でバトルロワイヤルで決めよう」

「ふざけるな、十代とはやる意味がもう無い」

「んなこない、十代は新しいヒーロを手に入れたみたいだし」

「そつなのアニキ？」

「ああ、だから俺、早くエドや大樹とデュエルしたいぜ」

「こんな風にさつきから煩いんだよ」

「だから猛スピードで黙らせたの？」

「ああ、三人同時にやらないなら俺は帰るぞ、今走ったD・ホイールのデータを見たいからな」

「わかった、直ぐに終わらせる」

「オツケー、俺は此処でD・ホイールを弄ってるから、終わったら呼んでくれ」

「じゃあ、私は大樹さんと待つ」

「助かったのでアール」

「んな訳ねえだろ、ボケ」

「ボケ!？」

挑発、脅迫そしてまた挑発と順番にナポレオン教頭を攻める大樹

「教頭はやく行くノーネ」

大樹とレイちゃんを残し私達は決闘場に向かった

Side Out

十代vsエドは僅かの差で十代が勝った

大樹を呼びだし、三人が向かい合った

順番は

大樹、エド、十代

「『デュエル!!!』」

「俺のターン！ドロ！速攻魔法手札断札を発動！

お互い手札を二枚墓地に捨て、デッキから二枚ドロ！墓地に捨てたダンディライオンの効果で、

俺の場に綿毛トークンを二体特殊召喚！手札から永続魔法生還の宝札を発動！

ジャンク・シンクロンを召喚！ジャンク・シンクロンの効果でチューナー・サポーターを

墓地から特殊召喚！生還の宝札でデッキから一枚ドロ！」

「レベル1の綿毛トークン二体と

レベル1のチューニング・サポーターに

レベル3ノジャンク・シンクロンヲチューニング、来いゴヨウ・ガーディアン」

「『レベル6で攻撃力が2800!?!』」

「このモンスターの効果は相手モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターを自分の場に

守備表示で特殊召喚できるぞ！チューニング・サポーターの効果で一枚ドロー！

俺はカードを二枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札3

エド 手札5

十代

手札5

伏せ3（一枚オープン）

伏せ0

伏せ0

場1

場0

場0

「僕のターン！ドロー！D・HEROダイヤモンドガイを守備表示で召喚！」

カードを二枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札3

エド 手札3

十代

手札5

伏せ3（一枚オープン）

伏せ2

伏せ0

場1

場1

場0

「俺のターン！ドロー！俺はN・フレア・スカラベを守備表示で召喚！」

カードを一枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札3

エド 手札3

十代

手札4

伏せ3（一枚オープン）

伏せ2

伏せ1

場1

場1

場1

「俺のターン！ドロー！魔法カード天使の施しを発動！三枚ドロし二枚墓地に送る！」

俺はデブリ・ドラゴンを召喚！デブリ・ドラゴンの効果でシールド・ウィングを墓地から特殊召喚！

生還の宝札で一枚ドロ！畏カードリミット・リバーズ発動！自分の墓地から攻撃力1000以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚！チューニング・サポーターを選択して特殊召喚！  
生還の宝札で一枚ドロ！」

「レベル2のシールド・ウィングに

レベル2にしたチューニング・サポーターに

レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンク口召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

「大樹の場に高レベルモンスターが二体」

「手札も減ってない、相手にしてみれば厄介ね」

「僕は戦いたくないな」

「チューニング・サポーターの効果で一枚ドロ！バトルフェイズに入る、

ゴヨウ・ガーディアンでN・フレア・スカラベに攻撃！破壊したあと、

俺の場に守備表示で特殊召喚！スターダスト・ドラゴンでダイヤモンドガイに攻撃！」

「罠カードD・カウンターを発動！D・HEROと名のつくモンスターが攻撃対象に選択された時、攻撃モンスターを破壊する！」

「スターダスト・ドラゴンの効果発動！魔法・罫・効果モンスター  
の効果が発動した時、  
このカードを生け贄する事でその発動を無効にし破壊する。  
この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、  
この効果を発動するために生け贄にされ墓地に存在するこのカード  
を、  
自分フィールド上に特殊召喚することができる、  
俺はスターダスト・ドラゴンを生け贄にしてD・カウンターの効果  
を無効にして破壊！」

「チッ！」

「俺はカードを二枚伏せ！ターンエンド！この時スターダスト・ド  
ラゴンは墓地から特殊召喚！  
生還の宝札で一枚ドロ！」

大樹 手札5

エド 手札3

十代

手札4

伏せ4（一枚オープン）

伏せ1

伏せ1

場3

場1

場0

「僕のターン！ドロ！墓地からD・HERO デイアボリックガ

イのエフェクトを発動！

セメタリーにあるこのカードを除外して、デッキからD・HERO  
ディアボリックガイを一体

場に特殊召喚、そしてD・HERO ディスクガイを召喚！三対の  
D・HEROを生け贄にして

D・HERO ドグマガイを特殊召喚！ドグマガイ十代に直接攻撃  
！」

「畏発動！ガードブロック！戦闘ダメージ一度0にしてカードを一  
枚ドロー！」

「ターンエンド！」

大樹 手札5

エド 手札2

十代

手札5

伏せ4（一枚オープン）

伏せ1

伏せ0

場3

場1

場0

「俺のターン！ドロー！」

「ドグマガイの効果でお前のLPは半分になる

「くう、手札から魔法カード融合を発動！手札のE・HEROネク  
ロダークマンとバブルマンを融合

E・HEROアブソルトZeroを融合召喚！俺はカードを二

枚伏せ！ターンエンド！」

大樹 手札5

エド 手札3

十代

手札1

伏せ4（一枚オープン）

伏せ1

伏せ2

場3

場1

場1

LP4000

LP4000

LP

2000

「三人とも高レベルを召喚したな」

「三人とも凄いドン！」

「でも大樹さんが有利だね、手札が5枚に伏せカードが3枚、迂闊に攻撃できない」

「エドのモンスターをどう倒すかと、十代のモンスター効果も厄介ね」

「俺のターン！ドロー！」

「ドグマガイの効果でお前のLPが半分になる」

「俺は墓地からモンスター効果を発動！」

レベル・ステイラーは自分フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する！

ゴヨウ・ガーディアンレベル1下げて、場に特殊召喚！

生還の宝札で一枚ドロー！救世竜 セイヴァードラゴンを召喚！」

「レベル1のレベル・ステイラーと

レベル8のスターダスト・ドラゴンに

レベル1の救世竜 セイヴァードラゴンをチューニング！」

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！シンクロ召喚！光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

「このカードの効果は相手が魔法・罫・効果モンスターの効果を発

動した時、

このカードを生け贄にする事でその発動を無効にし、  
相手フィールド上のカードを全て破壊する」

「なに!?!」

「セイヴァー・スター・ドラゴンでE・HEROアブソルートZe  
roを攻撃!」

「速攻魔法禁じられた聖杯を発動するぜ!俺はセイヴァー・スター・  
ドラゴンを選択して効果を無効化する!」

「チツ、セイヴァー・スター・ドラゴンを生け贄にして禁じられた  
聖杯の発動を無効にし破壊する!  
さらにお前達の場を全て破壊!」

「畏にチエーンする、畏カード和睦の使者発動!」

「畏カード亜空間物質転送装置でD・HERO ドグマガイをエン  
ドフェイズまで除外!」

「畏カード魔宮の賄賂発動!エド畏を無効にし、カードを一枚ドロ  
ーさせる!」

「ゴヨウ・ガーディアンでエドに直接攻撃!」

「クウウウウ!!!」

「手札から魔法カードハリケーンを発動!カードを一枚伏せ!ターンエンド!」

大樹 手札 5

エド 手札 4

十代

手札 1

伏せ 3

伏せ 0

伏 0

場 3

場 0

場 0

LP 2000

LP 1200

LP

2000

「大樹以外の場は全部なくなった、十代は手札0、けどエドは迂闊に十代に攻撃できない」

「なんで」

「エドさんが攻撃して十代さんのLPを0にしても、大樹さんが一気に決めるからですよ」

「翔、お前はもう少し勉強した方がいいぞ」

「っっっ」

「エドと十代は協力して大樹を倒すのがセオリーね」

「でもアニキの手札は1枚しかないドン、大樹先輩を倒せてもエドが有利ザウルス」

「僕のターン！ドロー！D - HEROデイフェンドガイを守備表示！ターンエンドだ！」

大樹 手札5

エド 手札4

十代

手札1

伏せ1

伏せ0

伏0

場3

場1

場0

LP2000

LP1200

LP

2000

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード強欲な壺を発動！カードを二枚ドロー！」

エドのディフェンドガイの効果で一枚ドロー！手札かカード大嵐を発動！」

「罨カードレインボー・ライフ発動！手札を一枚すてこのターンのエンドフェイズ時まで、自分が受けるダメージは無効になり、その数値分ライフポイントを回復する」

「魔法カード！融合回収を発動！融合とバブルマンを手札に加える！手札から融合を発動！手札のスパークマンと沼地の魔神王を融合させる！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンを融合召喚！  
墓地のE・HERO一枚につき攻撃力が300ポイントアップ！  
E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は3100だ」

「十代が有利になったな、けど一気に決められない」

「それでも手札一枚から此処まで盛り返すのは流石か？」

「E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマンで  
ディフェンドガイを攻撃！破壊したモンスターの攻撃力分のダメー  
ジを受けてもらう、  
と言っても1000だけど」

「俺はターンエンドだ！」

大樹	手札5	エド	手札4	十代
手札2				
伏0		伏せ0		
場1		場0		
LP1700		LP1100		LP
2000				

「俺のターン！ドロー！」

俺は手札から永続魔法生還の宝札を発動！手札から死者蘇生を発動！  
スターダスト・ドラゴンを蘇生させる！生還の宝札で一枚ドロー！  
もう一枚の生還の宝札を発動！手札から魔法カード ワン・フォー・  
ワン を発動！

手札1枚のモンスターをコストに手札・デッキからレベル1のチューニング・サポーターを特殊召喚する！手札からジャンク・シンクロンを墓地に送り、

そして手札からエフェクト・ヴェーラーを召喚！」

「レベル1のチューニング・サポーターに

レベル1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘<sup>いざな</sup>う。光さす道となれ！シンク  
ロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンク  
ロ！」

「シンクロチューナー！？」「」「」「」

「フォーミュラ・シンクロンの効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時デッキから

カードを一枚ドローできる！ドロー！」

チューニング・サポーターの効果で一枚ドロー！（5枚）  
そして手札から魔法カードシンクロキャンセル発動！（4枚）

このカードの効果はフィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を融合デッキに戻す。

さらに、融合デッキに戻したこのモンスターのシンクロ召喚に使用した

モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、

この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

俺はフォーミュラ・シンクロンを融合デッキに戻し、

墓地からチューニング・サポーターとエフェクト・ヴェーラーを特殊召喚！

二枚の生還の宝札の効果で2枚ドロー！（6枚）

もう一度二体をチューニングして、

フォーミュラ・シンクロンをシンクロ召喚！カードを一枚ドロー！

チューニング・サポーターの効果で一枚ドロー！（8枚）

手札から魔法カードシンクロキャンセルをもう一度発動！（7枚）

フォーミュラ・シンクロンを融合デッキに戻し、

チューニング・サポーターとエフェクト・ヴェーラーを特殊召喚！

二枚の生還の宝札の効果で2枚ドロー！（9枚）

もう一度二体をチューニングして

フォーミュラー・シンクロンをシンクロ召喚！ドロー！

チューニング・サポーターの効果で一枚ドロー！（11枚）

「おいおい、大樹どれだけドロするんだ？」

「ちゃんと意味がある、俺は魔法カード死者への手向けを発動！

手札を一枚すてフィールドのモンスターを一体破壊する、

俺はシャイニング・フレア・ウィングマン破壊する！

貪欲な壺を発動！墓地のモンスターを5枚デッキに加えシャッフルする、

その後カードを二枚ドロ！」

「手札が10枚以上！」

「大樹さんは一気に決めるつもりみたい」

「なんてドロだドン」

「レベル8のスターダスト・ドラゴンと  
レベル2のフォーミュラー・シンクロンをチューニング！」

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！アクセルシンクロ！！生来せいらいせよ、シューティング・スター・ドラゴン！！」

「アクセルシンクロ！？」

「まだこんな切り札があったなんて」

「カッコいいっす、あのドラゴン」

「シューティング・スター・ドラゴンの効果はデッキから5枚めくり、このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする」

「じゃあ、デッキから過剰にドローしたのは！」

「ああ、デッキを圧縮して貪欲な壺でチューナーをデッキに戻し、少しでもチューナーモンスターをめくるためだ、シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！五枚めくる、

ジャンク・シンクロン

デブリ・ドラゴン

クズ鉄のかかし

救世竜 セイヴァー・ドラゴン

エフェクト・ヴェーラーの4枚、デッキに戻しシャッフル！」

「4回の攻撃権」

「マジかよー！」

「いけ、シューティング・スター・ドラゴン！」「スターダスト・ミラーージュ！」

シューティング・スター・ドラゴンが  
エドと十代に直接攻撃を決めた

「うわああああ！」

「うわああああ！」

「俺の勝ちだ！」

「あー、負けたー、今度こそ勝てると思ったけど」

「全くだ」

「江戸は今晚あいてるか？」

「江戸じゃない、エドだ。それがどうした？」

デュエルが終わり大樹の家

「なんでエドくんが此処にいるの？」

「そうだドン？」

「俺が招待した、つーか貴様らどうして俺の家にいる、ドレット頭に翔？」

「剣山でザウルス！」

「僕は翔って呼ばれてうもんね」

「お前は女子風呂を除いた勇者だから名前で読んでもらうだけだ」

「去年の話じゃないすつか、それに僕は覗いてないっすよ」

「確かに勇者ドン！」

「違うから」

「俺が招待したのは江戸に十代に明日香だけだ、なんで貴様ら此処にいる？」

「江戸じゃないエドだ！」

「いいじゃなすつか」

「そうザウルス」

「大樹の飯はやっぱうめえ！」

「レイおかわり頼めるか？」

「うん」

「レイちゃん僕も」

「自分でやってください覗き魔」

「だからちがウツス」

「あ、お前らは皿洗いと食費は出せ」

「何で!?!」

「招待してないのに来たからだ」

「もうすこし静かに食べれないのかしら」

「無理だな、まったく折角の酒が、不味くなる」

ジュニアは一人で淡々と酒を飲んだ

その後、二人が帰ったあと江戸のデッキを強化した  
江戸はこの島を拠点にするといっていた

「だから、江戸じゃないエドだ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5910o/>

---

遊戯王GX 未来からの来た決闘者

2010年11月26日22時02分発行